

第一章 わあわあな事

GS 1 節 心の意

GS 2 節 口（おのれ）

GS 3 節 はげみ

GS 4 節 老ふねいえ

GS 5 節 世の中

GS 6 節 道

GS 7 節 千じゅう数にちなんや

GS 8 節 花にちなんや

GS 9 節 楽しみ

GS 10 節 わあわあないえ

GS 11 節 象

GS 12 らん組やつ

第2章 わあわあな悪

GS 13 節 悪

GS 14 節 怒り

GS 15 節 汚れ

GS 16 節 欲と執着

GS 17 節 悪じといへ

第3章 わあわあな人

再考 真理の「」ver. 2 (再生版)

2021年4月8日

目次

第1部はじめに

第2部 詩文一覽

第1章 さまざま事

GS2 節古（おのわ

GS3 節はげみ

GS5 節世の中

中世の饅頭

九一
一
百
三
一

GS8 節花にちなんで

卷之三

GS 10 節 わあわあないん
GS 11 節 象
GS 12 節 わふ組わつ

GS 10 節	わがわがわがわい	16
GS 11 節	象	15
GS 12 節	わい組わい	14
第2節	わあわわわだ悪	13
GS 13 節	悪	12
20	20	18
17		16

第3節 さまざまの人

卷之三

GS 19 節修行僧 · · ·

第六節 道を実践する人

GS 21 節愚かな人 . . .

GS 22 節賢人

GS 24 節 ブツダ

G.S.24 節 フツタ

第三部 再考—真理のことば

記述方法の説明

そこで本書では中村氏の使った章（本書ではOSと記す。）と前回使用した章（FS）に対応する単位を節（GS）とし、それらの節を内容によりてver.1と同様に3つに分類し、「第1章 さもざまな事」、「第2章 さもざまな惡」、「第3章 さもざまな人」という章を作りました。各章、節の名前と順を、図1に示します。

この結果、「OS10 暴力」と「OS16 愛するもの」「OS26 バラモン」は章を解体し、「GS18 仏弟子」を新設しました。

また、中村氏の詩文では、仏教用語の使い方もありやぶやな部分が非常に多いため、主に付録で、仏教用語を調べ定義を行い、出来るだけ定義した言葉で詩文を書き換え訂正を行いました。お釈迦様の教えとしてのお経に親しんでいない方々にもなるべく正しく教えを伝えられるようにしたこの作業によつて、使われる単語が激減して、中村氏が再現なさつた美しさや文学性が犠牲となりました。

また、訂正ではどうしても対応できない詩に関しては、ヒンズー（バラモン）教の詩が混ざった可能性が高いと判断しましたので、削除しました（第5部に書き出しました）。おそらく、「ブッダゴーサによる「真理のことば」編纂時に編入されたものではないかと、当方は考えています。

お釈迦様はヒンズー教とバラモンを批判なさつたのですが、一方で、バラモンが正しく存在していた時のお話を、「ブッダの言葉第二小なる章 7 バラモンに相應しいこと」で説かれてらっしゃいます。その中で、真人であるバラモンは武器で守られたのではないか法（真理）に守られていたとお説きになつています。

元来、仏という字はムの人間という意味で、真人間（真人）を意味するのではないかと考えております。古来は、このような人間が圧倒的に多く、地球が平和で豊かであったのではないかと思うのです。

図1 中村氏と本書の章と節の割振り

本書での章一節の割振り		中村元氏版章の割振り	
章題	節番	節題	詩の数
GS18 節 仏弟子	GS01	心と意	9
GS19 節 修行僧	GS02	己（おのれ）	9
GS20 節 道を実践する人	GS03	はげみ	12
GS21 節 愚かな人	GS04	老いること	12
GS22 節 賢い人	GS05	世の中	12
GS23 節 真人	GS06	道	15
GS24 節 ブッダ	GS07	千という数にちなんで	13
	GS08	花にちなんで	14
	GS09	楽しみ	13
	GS10	さまざまのこと	9
	GS11	象	13
	GS12	ひと組ずつ	14
	GS13	悪	13
	GS14	怒り	14
	GS15	汚れ	19
	GS16	欲と執着	20
	GS17	悪いところ	11
	GS18	仏弟子(**)	17
	GS19	修行僧	32
	GS20	道を実践する人	9
	GS21	愚かな人	16
	GS22	賢い人	14
	GS23	真人	20
	GS24	ブッダ	20

(**)は新設した章

(*)は解体した章

第4部 付録

付録1 魂と脳と守護霊 最終版—リプレイス

付録2 「心を整える」と「心が治まる」と「心を憤（へん）む」についての考察

「心を整える」と「心が治まる」

心を憤む

付録3 仏道

(1) 四諦

(2) 仏道

(3) 仏道の目標

付録4 人間の分類

(1) 分類方法

(2) 仏弟子

(3) 修行者

付録5 心の汚れ

(1) 汚れと煩悩

(2) 欲と執着

(「コーヒーブレイク）仏道のキーナンバー

（「コーヒーブレイク）三界についての思想

付録6 武力と暴力

付録7 さとりと空

(1) さとりと解脱と涅槃

(2) 空相色

(3) 般若心経

(4) 諸行無常、一切皆苦、諸法非我

第5部 除削説

謝辞

第1部 はじめに

経緯

本書は【再考「真理のいとば」ver. 2（再生版）】となりました。

中村元氏著の「真理のいとば」（岩波文庫）を元に書き始めたブログ記事

（<http://tsukiyonoryu.seesaa.net/article/467312289.html>）

をまとめたものが【再考「真理のいとば」月夜の龍著】（初版）

（<http://tsukiyonoryu.seesaa.net/article/464214534.html>）

となりました。初版をマイナーチューニングしたものが【再考「真理のいとば」ver. 1（修正版）】

（<http://tsukiyonoryu.seesaa.net/article/467312289.html>）

です。

上記のブログ記事の着手の2017年から4年近く、初版からも一年の歳月が過ぎ、大幅な改正が必要であると感じましたので、【再考「真理のいとば」ver. 2（再生版）】として記しました。主な変更点は、主に「真理のいとば 第3章 もともとまな人」の節編成（以下にも記します。）と「本書第4部 付録」の充実と改訂です。各付録とも内容を大幅に増やし、さらに「付録7 さとりと空」を新設しました。

導入

お釈迦様の直接の教えが、「真理のいとば」と「アッダのいとば」には非常に多いと言われています。これは、お釈迦様を慕う先人たちの忍耐と努力の結晶で、感謝してもしねくせないほどです。

「真理のいとば」は、短く、お釈迦様の教えの一部ですが、原始仏教の教えとされ、その中核に位置すると当方は思うと同時に、分類、順序を中心にかなり乱れていると感じ、この混乱を解きほぐすことを目当てとして、本シリーズを記しています。最も参考にしているものは、日本の神道の「二三三神示」であり、本書ではたくさんの引用をさせていただいております。なかでも、「真理のいとば」の再著作業を遂行するにあたり、いつも注意を払ったのは、「何事も順正しくやりて下されよ、神は順であるぞ、順乱れた所には神の能（はたらき）現はれんぞ。」という教えです。

G番号順 2/4

G105	GS09	F106	FS09	B271	O204	OS15	G160	GS14	F161	FS14	B293	O133	OS10
G106	GS09	F107	FS09	B272	O205	OS15	G161	GS14	F162	FS14	B294	O134	OS10
G107	GS09	F108	FS09	B273	O206	OS15	G162	GS14	F163	FS14	B301	O223	OS17
G108	GS09	F109	FS09	B274	O207	OS15	G163	GS14	F164	FS14	B303	新設	OS17
G109	GS09	F110	FS09	B275	O208	OS15	G164	GS14	F165	FS14	B304	O227	OS17
G110	GS10	F111	FS10	B239	O290	OS21	G165	GS14	F166	FS14	B305	O228	OS17
G111	GS10	F112	FS10	B240	O291	OS21	G166	GS14	F167	FS14	B306	O229	OS17
G112	GS10	F113	FS10	B241	O292	OS21	G167	GS14	F168	FS14	B307	O230	OS17
G113	GS10	F114	FS10	B242	O293	OS21	G168	GS14	F169	FS14	B308	O231	OS17
G114	GS10	F115	FS10	B243	O302	OS21	G169	GS14	F170	FS14	B309	O232	OS17
G115	GS10	F116	FS10	B246	O305	OS21	G170	GS14	F171	FS14	B310	O233	OS17
G116	GS10	F117	FS10	B353	O217	OS16	G171	GS14	F172	FS14	B311	O234	OS17
G117	GS10	F118	FS10	B244	O303	OS21	G172	GS15	F173	FS15	B312	O235	OS18
G118	GS10	F119	FS10	B245	O304	OS21	G173	GS15	F174	FS15	B313	O238	OS18
G119	GS11	F120	FS11	B247	O320	OS23	G174	GS15	F175	FS15	B314	O239	OS18
G120	GS11	F121	FS11	B248	O321	OS23	G175	GS15	F176	FS15	B315	O240	OS18
G121	GS11	F122	FS11	B249	O323	OS23	G176	GS15	F177	FS15	B316	O241	OS18
G122	GS11	F123	FS11	B250	O324	OS23	G177	GS15	F178	FS15	B317	O242	OS18
G123	GS11	F124	FS11	B251	O325	OS23	G178	GS15	F179	FS15	B318	O243	OS18
G124	GS11	F125	FS11	B252	O326	OS23	G179	GS15	F180	FS15	B319	O244	OS18
G125	GS11	F126	FS11	B253	O327	OS23	G180	GS15	F181	FS15	B320	O245	OS18
G126	GS11	F127	FS11	B254	O328	OS23	G181	GS15	F182	FS15	B321	O246	OS18
G127	GS11	F128	FS11	B255	O329	OS23	G181	GS15	F182	FS15	B321	O247	OS18
G128	GS11	F129	FS11	B256	O330	OS23	G182	GS15	F183	FS15	B322	O248	OS18
G129	GS11	F130	FS11	B257	O331	OS23	G183	GS15	F184	FS15	B323	O249	OS18
G130	GS11	F131	FS11	B258	O332	OS23	G184	GS15	F185	FS15	B324	O250	OS18
G131	GS11	F132	FS11	B259	O333	OS23	G185	GS15	F186	FS15	B325	O251	OS18
G132	GS12	F133	FS12	B001	O001	OS01	G186	GS15	F187	FS15	B326	O252	OS18
G133	GS12	F134	FS12	B002	O002	OS01	G187	GS15	F188	FS15	B327	O253	OS18
G134	GS12	F135	FS12	B003	O003	OS01	G188	GS15	F189	FS15	B302	O226	OS17
G135	GS12	F136	FS12	B004	O004	OS01	G189	GS15	F190	FS15	B328	O254	OS18
G136	GS12	F137	FS12	B005	O005	OS01	G190	GS15	F191	FS15	B329	O255	OS18
G137	GS12	F138	FS12	B006	O006	OS01	G191	GS16	F192	FS16	B330	O334	OS24
G138	GS12	F139	FS12	B007	O007	OS01	G192	GS16	F193	FS16	B331	O335	OS24
G139	GS12	F140	FS12	B008	O008	OS01	G193	GS16	F194	FS16	B332	O336	OS24
G140	GS12	F141	FS12	B009	O011	OS01	G194	GS16	F195	FS16	B351	O212	OS16
G141	GS12	F142	FS12	B010	O012	OS01	G194	GS16	F195	FS16	B351	O213	OS16
G142	GS12	F143	FS12	B011	O013	OS01	G194	GS16	F195	FS16	B351	O214	OS16
G143	GS12	F144	FS12	B012	O014	OS01	G194	GS16	F195	FS16	B351	O215	OS16
G144	GS12	F145	FS12	B013	O019	OS01	G195	GS16	F196	FS16	B352	O216	OS16
G145	GS12	F146	FS12	B014	O020	OS01	G195	GS16	F196	FS16	B351	O213	OS16
G146	GS13	F147	FS13	B350	O209	OS16	G195	GS16	F196	FS16	B351	O214	OS16
G147	GS13	F148	FS13	B276	O116	OS09	G195	GS16	F196	FS16	B351	O215	OS16
G148	GS13	F149	FS13	B277	O117	OS09	G195	GS16	F196	FS16	B351	O216	OS16
G149	GS13	F150	FS13	B278	O118	OS09	G196	GS16	F197	FS16	B333	O337	OS24
G150	GS13	F151	FS13	B279	O119	OS09	G197	GS16	F198	FS16	B334	O338	OS24
G151	GS13	F152	FS13	B280	O120	OS09	G198	GS16	F199	FS16	B335	O339	OS24
G152	GS13	F153	FS13	B281	O121	OS09	G199	GS16	F200	FS16	B336	O341	OS24
G153	GS13	F154	FS13	B282	O122	OS09	G200	GS16	F201	FS16	B337	O340	OS24
G154	GS13	F155	FS13	B283	O123	OS09	G201	GS16	F202	FS16	B338	O342	OS24
G155	GS13	F156	FS13	B284	O124	OS09	G201	GS16	F202	FS16	B338	O343	OS24
G156	GS13	F157	FS13	B285	O125	OS09	G202	GS16	F203	FS16	B339	O344	OS24
G157	GS13	F158	FS13	B287	O127	OS09	G203	GS16	F204	FS16	B340	O345	OS24
G158	GS13	F159	FS13	B288	O128	OS09	G203	GS16	F204	FS16	B340	O346	OS24
G159	GS14	F160	FS14	B300	O222	OS17	G204	GS16	F205	FS16	B341	O347	OS24
G159	GS14	F160	FS14	B085	O094	OS07	G205	GS16	F206	FS16	B342	O356	OS24

当方は、インドにおける真人たるバラモンの墮落が、お釈迦様のヒンズー教刷新のためのいわゆる仏教流布へとつながったのではないかと考えています。

他方で、お釈迦様の教えは、お釈迦様への個人崇拜ではなく、この諸行無常の世の中にあって、絶対不変の真理に依拠して大多数を占める在家者たちを正しく教え導くといういたってシンプルで常識的なものであったと確信しております。そして、自分たちのための教えを必要としていた大多数の庶民から、強い支持を得たのでしよう。

お釈迦様の教えは、各個人が正しく生き真人や仏へと進化させることができるので、全ての者に示された教えだと、当方は信じています。仏道という言葉には、この意味を込めました。

以上のような観点と一二三神示地つ卷第11帖（148）（下記引用あり）から、「バラモン」という言葉は使用せず、「修行僧」に集約しました。

（引用始）

一二三神示地つ卷第11帖（148）

「世界丸めて一つの国にするぞと申してあるが、國はそれぞの色の違ふ臣民によりて一つ一つの国作らすぞ。その心々によりて、それぞれの教作らすのぞ。旧きものまかりて、また新しくなるのぞ、その心々（こころ）ころの國と申すは、心々の國であるぞ、一つの王で治めるのぞ。天つ日嗣の実子様が世界中照らすのぞ。」

（引用終）

個人的には、バラモンは、主にインドと中国の一部（ある特定の地域）で作られた教えの役職的地位と捉えるべきでしよう。

中村氏の「真理のことば」では、靈格という観点がありませんが、本書では順を正すことが一つの目的ですので、靈格を降順で「神」み仏（ブッダ）『真人』「一般人」と考えて詩文の整理を行いました。神がみ仏（ブッダ）を呼ぶ場合はブッダともなりますが、人類はみ仏もしくは仏様とお呼びすることになります。またコメントにおいては、明らかにお釈迦様に限定されている場合は、み仏は使わず、「お釈迦様」を使用しました。

まとめると、本書では、「真理のことば」の再考作業として、

第一に、章・節・詩の編成と順序の変更（OS10章 暴力、OS16章 愛するもの、OS26章 バラモンは解散、GS18節 仏弟子 新設）

第二に、仏教用語の定義や常識的な概念導入に伴う、詩文の変更

第三に、不要な詩や文章の削除

を行いました。

また、「真理のことば」は「法句經」とも言われますが、少し古い訳出書である

「荻原雲来氏訳の法句經（ダンマパダ）<https://twitter.com/hokkugyo2>」「立花俊道氏訳の法句經（ダンマパダ）<https://twitter.com/hokkugyo2>」

さらに、浄土宗大辞典WEB版を参照にしました。
中村氏の精緻な注釈訳詩があつてこそ、やがてに、引用させていただいた丁寧で良心的な文献が、書店でインターネットで手軽に入れるわが国の平和で安定した社会情勢との文献の維持に携わられた方々に心より敬意と感謝を表します。
今後、本書の「真理のことば」の書き換えの必要が生じ、人が書き換えを行う際には、ブッダゴーサの編纂時に起きた悲劇を防止するため、本書と同様に過去の詩を記し、新しい詩を書くという形での書き換えを行つてください。

（合掌）

新旧の詩番号対応表

「真理のことば」における、章、節、詩の記号と番号は以下の通りです。

- OS 番号と O 番号は、それぞれ、中村元氏著「真理のことば」（岩波文庫）の章番号と詩番号です。
 - FS 番号と F 番号は、【再考「真理のことば」月夜の龍著】と【再考「真理のことば」ver.1】で用いた章番号と詩番号です。
 - GS 番号と G 番号はそれぞれ本書の節記号と詩番号のシリアル番号です。
- 新旧章・詩番号の検索表を以下に掲載します。①の表のエクセルデータは、
- [https://tsukiyonoryu.up.seesaa.net/image/
E79C9FE79086E381AE38193E381A8E381B0E8A9A9E7AF80E795AAE58FB7.xlsx](https://tsukiyonoryu.up.seesaa.net/image/E79C9FE79086E381AE38193E381A8E381B0E8A9A9E7AF80E795AAE58FB7.xlsx)
- にアップしてありますので、ご活用ください。

Ver.2 番号	Ver.1 番号	ログ	中村氏オリジナル
詩番号	節番号	詩番号	詩番号
G001 GS01	F001 FS01	B027	0033 OS03
G002 GS01	F002 FS01	B028	0034 OS03
G003 GS01	F003 FS01	B029	0035 OS03
G004 GS01	F005 FS01	B031	0037 OS03
G005 GS01	F006 FS01	B032	0038 OS03
G006 GS01	F007 FS01	B033	0039 OS03
G007 GS01	F008 FS01	B034	0040 OS03
G008 GS01	F009 FS01	B034	0041 OS03
G009 GS01	F010 FS01	B035	0042 OS03
G010 GS02	F011 FS01	B036	0043 OS03
G011 GS02	F012 FS02	B178	0160 OS12
G012 GS02	F013 FS02	B179	0157 OS12
G013 GS02	F014 FS02	B180	0161 OS12
G014 GS02	F015 FS02	B181	0162 OS12
G015 GS02	F016 FS02	B182	0158 OS12
G016 GS02	F017 FS02	B184	0164 OS12
G017 GS02	F018 FS02	B185	0163 OS12
G018 GS02	F019 FS02	B186	0165 OS12
G019 GS03	F021 FS03	B015	0021 OS02
G020 GS03	F022 FS03	B016	0022 OS02
G021 GS03	F023 FS03	B017	0023 OS02
G022 GS03	F024 FS03	B018	0024 OS02
G023 GS03	F025 FS03	B019	0025 OS02
G024 GS03	F026 FS03	B020	0026 OS02
G025 GS03	F027 FS03	B021	0027 OS02
G026 GS03	F028 FS03	B022	0028 OS02
G027 GS03	F029 FS03	B023	0029 OS02
G028 GS03	F030 FS03	B024	0030 OS02
G029 GS03	F031 FS03	B025	0031 OS02
G030 GS03	F032 FS03	B026	0032 OS02
G031 GS04	F033 FS04	B215	0146 OS11
G032 GS04	F034 FS04	B216	0147 OS11
G033 GS04	F035 FS04	B217	0148 OS11
G034 GS04	F036 FS04	B295	0135 OS10
G035 GS04	F037 FS04	B218	0149 OS11
G036 GS04	F038 FS04	B219	0150 OS11
G037 GS04	F039 FS04	B220	0151 OS11
G038 GS04	F040 FS04	B221	0152 OS11
G039 GS04	F041 FS04	B222	0153 OS11
G040 GS04	F042 FS04	B223	0154 OS11
G041 GS04	F043 FS04	B224	0155 OS11
G042 GS04	F044 FS04	B225	0156 OS11
G043 GS05	F045 FS05	B203	0167 OS13
G044 GS05	F046 FS05	B204	0168 OS13
G045 GS05	F047 FS05	B205	0169 OS13
G046 GS05	F048 FS05	B206	0170 OS13
G047 GS05	F049 FS05	B207	0171 OS13
G048 GS05	F050 FS05	B208	0172 OS13
G049 GS05	F051 FS05	B209	0173 OS13
G050 GS05	F052 FS05	B210	0174 OS13
G051 GS05	F053 FS05	B211	0175 OS13
G052 GS05	F054 FS05	B212	0176 OS13
G053 GS05	F055 FS05	B213	0177 OS13
G054 GS05	F056 FS05	B214	0178 OS13

G番号順 1/4

G番号順 3/4

G205	GS16	F206	FS16	B342	O357	OS24
G205	GS16	F206	FS16	B342	O358	OS24
G205	GS16	F206	FS16	B342	O359	OS24
G206	GS16	F207	FS16	B343	O349	OS24
G207	GS16	F208	FS16	B344	O350	OS24
G208	GS16	F209	FS16	B345	O355	OS24
G209	GS16	F210	FS16	B354	O218	OS16
G210	GS16	F211	FS16	B346	O354	OS24
G211	GS17	F212	FS17	B357	O306	OS22
G212	GS17	F213	FS17	B358	O309	OS22
G213	GS17	F214	FS17	B359	O310	OS22
G214	GS17	F215	FS17	B360	O312	OS22
G215	GS17	F216	FS17	B361	O314	OS22
G216	GS17	F217	FS17	B362	O315	OS22
G217	GS17	F218	FS17	B363	O316	OS22
G218	GS17	F219	FS17	B364	O317	OS22
G219	GS17	F220	FS17	B365	O318	OS22
G220	GS17	F221	FS17	B366	O319	OS22
G221	GS17	F222	FS17	B286	O126	OS09
G222	GS18	F291	FS22	B126	O183	OS14
G223	GS18	F292	FS22	B127	O185	OS14
G224	GS18	F310	FS23	B109	O360	OS25
G225	GS18	F311	FS23	B110	O361	OS25
G226	GS18	F297	FS22	B131	O188	OS14
G227	GS18	F298	FS22	B132	O189	OS14
G228	GS18	F299	FS22	B134	O190	OS14
G228	GS18	F299	FS22	B134	O191	OS14
G229	GS18	F300	FS22	B133	O192	OS14
G230	GS18	F306	FS23	B106	O392	OS26
G231	GS18	F296	FS22	B130	O194	OS14
G232	GS18	F301	FS22	B260	O296	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B261	O297	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B262	O298	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B263	O299	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B264	O300	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B265	O301	OS21
G233	GS18	F260	FS19	B299	O143	OS10
G233	GS18	F260	FS19	B299	O144	OS10
G234	GS18	F302	FS22	B066	O075	OS06
G235	GS18	F323	FS23	B122	O364	OS25
G236	GS18	F294	FS22	B121	O368	OS25
G236	GS18	F294	FS22	B121	O381	OS25
G237	GS18	F343	FS24	B158	O384	OS26
G238	GS18	F295	FS22	B129	O187	OS14
G239	GS19	F342	FS24	B150	O388	OS26
G240	GS19	F305	FS23	B105	O375	OS25
G241	GS19	F314	FS23	B114	O390	OS26
G242	GS19	F304	FS23	B298	O142	OS10
G243	GS19	F285	FS21	B098	O266	OS19
G244	GS19	F286	FS21	B099	O267	OS19
G245	GS19	F307	FS23	B107	O365	OS25
G246	GS19	F308	FS23	B108	O366	OS25
G247	GS19	F333	FS24	B142	O393	OS26
G248	GS19	F334	FS24	B367	O307	OS22
G249	GS19	F335	FS24	B143	O394	OS26
G250	GS19	F336	FS24	B144	O395	OS26
G251	GS19	F337	FS24	B145	O396	OS26

G252	GS19	F284	FS21	B096	O264	OS19
G253	GS19	F303	FS23	B297	O141	OS10
G254	GS19	F312	FS23	B111	O363	OS25
G255	GS19	F313	FS23	B113	O379	OS25
G256	GS19	F315	FS23	B116	O369	OS25
G256	GS19	F315	FS23	B116	O377	OS25
G257	GS19	F316	FS23	B117	O370	OS25
G258	GS19	F290	FS21	B103	O271	OS19
G258	GS19	F290	FS21	B103	O272	OS19
G259	GS19	F317	FS23	B119	O371	OS25
G260	GS19	F318	FS23	B368	O308	OS22
G261	GS19	F319	FS23	B369	O311	OS22
G262	GS19	F320	FS23	B370	O313	OS22
G263	GS19	F332	FS24	B141	O389	OS26
G264	GS19	F321	FS23	B120	O373	OS25
G264	GS19	F321	FS23	B120	O374	OS25
G265	GS19	F322	FS23	-	O181	OS14
G266	GS19	F326	FS23	B125	O382	OS25
G267	GS19	F328	FS24	B137	O383	OS26
G268	GS19	F324	FS23	B123	O378	OS25
G269	GS19	F330	FS24	B139	O415	OS26
G270	GS19	F331	FS24	B140	O416	OS26
G271	GS20	F278	FS21	B090	O256	OS19
G271	GS20	F278	FS21	B090	O257	OS19
G272	GS20	F279	FS21	B091	O258	OS19
G273	GS20	F280	FS21	B092	O259	OS19
G274	GS20	F281	FS21	B093	O260	OS19
G275	GS20	F282	FS21	B094	O261	OS19
G276	GS20	F283	FS21	B095	O262	OS19
G276	GS20	F283	FS21	B095	O263	OS19
G277	GS20	F287	FS21	B100	O268	OS19
G277	GS20	F287	FS21	B101	O269	OS19
G278	GS20	F288	FS21	B100	O268	OS19
G278	GS20	F288	FS21	B101	O269	OS19
G279	GS20	F289	FS21	B102	O270	OS19
G280	GS21	F223	FS18	B051	O060	OS05
G281	GS21	F224	FS18	B052	O061	OS05
G282	GS21	F225	FS18	B053	O062	OS05
G283	GS21	F226	FS18	B054	O063	OS05
G284	GS21	F227	FS18	B055	O064	OS05
G285	GS21	F228	FS18	B056	O065	OS05
G286	GS21	F229	FS18	B057	O066	OS05
G287	GS21	F230	FS18	B058	O067	OS05
G288	GS21	F231	FS18	B059	O068	OS05
G289	GS21	F232	FS18	B060	O069	OS05
G290	GS21	F233	FS18	B296	O136	OS10
G291	GS21	F234	FS18	B061	O070	OS05
G292	GS21	F235	FS18	B062	O071	OS05
G293	GS21	F236	FS18	B063	O072	OS05
G294	GS21	F237	FS18	B065	O074	OS05
G295	GS21	F238	FS18	B064	O073	OS05
G296	GS22	F293	FS22	B128	O184	OS14
G297	GS22	F240	FS19	B104	O380	OS25
G298	GS22	F239	FS19	B071	O080	OS06
G299	GS22	F241	FS19	B083	O091	OS07
G300	GS22	F242	FS19	B067	O076	OS06
G301	GS22	F243	FS19	B069	O078	OS06

O番号順 2/4

G080	GS07	F082	FS07	B236	O113	OS08	
G081	GS07	F083	FS07	B237	O114	OS08	
G082	GS07	F084	FS07	B238	O115	OS08	
G147	GS13	F148	FS13	B276	O116	OS09	
G148	GS13	F149	FS13	B277	O117	OS09	
G149	GS13	F150	FS13	B278	O118	OS09	
G150	GS13	F151	FS13	B279	O119	OS09	
G151	GS13	F152	FS13	B280	O120	OS09	
G152	GS13	F153	FS13	B281	O121	OS09	
G153	GS13	F154	FS13	B282	O122	OS09	
G154	GS13	F155	FS13	B283	O123	OS09	
G155	GS13	F156	FS13	B284	O124	OS09	
G156	GS13	F157	FS13	B285	O125	OS09	
G221	GS17	F222	FS17	B286	O126	OS09	
G157	GS13	F158	FS13	B287	O127	OS09	
G158	GS13	F159	FS13	B288	O128	OS09	
削除				B289	O129	OS10	
削除				B290	O130	OS10	
削除				B291	O131	OS10	
削除				B292	O132	OS10	
G160	GS14	F161	FS14	B293	O133	OS10	
G161	GS14	F162	FS14	B294	O134	OS10	
G034	GS04	F036	FS04	B295	O135	OS10	
G290	GS21	F233	FS18	B296	O136	OS10	
G031	GS04	F033	FS04	B215	O146	OS11	
G032	GS04	F034	FS04	B216	O147	OS11	
G033	GS04	F035	FS04	B217	O148	OS11	
G035	GS04	F037	FS04	B218	O149	OS11	
G036	GS04	F038	FS04	B219	O150	OS11	
G037	GS04	F039	FS04	B220	O151	OS11	
G038	GS04	F040	FS04	B221	O152	OS11	
G039	GS04	F041	FS04	B222	O153	OS11	
G040	GS04	F042	FS04	B223	O154	OS11	
G041	GS04	F043	FS04	B224	O155	OS11	
G042	GS04	F044	FS04	B225	O156	OS11	
G043	GS02	F013	FS02	B179	O157	OS12	
G044	GS02	F014	FS02	B180	O161	OS12	
G045	GS02	F015	FS02	B181	O162	OS12	
G046	GS02	F016	FS02	B182	O158	OS12	
削除	GS02	F017	FS02	B183	O159	OS12	
G047	GS02	F018	FS02	B185	O163	OS12	
G048	GS05	F050	FS05	B208	O172	OS13	
G049	GS05	F051	FS05	B209	O173	OS13	
G050	GS05	F052	FS05	B210	O174	OS13	
G051	GS05	F053	FS05	B211	O175	OS13	
G052	GS05	F054	FS05	B212	O176	OS13	
G053	GS05	F055	FS05	B213	O177	OS13	
G054	GS05	F056	FS05	B214	O178	OS13	
G342	GS24	F348	FS25	B162	O179	OS14	
G343	GS24	F349	FS25	B163	O180	OS14	
G265	GS19	F322	FS23	B223	-	O181	OS14
G309	GS22	F251	FS19	B164	O182	OS14	
G222	GS18	F291	FS22	B126	O183	OS14	
G296	GS22	F293	FS22	B128	O184	OS14	
G223	GS18	F298	FS22	B132	O185	OS14	
G228	GS18	F299	FS22	B134	O190	OS14	
G228	GS18	F299	FS22	B134	O191	OS14	
G229	GS18	F300	FS22	B133	O192</td		

G番号順 4/4

O番号順 1/4

Ver.2 番号	Ver.1 番号	プログ	中村氏オリジナル
詩番号	節番号	詩番号	詩番号
		節番号	詩番号
G094	GS08	F096	FS08
G095	GS08	F097	FS08
G096	GS08	F098	FS08
G096	GS08	F098	FS08
G097	GS08	F098	FS08
G280	GS21	F223	FS18
G281	GS21	F224	FS18
G282	GS21	F225	FS18
G283	GS21	F226	FS18
G284	GS21	F227	FS18
G285	GS21	F228	FS18
G286	GS21	F229	FS18
G287	GS21	F230	FS18
G288	GS21	F231	FS18
G289	GS21	F232	FS18
G291	GS21	F234	FS18
G292	GS21	F235	FS18
G293	GS21	F236	FS18
G295	GS21	F238	FS18
G294	GS21	F237	FS18
G234	GS18	F302	FS22
G300	GS22	F242	FS19
G305	GS22	F247	FS19
G301	GS22	F243	FS19
G312	GS22	F254	FS19
G298	GS22	F239	FS19
G303	GS22	F245	FS19
G312	GS22	F254	FS19
G302	GS22	F244	FS19
G306	GS22	F248	FS19
G314	GS22	F256	FS19
G315	GS22	F257	FS19
G315	GS22	F257	FS19
G316	GS22	F258	FS19
G317	GS23	F269	FS20
G318	GS23	F270	FS20
G319	GS23	F338	FS24
G320	GS23	F271	FS20
G321	GS23	F272	FS20
G322	GS23	F309	FS23
G323	GS23	F341	FS24
G324	GS23	F329	FS24
G325	GS23	F327	FS24
G326	GS23	F339	FS24
G327	GS23	F340	FS24
G328	GS23	F325	FS23
G329	GS23	F259	FS19
G330	GS23	F273	FS20
G331	GS23	F274	FS20
G332	GS23	F277	FS20
G333	GS23	F276	FS20
G333	GS23	F344	FS24
G334	GS23	F346	FS24
G335	GS23	F261	FS19
G336	GS23	F275	FS20
G336	GS23	F275	FS20
G337	GS24	F350	FS25
G338	GS24	F351	FS25
G339	GS24	F352	FS25
G340	GS24	F353	FS25
G341	GS24	F347	FS25
G342	GS24	F348	FS25
G343	GS24	F349	FS25
G344	GS24	F262	FS20
G345	GS24	F263	FS20
G346	GS24	F264	FS20
G347	GS24	F265	FS20
G348	GS24	F266	FS20
G349	GS24	F267	FS20

G302	GS22	F244	FS19	B074	0083	OS06
G303	GS22	F245	FS19	B072	0081	OS06
G304	GS22	F246	FS19	B112	0376	OS25
G305	GS22	F247	FS19	B068	0077	OS06
G306	GS22	F248	FS19	B075	0084	OS06
G307	GS22	F249	FS19	B079	0186	OS14
G308	GS22	F250	FS19	B078	0087	OS06
G309	GS22	F251	FS19	B164	0182	OS14
G310	GS22	F252	FS19	B165	0193	OS14
G311	GS22	F253	FS19	B077	0086	OS06
G312	GS22	F254	FS19	B073	0082	OS06
G313	GS22	F255	FS19	B087	0095	OS07
G314	GS22	F256	FS19	B076	0085	OS06
G315	GS22	F257	FS19	B084	0092	OS07
G315	GS22	F257	FS19	B084	0093	OS07
G316	GS22	F258	FS19	B088	0096	OS07
G317	GS23	F269	FS20	B091	0098	OS07
G318	GS23	F270	FS20	B090	0099	OS07
G319	GS23	F338	FS24	B146	0404	OS26
G320	GS23	F271	FS20	B082	0090	OS07
G321	GS23	F272	FS20	B118	0372	OS25
G322	GS23	F309	FS23	B115	0391	OS26
G323	GS23	F341	FS24	B149	0408	OS26
G324	GS23	F329	FS24	B138	0399	OS26
G325	GS23	F327	FS24	B136	0406	OS26
G326	GS23	F339	FS24	B147	0405	OS26
G327	GS23	F340	FS24	B148	0409	OS26
G328	GS23	F325	FS23	B124	0367	OS25
G329	GS23	F259	FS19	B081	0089	OS06
G330	GS23	F273	FS20	B348	0352	OS24
G331	GS23	F274	FS20	B347	0351	OS24
G332	GS23	F277	FS20	B170	0398	OS26
G332	GS23	F277	FS20	B170	0356	OS24
G332	GS23	F277	FS20	B170	0357	OS24
G332	GS23	F277	FS20	B170	0358	OS24
G332	GS23	F277	FS20	B170	0359	OS24
G333	GS23	F276	FS20	B161	0386	OS26
G333	GS23	F344	FS24	B159	0400	OS26
G333	GS23	F346	FS24	B161	0386	OS26
G334	GS23	F345	FS24	B160	0385	OS26
G335	GS23	F261	FS19	B089	0097	OS07
G336	GS23	F275	FS20	B175	0348	OS24
G336	GS23	F275	FS20	B175	0421	OS26
G337	GS24	F350	FS25	B135	0387	OS26
G338	GS24	F351	FS25	B167	0403	OS26
G339	GS24	F352	FS25	B169	0397	OS26
G340	GS24	F353	FS25	B168	0414	OS26
G341	GS24	F347	FS25	B349	0353	OS24
G342	GS24	F348	FS25	B162	0179	OS14
G343	GS24	F349	FS25	B163	0180	OS14
G344	GS24	F262	FS20	B150	0401	OS26
G345	GS24	F263	FS20	B151	0407	OS26
G346	GS24	F264	FS20	B155	0412	OS26
G347	GS24	F265	FS20	B154	0411	OS26
G348	GS24	F266	FS20	B153	0410	OS26
G349	GS24	F267	FS20	B152	0402	OS26

G350	GS24	F268	FS20	B156	0413	OS26
G351	GS24	F354	FS25	B171	0417	OS26
G352	GS24	F355	FS25	B172	0418	OS26
G353	GS24	F356	FS25	B173	0419	OS26
G354	GS24	F357	FS25	B174	0420	OS26
G355	GS24	F358	FS25	B176	0422	OS26
G356	GS24	F359	FS25	B177	0423	OS26
削除					0009	OS01
削除					0010	OS01
削除					0015	OS01
削除					0016	OS01
削除					0017	OS01
削除					0018	OS01
削除	GS01	F004	FS01	B030	0036	OS03
削除					B080	0086
削除					B289	0129
削除					B290	0130
削除					B291	0131
削除					B292	0132
削除						0137
欠番						0138
欠番						0139
削除						0140
削除						0145
削除	GS02	詩で考察				B183
削除						B166
削除						B166
削除						B166
削除	GS09	F105	FS09	B270	0203	OS15
削除						B270
削除						0210
削除						0211
削除						0221
削除						0224
削除						0225
削除						0236
削除						0237
削除						B097
削除						0265
削除						0294
削除						0295
削除						0362
削除						025

GS 2 節 口（おのれ）

G010 口（靈）こそ（吾の）心の主である。他人がどうして（吾の）心の主であろうか？ 心をよく整えたならば、得難き主である
口（靈）を得る。

G011 もしも人が己（靈）を愛しいものと知るならば、心（吾）をよく守れ。賢い人は、怠らずに励み、常に心を慎み整え口をめで
いるようにせよ。

G012 心が作り、心から生じ、心から起つた惡が知慧悪しき人を打ちくだく。—金剛石が宝石を打ちくだくように。

G013 愚かな人は、仇敵がかれの不幸を望むとおりのこととを、口（靈）に対してなす。—蔓草（ツルクサ）が沙羅の木にまといつくよ
うに。

G014 先づ（吾の）心を正しく整え心が治つてから、次いで他人に教えよ。そうすれば賢明な人は、煩わされて悩むことが無いであ
らう。

G015 愚かにも、悪い見解にもとづいて、真理に従つて生きるブッダ・真人たちの教えを罵るならば、その人は悪い報いが熟する。
—カツタカという草は果実が熟すると自分自身が滅びてしまうようだ。

G016 善からぬこと、口のためにならぬことは、なし易い。ためになること、善いことは、實に極めてなし難い。

G017 人が惡をなすならば心が汚れ、人が惡をなさないならば心が淨まる。淨いのも淨くないのも各人の人のありようである。人
は他人を淨めることができない。

G018 たゞい他人にとつていかに大事であろうとも、他人の目的のために（吾の）心のつとめをして去つてはならぬ。己の目的を熟
知して、（吾の）心のつとめに専念せよ。

GS 3 節 はげみ

G019 努め励むのは不死の境地である。怠りなまけるのは死の境地である。

努め励む人々は死ぬことがない。怠りなまける人々は、死者のごとくである。

G020 このようにはつきりと知つて、努め励むことをよく知る人々は、努め励むことを喜び、覺醒者たちの境地を楽しむ。

G159	GS14	F160	FS14	B300	0222	OS17
G162	GS14	F163	FS14	B301	0223	OS17
削除				0224	OS17	
削除				0225	OS17	
G188	GS15	F189	FS15	B302	0226	OS17
G164	GS14	F165	FS14	B304	0227	OS17
G165	GS14	F166	FS14	B305	0228	OS17
G166	GS14	F167	FS14	B306	0229	OS17
G167	GS14	F168	FS14	B307	0230	OS17
G168	GS14	F169	FS14	B308	0231	OS17
G169	GS14	F170	FS14	B309	0232	OS17
G170	GS14	F171	FS14	B310	0233	OS17
G171	GS14	F172	FS14	B311	0234	OS17
G172	GS15	F173	FS15	B312	0235	OS18
削除				0236	OS18	
削除				0237	OS18	
G173	GS15	F174	FS15	B313	0238	OS18
G174	GS15	F175	FS15	B314	0239	OS18
G175	GS15	F176	FS15	B315	0240	OS18
G176	GS15	F177	FS15	B316	0241	OS18
G177	GS15	F178	FS15	B317	0242	OS18
G178	GS15	F179	FS15	B318	0243	OS18
G179	GS15	F180	FS15	B319	0244	OS18
G180	GS15	F181	FS15	B320	0245	OS18
G181	GS15	F182	FS15	B321	0246	OS18
G181	GS15	F182	FS15	B321	0247	OS18
G182	GS15	F183	FS15	B322	0248	OS18
G183	GS15	F184	FS15	B323	0249	OS18
G184	GS15	F185	FS15	B324	0250	OS18
G185	GS15	F186	FS15	B325	0251	OS18
G186	GS15	F187	FS15	B326	0252	OS18
G187	GS15	F188	FS15	B327	0253	OS18
G189	GS15	F190	FS15	B328	0254	OS18
G190	GS15	F191	FS15	B329	0255	OS18
G271	GS20	F278	FS21	B090	0256	OS19
G271	GS20	F278	FS21	B090	0257	OS19
G272	GS20	F279	FS21	B091	0258	OS19
G273	GS20	F280	FS21	B092	0259	OS19
G274	GS20	F281	FS21	B093	0260	OS19
G275	GS20	F282	FS21	B094	0261	OS19
G276	GS20	F283	FS21	B095	0262	OS19
G276	GS20	F283	FS21	B095	0263	OS19
G252	GS19	F284	FS21	B096	0264	OS19
削除				B097	0265	OS19
G243	GS19	F285	FS21	B098	0266	OS19
G244	GS19	F286	FS21	B099	0267	OS19
G277	GS20	F287	FS21	B100	0268	OS19
G278	GS20	F288	FS21	B100	0268	OS19
G277	GS20	F287	FS21	B101	0269	OS19
G278	GS20	F288	FS21	B101	0269	OS19
G279	GS20	F289	FS21	B102	0270	OS19
G258	GS19	F290	FS21	B103	0271	OS19
G258	GS19	F290	FS21	B103	0272	OS19
G055	GS06	F057	FS06	B188	0273	OS20
G056	GS06	F058	FS06	B189	0274	OS20
G057	GS06	F059	FS06	B190	0275	OS20
G058	GS06	F060	FS06	B191	0276	OS20

G059	GS06	F061	FS06	B192	0277	OS20
G059	GS06	F061	FS06	B192	0278	OS20
G059	GS06	F061	FS06	B192	0279	OS20
G060	GS06	F062	FS06	B193	0280	OS20
G061	GS06	F063	FS06	B194	0281	OS20
G062	GS06	F064	FS06	B195	0282	OS20
G063	GS06	F065	FS06	B196	0283	OS20
G064	GS06	F066	FS06	B197	0284	OS20
G065	GS06	F067	FS06	B198	0285	OS20
G066	GS06	F068	FS06	B199	0286	OS20
G067	GS06	F069	FS06	B200	0287	OS20
G068	GS06	F070	FS06	B201	0288	OS20
G069	GS06	F071	FS06	B202	0289	OS20
G110	GS10	F111	FS10	B239	0290	OS21
G111	GS10	F112	FS10	B240	0291	OS21
G112	GS10	F113	FS10	B241	0292	OS21
G113	GS10	F114	FS10	B242	0293	OS21
削除				0294	OS21	
削除				0295	OS21	
G232	GS18	F301	FS22	B260	0296	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B261	0297	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B262	0298	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B263	0299	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B264	0300	OS21
G232	GS18	F301	FS22	B265	0301	OS21
G114	GS10	F115	FS10	B243	0302	OS21
G117	GS10	F118	FS10	B244	0303	OS21
G118	GS10	F119	FS10	B245	0304	OS21
G115	GS10	F116	FS10	B246	0305	OS21
G211	GS17	F212	FS17	B357	0306	OS22
G248	GS19	F334	FS24	B367	0307	OS22
G260	GS19	F318	FS23	B368	0308	OS22
G212	GS17	F213	FS17	B358	0309	OS22
G213	GS17	F214	FS17	B359	0310	OS22
G261	GS19	F319	FS23	B369	0311	OS22
G214	GS17	F215	FS17	B360	0312	OS22
G262	GS19	F320	FS23	B370	0313	OS22
G215	GS17	F216	FS17	B361	0314	OS22
G216	GS17	F217	FS17	B362	0315	OS22
G217	GS17	F218	FS17	B363	0316	OS22
G218	GS17	F219	FS17	B364	0317	OS22
G219	GS17	F220	FS17	B365	0318	OS22
G220	GS17	F221	FS17	B366	0319	OS22
G119	GS11	F120	FS11	B247	0320	OS23
G120	GS11	F121	FS11	B248	0321	OS23
G121	GS11	F122	FS11	B249	0322	OS23
G121	GS11	F122	FS11	B249	0323	OS23
G122	GS11	F123	FS11	B250	0324	OS23
G123	GS11	F124	FS11	B251	0325	OS23
G124	GS11	F125	FS11	B252	0326	OS23
G125	GS11	F126	FS11	B253	0327	OS23
G126	GS11	F127	FS11	B254	0328	OS23
G127	GS11	F128	FS11	B255	0329	OS23
G128	GS11	F129	FS11	B256	0330	OS23
G129	GS11	F130	FS11	B257	0331	OS23
G130	GS11	F131	FS11	B258	0332	OS23
G131	GS11	F132	FS11	B259	0333	OS23

O番号順 4/4

G191	GS16	F192	FS16	B330	0334	OS24		G333	GS23	F346	FS24	B161	0386	OS26	
G192	GS16	F193	FS16	B331	0335	OS24		G337	GS24	F350	FS25	B135	0387	OS26	
G193	GS16	F194	FS16	B332	0336	OS24		G239	GS19	F342	FS24	B150	0388	OS26	
G196	GS16	F197	FS16	B333	0337	OS24		G263	GS19	F332	FS24	B141	0389	OS26	
G197	GS16	F198	FS16	B334	0338	OS24		G241	GS19	F314	FS23	B114	0390	OS26	
G198	GS16	F199	FS16	B335	0339	OS24		G322	GS23	F308	FS23	B115	0391	OS26	
G200	GS16	F201	FS16	B337	0340	OS24		G230	GS18	F306	FS23	B106	0392	OS26	
G199	GS16	F200	FS16	B336	0341	OS24		G247	GS19	F333	FS24	B142	0393	OS26	
G201	GS16	F202	FS16	B338	0342	OS24		G249	GS19	F335	FS24	B143	0394	OS26	
G201	GS16	F202	FS16	B338	0343	OS24		G250	GS19	F336	FS24	B144	0395	OS26	
G202	GS16	F203	FS16	B339	0344	OS24		G251	GS19	F337	FS24	B145	0396	OS26	
G203	GS16	F204	FS16	B340	0345	OS24		G339	GS24	F352	FS25	B169	0397	OS26	
G203	GS16	F204	FS16	B340	0346	OS24		G332	GS23	F277	FS20	B170	0398	OS26	
G204	GS16	F205	FS16	B341	0347	OS24		G324	GS23	F329	FS24	B138	0399	OS26	
G336	GS23	F275	FS20	B175	0348	OS24		G333	GS23	F344	FS24	B159	0400	OS26	
G206	GS16	F207	FS16	B343	0349	OS24		G344	GS24	F262	FS20	B150	0401	OS26	
G207	GS16	F208	FS16	B344	0350	OS24		G349	GS24	F267	FS20	B152	0402	OS26	
G331	GS23	F274	FS20	B347	0351	OS24		G338	GS24	F351	FS25	B167	0403	OS26	
G330	GS23	F273	FS20	B348	0352	OS24		G319	GS23	F338	FS24	B146	0404	OS26	
G341	GS24	F347	FS25	B349	0353	OS24		G326	GS23	F339	FS24	B147	0405	OS26	
G210	GS16	F211	FS16	B346	0354	OS24		G325	GS23	F327	FS24	B136	0406	OS26	
G208	GS16	F209	FS16	B345	0355	OS24		G345	GS24	F263	FS20	B151	0407	OS26	
G205	GS16	F206	FS16	B342	0356	OS24		G323	GS23	F341	FS24	B149	0408	OS26	
G332	GS23	F277	FS20	B170	0356	OS24		G327	GS23	F340	FS24	B148	0409	OS26	
G205	GS16	F206	FS16	B342	0357	OS24		G348	GS24	F266	FS20	B153	0410	OS26	
G332	GS23	F277	FS20	B170	0357	OS24		G347	GS24	F265	FS20	B154	0411	OS26	
G205	GS16	F206	FS16	B342	0358	OS24		G346	GS24	F264	FS20	B155	0412	OS26	
G332	GS23	F277	FS20	B170	0358	OS24		G350	GS24	F268	FS20	B156	0413	OS26	
G205	GS16	F206	FS16	B342	0359	OS24		G340	GS24	F353	FS25	B168	0414	OS26	
G332	GS23	F277	FS20	B170	0359	OS24		G269	GS19	F330	FS24	B139	0415	OS26	
G224	GS18	F310	FS23	B109	0360	OS25		G270	GS19	F331	FS24	B140	0416	OS26	
G225	GS18	F311	FS23	B110	0361	OS25		G351	GS24	F354	FS25	B171	0417	OS26	
					0362	OS25			G352	GS24	F355	FS25	B172	0418	OS26
					0363	OS25			G353	GS24	F356	FS25	B173	0419	OS26
					0364	OS25			G354	GS24	F357	FS25	B174	0420	OS26
					0365	OS25			G336	GS23	F275	FS20	B175	0421	OS26
					0366	OS25			G355	GS24	F358	FS25	B176	0422	OS26
					0367	OS25			G356	GS24	F359	FS25	B177	0423	OS26
					0368	OS25			G163	GS14	F164	FS14	B303	新設	OS17

第2部 詩文一覧

第1章 もやもやな事

GS 1 節 心と意

G001 心は動搖し、ざわめき、護り難く、制し難い。賢い人はこれを直ぐする——弓師が矢の弦を直ぐるよう。

G002 水の中（靈界）の住処から引き出されて陸「おか」の上（ゝの世）に投げ捨てられた魚のように、この心は、惡魔の支配から逃れようとしてもがきまわる。

G003 意は、顕在的で、軽々（かるがろ）とざわめき、欲するがままにおもむき捉え難い。心は、この顕在的な意と、極めて見難く微妙な潜在部から成る。

G004 心は独りで動きまわり、遠くに行つてしまふ顕在部がある。また、形体なく、胸の奥の洞窟（心臓）にひそんでいる潜在部もある。これら心を整える人々は、死の束縛から逃れるであろう。

G005 信ずるところと念いが汚されているならば、正しい真理が見極められない。よつて心の安樂（安住）は得られず、さとりの智慧は湧いてこない。

G006 心が煩惱に汚されず、念いが乱れず、善惡のはからいを捨てるに至つた覚醒者は、何も恐れぬ」とが無い。

G007 ああ、この身はまもなく地上によつたわるであろう。魂は抜け、水瓶の破片のように無用になる。身体は死に対しこのように脆弱なのだと知れよ。

G008 憎む人が憎む人にたいし、怨む人が怨む人にたいして、どのようなことをしようとも、邪なことをめざしている心はそれよりもひどいことをする。

G009 母も父もその他親族がしてくれることよりもさらに優れたことを、正しく向けられた心がしてくれる。

G057 汝らがの道を行くなれば、苦しみをなくすことができるであろう。（棘が肉に刺さったので）矢を抜いて癒す方法を知つて、わたくしは汝らにこの道を説いたのだ。

G058 もろもろの修行完成者は（ただ）教え（の道）を説くだけである。汝らはの道をひたすら努めよ。心を整えこの道を歩む者は、心治まり 惡魔の束縛から脱れるであろう。

G059 「この世のほとんどが色（我）により形成されている。

これらは全て無常で（諸行無常）、苦しみの素（もと）へと変化する（一切皆苦）。

しかし、法（真理）は、決して色や我を含むことはない（諸法非我）。」

と明らかな智慧をもつてこの世を観るときに、人は苦しみから遠ざかり放（はな）れる。

G060 起きるべき時に起きないで、若くて力があるのに怠りなまけていて、意志も思考も薄弱で、怠惰で物憂い人は、明らかな智慧によつて道を見出すことがない。

G061 言葉を慎しみ、意を落ち着けて慎しみ、身に悪を為してはならない。これらの三つの行ないの路を浄くたもつならば、み仏の説きたもうた道を克ち得るであろう。

G062 実に心が統一されたならば、豊かな智慧が生じる。心が統一されないならば、豊かな智慧がほろびる。生じる」ととほろびる」ととの、この二種の道を知つて、豊かな智慧が生ずるよう心を整えよ。

G063 一つの樹を伐るのではなくて、（煩惱の）林を伐れ。危険は林から生じる。（煩惱の）林とその下生えとを切つて、林から脱れた者となれ。修行僧らよ

G064 たゞい僅かであろうとも、男女の淫らな欲望が断たれないあいだは、その人の心は束縛されている。

G065 心と意の妄執を断ち切れ、一池の水上に出て来た秋の蓮を手で断ち切るように。静かなやすらぎに至る道を選び進め。めでたく行きし人であるみ仏は涅槃（悟りによる解脱）への道を説きたもうた。

G066 「わたしは雨期にはここに住もう。冬と夏とにはここに住もう」と愚者はいのようにくよくよと慮つて、死が迫つて来るのに気がつかない。

G067 子どもや家畜のこと気に氣を奪われて心がそれに執著している人を、死はやうつて行く。一眠つている村を大洪水が押し流すよう。

G021 真理に従う道を進むよう努め励み、堪え忍ぶ」と強く、思慮ある人々は、涅槃（悟りによる解脱）に達する。
「これは無上の幸せである。

G022 意（思））つつましく、行いは清く、気をつけて行動し、心は奮起し、法（真理）にしたがつて生き、努め励む人は、名声が高まる。

G023 思慮ある人は、怠らず、努め励み、心を整え、妄執と憎惡と迷妄に打ち勝て。それにより、欲望による激流に押し流されない心の拠り所（己）を鎮（しず）めまつれ。

G024 智慧乏しき愚かな人々は怠惰になじむ。
しかし賢い人は、最上の財宝（たから）を守るように、努め励むのを守る。

G025 怠たらず、執着と欲樂に親まことに、思念をこらす者は、大いなる楽しみを得る。

G026 人は怠惰を退け、努め励むことにより、智慧を得て、憂いをなくす。

山上にいる人が地上の人々を見下ろすように、その人は憂いを持つ他の多くの人々を、自分とは異なると、はつきりと見極める。G027 怠りなまけている人々の中で努め励み、そして、眠つている人々の中で目覚めている賢い人は、疾く走る馬のようなものである。

G028 努め励む事が生の旗印で、放逸なる」とは死の旗印である。

G029 努め励む事を楽しみ、怠惰に恐れを抱く人は、微細なものでも粗大なものでも心のわざらいを、焼きつくしながら生活する。

G030 努め励む事を楽しみ、怠惰に恐れを抱く人は、墮落するはずはなく、すでに涅槃（悟りによる解脱）の近くにいる。

GS 4 節 老ふぬ」と

G031 何の笑いがあろうか。何の歎びがあろうか？ 一世間は常に燃え立つてゐるのにー。汝らは暗黒に覆われてゐる。どうして燈明を求めるのか？

G032 見よ、粉飾された形体を！（それは）傷だらけの身体であつて、いろいろのものが集まつただけである。病いに悩み、意欲ばかり多くて、堅固でなく、安住していない。

G033 いの姿色は衰えはてた。病いの巣であり、脆くも滅びる。腐敗のかたまりで、やぶれてしまう。生命は死に帰着する。

G034 牛飼いが棒をもつて牛どもを牧場に駆り立てるよう、老いと死とは生きとし生けるものどもの寿命を駆り立てる。

G035 秋に投げてられた瓢箪（ひょうたん）のような、鳩の色のようなこの白い骨を見ても、なんの快さがあろうか？

G036 骨で城がつくられ、それに肉と血とが塗つてあり、老いと死と高ぶりどまかしどがおきめられている。

G037 いとも麗しい国王の車も朽ちてしまふ。身体もまた老いに近づく。しかし善い立派な人々の徳は老いることがない。善い立派な人々は互いに道理を説き聞かせる。

G038 学ぶいとの少ない人は、豚のように老いる。その人の肉は増えるが、その人の知慧は増えない。

G039 わたくしは幾多の生涯にわたって生死の流れを無益に経めぐつて来た、一家屋の作者（ツクリテ）をさがしもとめて。あの生涯、この生涯とくりかえすのは苦しいことである。

G040 家屋の作者よ！ 汝の正体は見られてしまった。心は、妄執を滅ぼし尽くし（身体の）形成作用を離れたので、汝（心）はもはや家屋を作ることはないであろう。汝の梁はすべて折れ、家の屋根は壊れてしまった。

G041 若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらなければ、魚のいなくなつた池にいる白鷺のように、瘦せて滅びてしまふ。

G042 若い時に、財を獲るいとなく、清らかな行ないをまもらなければ、昔のいじぱかり思い出して、かたくなな心となつて、壞れた弓のように横たわる。

GS 5 節 世のヰ

G043 下劣なしかたになじむな。怠けてふわふわと暮らすな。邪な見解をいだくな。世俗のわざらいをふやすな。

G044 奮起（フルイタ）てよ。怠けてはならぬ。道理に従つた善い行ないを実行せよ。道理に従つて行なう人は、この世でも、あの世でも、穏やかに過ぐす。

G045 道理に従つた善い行ないを実行せよ。道理に従つて行なう人は、この世でも、あの世でも、穏やかに過ぐす。

G046 世の中の実相と泡沫（うたかた）を見よ。泡沫はかげろうの」として見よ。世の中をこのように観ずる人は、死王もかれを見ぬいとがない。

G047 もあ、この世の中を見よ。王者の車のように美麗な部分が目立つ。愚かな人はそこに耽溺（たんでき）するが、賢い人はそれを妄執しない。

G048 以前は怠りなまけていた人でも、のちに怠りなまけることが無いなら、その人はこの世の中を照らす。一あたかも、雲を離れた月のようだ。

G049 以前には悪い行ないをした人でも、のちに善によつてつぐなうならば、その人はこの世の中を照らす。一あたかも、雲を離れた月のようだ。

G050 この世の中は暗黒である。いのではつきりと理（コトワリ）の実相を見分ける人は少ない。一網から脱れた鳥が少ないように。G051 渡鳥は日中に往来を繰り返し、通力によつて動く者は虚空の道を回り、正しい心を持つ真人は悪魔とその軍勢にうち勝つて因縁からむこの世から放（はな）れブッダとなる。

G052 唯一無二の真理を逸脱し、偽りを語り、涅槃（悟りによる解脱）の世界を無視している人は、どんな悪でもなす。

G053 愚かな人々は分かちあうことをたたえない。しかし賢い人々は分かちあうことを喜ぶ。

G054 大地の唯一の支配者となるよりも、全世界の主権者となるよりも、真人となるほうがすぐれている。

GS 6 節 道

G055 人の道のうちでは、仏道の八正道が最もすぐれている。

もろもろの真理のうちでは、四諦（苦・集・滅・道）が最も上である。
もろもろの徳の中では、情欲から離れることが最もすぐれている。
人々のうちでは、ブッダ（＝眼ある人）が最もすぐれている。

G056 これこそ道である。（真理を）見るはたらきを清めるためには、この他に道は無い。汝らはこの道を実践せよ。これこそ悪魔を迷わして（打ちひしぐ）ものである。

G106 一人になり心を落ち着けて、禪定により真理と知慧の味を知れば、恐れがなくなつていく。

G107 ものものブッダ・真人に会うのは善いことである。愚かな者どもに会わないならば、心はつねに楽しいであろう。

G108 愚人とともに歩む人は長い道のりにわかつて憂いがある。愚人と共に住むのは、常に辛いことである。一仇敵とともに住むよう。賢い人と共に住むのは楽しい。— 親族に会うように。

G109 よく気をつけていて、明らかな知慧あり、学ぶといろ多く、忍耐によく、真理を護る、そのような立派なブッダ・真人に親しめよ。

GS 10 節 わまやまなじと

G110 つまらぬ快樂を捨てることによって、広大なる楽しみを得ることができるのなら、賢い人は広大な楽しみをのぞんで、つまらぬ快樂を捨てよ。

G111 他人を苦しめるることによって自分の快樂を求める人は、愚かな人であつて怨みの糸にまつられて怨みから免れることができない。

G112 なすべきことをなおざりにして、なすべきからやねいとをなす、遊びたわむれ放逸なる愚かな者どもには汚れが増す。

G113 人が正しく努め、身体を慎み、為すべからやねいとを為さず、為すべきことを常に為していく賢い人々は、もろもろの心の汚れがなくなる。

G114 在家の生活は困難であり、家に住むのも難しい。なぜならば、心を同じくしない人々と共に住むのは難しいからである。

出家の生活も困難であり、それを楽しむことは難しい。出家者が策を弄して利益を求めるとき、苦しみに遇う。だから、出家者は、策を弄して利益を求めてはならない。

G115 修行僧は、林の中でひとり坐し臥し歩むだけの行に意味がないことを知り、常になおざりになることなく心を整えることを楽しめ。

G116 德行と見識とをそなえ、法にしたがつて生き、眞実を語り、自分のなすべきことを行なう人は、人々から愛される。

G117 信仰あり、德行そなわり、名声と繁栄を受けている人は、いかなる地方におもむくとも、そこで尊ばれる。

GS 7 節 千という数にちなんで

G070 無益な語句を千たび語るよりも、聞いて心の静まる有益な語句を一つ聞く方が優れている。

G071 無益な語句よりなる詩が千もあつても、聞いて心の静まる詩を一つ聞く方が優れている。

G072 無益な語句よりなる詩を百も唱えるよりも、聞いて心の静まる詩を一つ聞く方が優れている。

G073 常につつしみ、心を整え、心が治ることは、愚かな自己にうち克つ事である。

愚かな自己に克つた者の勝利を敗北に転ずる事は、神も、ガンダルヴァ(天の伎楽神)も、悪魔も、梵天もなす事ができない。唯一愚かな自己に克つ者は最上の勝利者となる。

G074 百年の間、月々千回ずつ祭祀(まつり)を當む人や、林の中で祭祀(まつり)の火につかえる人々がいる。もし、それらの人々が、心が治まり愚かな自己を修養した人(ブッダや真人)を尊び供養するなら、たとえその供養がつかの間であつても、ただ、百年祭祀を當むだけよりも優れている。心が治まり愚かな自己を修養した人(ブッダや真人)を尊び供養することは優れている。G075 功徳を得るために、人がこの世で、一年間、神をまつり、犠牲(いけにえ)をささげ、あるいは火にささげ物をする。しかし、その全てをあわせても、ただ、行ないの正しい人々を尊ぶ真正なる祭りの方が、はるかに優れている。

G076 人が、心が治まり愚かな自己を修養した人(ブッダや真人)に常に敬礼を守れば、魂の寿命と美しさと楽しみと力が増大する。

G077 素行が悪く、心が乱れていて百年生きるよりは、德行あり思ひ静かな人が一日生きる方が優れている。

G078 愚かに迷い、心の乱れている人が百年生きるよりは、知慧あり思ひ静かな人が一日生きる方が優れている。

G079 急りなまけて、氣力もなく百年生きるよりは、堅固につとめ励んで一日生きる方が優れている。

G080 物事が興り消え失せる因果を見極めずに百年生きるよりも、これを見極めて一日生きる方が優れている。

G081 心が不死であるのを見極めずに百年生きるよりも、これを見極めて一日生きる方が優れている。

G082 四諦の真理を見極めず、百年生きるよりも、これを見極めて一日生きる方が優れている。

GS 8 節 花にちなん

G083 だれ（どの魂）がこの大地（心）を正しく治めるであろうか？

だれが閻魔の世界と神々とともになるこの世界とを正しく治めるであろうか？

わざに巧みな人が花を摘むように、善く説かれた真理のことばを摘み集めるのはだれであろうか？

G084 学び努力の人こそ、この大地（心）を正しく治め、閻魔の世界と神々とともになるこの世界とを正しく治めるであろう。

わざに巧みな人が花を摘むように、学びつとめる人々こそ善く説かれた真理のことばを摘み集めるであろう。

G085 死に際しこの身は泡沫（うたかた）のようだと思うであろう。だが、死ぬよりも前に、実にかげろうのようなはかないものは悪魔の花の矢と知り、これを断ち切り、悪魔に魅入られない

よう生きよ。

G086 花を摘むのに夢中になつて、いる人を死がさらつて行き、眠つて、いる村を洪水が押し流す。

花を摘むのに夢中になつて、いる人が、未だ望みを果たさないうちに、死神（悪魔）が彼を征服する。

G087 蜜蜂は（花の）色香を害（そこなわざ）に、汁をとつて、花から飛び去る。

修行僧が村に行くときは、そのようにせよ。

G088 他人のした事としなかった事を見極めて、他人の過ちから学び、良い行ないを実行せよ。

自分のした事としなかった事を省み、愚かな自己の過失はすみやかに改めよ。

G089 うるわしく、あでやかに咲く花でも、香りの無いものがあるように、善く説かれたことばでも、それを実行しない人には、実りがない。

G090 うるわしく、あでやかに咲く花で、しかも香りのあるものがあるように、善く説かれたことばも、それを実行する人には、実りがある。

G091 うず高い花を集めて多くの華鬘（はなかざり）をつくねよう、人にして生まれまた死ぬべきであるならば、多くの善いことをなせ。

G092 花の香りは風に逆らつては進んで行かない。梅檀（せんだん）もタガラの花もジャスミンもみなそうである。
しかし徳のある人の香りは、風に逆らつても進んで行く。徳のある人はすべての方向に薫る。

G093 梅檀（センダン）、タガラ、青蓮華、ヴァッシキー——これら香りのあるものどものうちでも、徳行の香りこそ最上である。

G094 タガラ、梅檀（センダン）の香りは微かであつて、大したことはない。しかし徳行のある人々の香りは最上であつて、天の神々にもといいく。

G095 学び努力して、徳行を完成し、正しい智慧によつて解脱した人々には、悪魔も近づくによし無し。

G096 塵芥（じごく）にも似た盲（めしい）た凡夫のあいだにあつて、正しくめざめた真人は智慧により輝く。

あたかも、大道に捨てられた塵芥（ぢりあくた）の山堆（やまづみ）の中から香しく麗しい蓮華が生じ輝くように。

GS 9 節 楽しみ

G097 安らぎに帰した真人は、怨みをいだいている人々の間にあつて怨むこと無く、大いに楽しく生きる。怨みをもつてゐる人々の間にも、あつても怨むこと無く暮らす。

G098 安らぎに帰した真人は、悩める人々のあいだにあつて、悩み無く、大いに楽しく暮らす。

G099 安らぎに帰した真人は、貪つてゐる人々の間にあつて、患ひ無く貪らないで、大いに楽しく暮らす。

G100 久しく旅に出ていた人が遠方から無事に帰つて來たならば、親戚・友人・親友たちは彼が帰つて來たのを祝う。

G101 そのように善いことをしてこの世からあの世に行つた人を善業が迎え受ける。——親族が愛する人が帰つて來たのを迎へ受けるように。

G102 安らぎに帰した真人は、所有にとらわれず、喜びとともに、いつも楽しく生きるであろう。

G103 安らぎに帰した真人は、勝敗と怨みから放（はな）たれる。

G104 妄執に等しい火は存在しない。ばくちに負けるとしても、増悪（悟りによる解脱）にまさる楽しみは存在しない。

色によるかりそめの事象に等しい苦しみは存在しない。涅槃（悟りによる解脱）にまさる楽しみは存在しない。

G105 健康は最高の利得であり、満足は最上の宝であり、信頼は最高の親族であり、涅槃（悟りによる解脱）は最上の楽しみである。

GS 13 節 罪

G146 道に違（タガ）うたゝとになじみ、道に順（シタガ）つたゝとにいそしまず、目的を捨てて快い」とだけを取る人は、みずからの道に沿つて進む者を羨むに至るであろう。

G147 善をなすのを急げ。悪から心を退けよ。善をなすのにのろのろしたら、心は悪事をたのしむ。

G148 人がもしも悪いことをしたならば、それを繰り返すな。悪事を心がけるな。悪が積み重なるのは苦しみである。

G149 人がもし善いことをしたならば、それを繰り返せ。善いことを心がけよ。善いことが積み重なるのは楽しみである。

G150 まだ悪い報いが熟さない間は、悪人でも幸運に遭うことがある。しかし悪の報いが熟したときは、悪人は災いに遭う。

G151 まだ善い報いが熟さない間は、善人でも災いに遭うことがある。しかし善の果報が熟したときは、善人は幸福（サイワイ）に遭う。

G152 「その報いは私には来ないであろう」と思つて、悪を軽んずるな。水が一滴ずつ滴り落ちるならば、水瓶でも満たされるのである。愚かな者は、水を少しずつでも集めるように悪を積むならば、やがて災いに満たされる。

G153 「その報いはわたしには来ないであろう」と思つて、善を軽んずるな。水が一滴ずつ滴り落ちるならば、水瓶でも満たされる。気をつけている人は、水を少しずつでも集めるように善を積むならば、やがて福徳に満たされる。

G154 同行する仲間が少ないのに多くの財を運ばねばならぬ商人が、危険な道を避けるように、また生きたいと願う人が毒を避けよう。人はもろもろの悪を避けよ。

G155 もしも手に傷がないならば、その人は手で毒をとり去るゝともやまぬであろう。傷の無い人に、毒は及ばない。悪をなさない人には、悪の及ぶことがない。

G156 汚れの無い人、清くて咎のない人をそこなう者がいるならば、その災いは、かえつてその浅はかな人に至る。風にさからつて細かい塵を投げると、（その人にむかへて来る）よふに。

G157 大空の中にいても、大海の中にいても、山の中の奥深いところに入つても、およそ世界のどにいても、悪業から脱れるゝとのできる場所は無し。

GS 11 節 象

G119 戦場の象が、射られた矢にあたつても堪え忍ぶように、われらは人のそしりを忍ぼう。多くの人は実に性質（たち）が悪いからである。

G120 心がねむおり、世のそしりを忍ぶ人は、人々の中にあつても最上の人となる。馴らされた象が、戦場にも連れて行かれ、王の乗りものとなり、最上の象となるように。

G121 馴らされた驃馬は良い。インダス河のほとりの血統よき馬も良い。クンジャラという名の大きな象も良い。しかし心が治まつた人は、これらよりもすぐれている。なぜならば、これらの乗物（身分、血統や財）によつて、未到の地（涅槃）に行くことはできない。そくへは、心を整え心が治まつた人がおもむく。

G122 「財を守る者」という汚れに染まつた心は、いかんとも制し難く、かたくなに真理を拒む。この心は、情欲を慕つてゐる。

あたかも、捕らえられても、一口の食物も食べず、こめかみから液汁をしたたらせて強暴になつてゐる発情期の象が象の林を慕うようだ。

G123 大食いをして、眠りをいのみ、ころげまわつて寝て、おじれんでいる愚鈍な人は、大きな豚のように糧を食べて肥り、くりかえし母胎に入つて（迷いの生存をつづける）。

G124 この心は、一以前には愚かな自己にしたがい一望むがままに、欲するがままに、快きがまことに、やすつていた。今やわたくしはその心をすつかり抑制しよう、一象使いが鉤をもつて、発情期に狂う象を全くおやへつけよ。

G125 心は泥沼に落ち込んだ象のようである。だから、努め励むのを楽しめ。おのれの心を護れ。愚かな自己を難處から救い出せ。

G126 もじゅ思慮深く聰明でまじめな生活をしている人を伴侶として共に歩むことができるならば、あらゆる危険困難に打ち克つて、いひに喜び、念いをおちつけて、ともに歩め。

G127 しかし、もしも思慮深く聰明でまじめな生活をしている人を伴侶として共に歩むことができないならば、國を捨てた國王のよ

うに、また林の中の象のように、ひとり歩め。

G128 愚かな者を道連れとするな。それなら独りで行くほうがよい。

悪いことをするな。

求めることは少なくあれ。

一林の中にいる象のように。

G129 (大きからうとも、小さからうとも)、どんな果報にも満足するのは楽しい。

善いことをしておけば、命の終るときも楽し。

(悪いことをしなかったので)、あらゆる苦しみ(の報い)を除くことは楽しい。

G130 世に父を敬うことは楽しい。また母を敬うことは楽しい。天下に正しい道があるのは

楽しい。

G131 老いた日に至るまで慎みをたることは楽しい。信仰が確立していなことは楽しい。

もろもろの悪事をなさないことは楽しい。

GS 12 節 ひと組むつ

G132 わのゝとは心にもどづき、心を主とし、心によりて作り出される。もしも、汚れた心で話したり行なつたりするならば、苦しみはその人に付き従う。

一車をひく(牛)の足跡に車輪がついでゆくように

G133 ものゝとは心にもどづき、心を主とし、心によりて作り出される。もしも清らかな心で話したり行なつたりするならば、福樂はその人に付き従う。

一影がそのからだから離れないように。

G134 「彼はわれを罵った。彼はわれを害した。彼はわれにうち勝つた。彼はわれから強奪した。」という思いを抱く人には、怨みはついに息(や)むことがない。

G135 「彼はわれを罵つた。彼はわれを害した。彼はわれにうち勝つた。彼はわれから強奪した。」という思いを抱かない人には、ついに怨みが息(や)む。

G136 りの世においては、怨みによつて怨みに報いても、怨みが息(や)む)ではない。怨みを離れ愛をもつてこそ怨みが息(や)む。りは永遠の真理である。

G137 私は常に死を覚悟している。

この覚悟を普通の人々は知らない。

しかし、(りの)覚悟をした人は、(りの世に常住する)争いから放たれる。

G138 りの世のものを淨らかだと思いなして暮らし、(五感の)感官を抑制せず、食事の節度を知らず、怠けて努めない者は、悪魔にうちひしがれる。

一弱い樹木が風に倒されるよつこ。

G139 りの世のものを不淨であると思ひなして暮らし、(五感の)感官をよく抑制し、食事の節度を知り、信念あり、努め励む者は、悪魔にうちひしがれない。

一岩山が風にゆるがないよつこ。

G140 まいひではないものを、まいとあると見なし、まいとあるものを、まいひではないと見なす人々は、あやまつた思いにとらわれて、ついに真実(まいと)に達しない。

G141 まいとあるものを、まいとあると知り、まいとではないものを、まいとではないと見なす人は、正しい思ひにしたがつて、つこに真実に達する。

G142 屋根を粗雑に葺いてある家には雨が漏れ入るように、心を修養していないならば、煩惱が心に侵入する。

G143 屋根をよく葺いてある家には雨の漏れ入ることがないように、心をよく修養してあるならば、煩惱が侵入する)とはない。

G144 たとえためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠つているのである。かれは道を実践する人にはならない。

G145 たとえためになることを少ししか語らないにしても、法にしたがつて正しく実践するように、

妄執と憎悪と迷惑と疑惑と慢心を離れるように、常に気をつけている人は、心を整える人であり、道を実践する人であり、心がしづまりおわあ。

にはビーラナ草がはびるようだ。

G193 この世において如何ともし難いこのうずく愛欲を断つたならば、憂いはその人から消え失せん。一水の滴が蓮華から落ちるようだ。

G194 欲の快樂から愛欲と妄執が生じる。欲の快樂を離れたならば、愛欲と妄執が減る。

G195 情欲と妄執から憂いが生じ、情欲と妄執から恐れが生じる。情欲と妄執を離れたならば、憂いは存しない。どうして恐れる」とがあらうか。

G196 さあ、皆さんに告げます。——ここに集まつた皆さんに幸あれ。妄執の根（愛欲と愛執）を掘れ。

（香しい）ウシーラ根（正しい教え）を求める人が（雑草の）ビーラナ草（惡魔の教え）を掘るように、また、葦が激流に砕かれると、魔にしばしも砕かれてはならない。

G197 たゞえ樹を切つても、もしも頑強な根を断たなければ、樹が再び成長するように、妄執の根源となる潛勢力（愛欲と愛執）を滅ぼさなければ、妄執による苦しみはくりかえし現われ出る。

G198 この世の中には、快いものに向つて流れる激流があり、その流れは、妄執をいだく人を漂わし去る。——その流れとは、まさしく在住する様々な欲である。

G199 人の快樂を求める執着は、はびるもので、また愛欲と愛執で潤される。實に人々は歡樂にふけり、楽しみをもとめて、生れと老衰を受ける。

G200 （情欲の）流れは至るところに流れる。（妄執の）蔓草は芽を生じつつある。その蔓草が生じたのを見たならば、知慧によつてその根を断ち切れ。

G201 愛欲と愛執に駆り立てられた人々は、わなにかかった兎のように、ばたばたする。妄執になすみ、情欲の激流に束縛され、永い間繰り返し執着しては得られない苦惱を受ける。それ故に、愚かな自己の愛欲と愛執を除き去れ。

G202 欲の林から出ていながら、また欲の林に身をゆだね、欲の林から免れていながら、また欲の林に向かつて走る。その人にはまだ愛欲が残つてゐる。

G203 鉄や木材や麻紐でつくられた枷を、ブツダや真人は堅固な縛とは呼ばない。財や宝石や耳環・腕輪をやたらに欲しがること、なりふりかまわず家族に惹かれるゝこと、

—それが堅固な縛である、と彼らは呼ぶ。

G158 大空の中にいても、大海の中にいても、山の中の洞窟に入つても、およそ世界のどにいても、死の脅威のない場所は無い。

GS 14 節 怒り

G159 御者が馬をよく馴らすように、おのが感官の高ぶりを静め、怒りの汚れをなくせ。走る車をおさえるようにむらむらと起る怒りをおさえる人——その人をわれは「御者」とよぶ。多くの人はただ手綱を手にしているだけである。

G160 荒々しい言葉を言うな。言われた人々は汝に言い返すであろう。怒りを含んだ言葉は苦痛である。報復が汝の身に至るであろう。

G161 壊れた鐘のように、声を荒げないならば、汝は安らぎに達している。汝はもはや怒り罵ることがないからである。

G162 怒りを制すことによつて怒りに、

善いことによつて悪いことに、
わかち合うことによつて物惜しみに、
眞実によつて虚言の人たちに向かわなくてはならない。

G163 アトウラたちは、お釈迦様に帰依した三人の長老に教えを請い求めましたが、十分に納得出来る教えを示されませんでした。彼らは不満を抱いて、ついに、お釈迦様の元を訪ね、今までの経緯を述べて、教えを請いました。そのアトウラたちにお釈迦様は、次のように語られました。

G164 アトウラよ。これは昔にも言つたとおり、いまに始まる事でもない。沈黙している者も非難され、多く語る者も非難され、すこしだけ語る者も非難される。世に非難されない者はいない。

G165 ただ誹られるだけの人、またただ褒められるだけの人は、過去にもいなかつたし、未来にもいないうちから、現在にもいないうちからである。

G166 もしも賢い人が日に日に考察して、「この人は賢明であり、行いに欠点がなく、知慧と徳行とを身にそなえている。」といつて称讃するならば、

G167 その人を誰が非難するのか？ かれはジャンブーナダ河から得られる黄金でつくった金貨のようなものである。神々もかれを称讃する。梵天でさえもかれを称讃する。非難するものは愚かな人ばかりである。

G168 身体がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。身体について慎んでおれ。身体による悪い行いをやめよ。

G169 言葉がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。言葉について慎んでおれ。言葉による悪い行いをやめよ。

G170 意がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。意について慎んでおれ。意による悪い行いをやめよ。

G171 落ち着いて思慮ある人は、いかなる時でも、身を慎み、ことばを慎み、意を慎しむ。このように彼らは実によく己れをまもつてゐる。

GS 15 節汚れ

G172 汝はいまや枯葉のようなものである。閻魔王の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立っている。しかし汝には資糧（カテ）さえも存在しない。

G173 だから、心のよりどころをつくれ。すみやかに努めよ。賢明であれ。汚れをはらい、罪過がなければ、汝はもはや生と老いとに近づかないであろう。

G174 聰明な人は順次に少しずつ、一刹那^{ミリヤク}とに、心の汚れを除くべし、一鍛冶工が銀の汚れを除くように。

G175 鉄から起つた鏽が、それから起つたのに、鉄自身を損なうように、惡をなしたならば、自分の業が罪を犯した人を悪いところにみちびく。

G176 読誦しなければ聖典が汚れ、修理しなければ家屋が汚れ、身なりを怠るならば容色が汚れ、なおざりになるならば、努め励む人が汚れる。

G177 不品行は婦女の汚れである。もの惜しみは、恵みを与える人の汚れである。惡事は、この世においてもかの世においても（つねに）汚れである。

G178 これらの汚れより、さらに根元的な汚れが、己を覆う無明である。修行僧らよ、努め励み、慎むことにより、もうもろの汚れを順次捨て、ついには無明が消滅するのを見とどけよ。

G179 恥をしらず、鳥のように厚かましく、図々しく、人を責め、大胆で、心のよ^ハれた者は、生活し難い。

G180 恥を知り、常に清きをもとめ、執着を離れ、慎み深く、真理を見て清く暮す者は、生活し難い。

G181 不当に生きものを殺し、虚言（イツワリ）を語り、世間において与えられないものを取り、他人の妻を犯す人は、この世にお

いて心（自分）の根本（己）を掘りくずす人である。

G182 人よ。このように知れ、一慎みがないのは悪いことである。一貪り（妄執）と不正とのゆえに汝が永く苦しみを受けることのないようだ。

G183 人は、信ずるところにしたがつて、きよき喜びにしたがつて、他の人へ施しをなすべきである。このような施しに満足しない人は、心の安定は得られない。

G184 この（不満の思い）を絶ち、根だらしにしたならば、昼も夜も心の安定を得る。

G185 不利な骰（サイ）の目を投げたとしても、怒りに等しい不運は存在しない。迷いに等しい網は存在しない。情欲に等しい河は存在しない。妄執に等しい火は存在しない。

G186 他人の過失は認識しやすく、自己の過失は認め難い。心の汚れた人は他人の過失を粋穀のよう吹き散らすが、自分の過失は隠してしまう。一狡猾な賭博師が不利な骰（サイ）の目をかくしてしまって。

G187 他人の過失を探し求め、つねに怒りたける人は、煩惱の汚れが増大する。かれは煩惱の汚れの消滅から遠く隔つてゐる。

G188 人が、淫穢（悟りによる解脱）を得ようとめざし、常に目ざめているように昼も夜も学び努めるならば、もろもろの汚れは消え失せる。

G189（魔の通力による）虚空には正しい道がなく、（仏道から外れた）外道には道はない。愚者は論と虚榮を楽しむが、修行完成者はこれら汚れの現れを楽しまない。

G190（魔の通力による）虚空には正しい道がなく、外道には道を実践する人はいない。因縁（いんねん）によつて生じた現実の事象は無常だが、み仏（ブッダ）には動搖はない。

GS 16 節欲と執着

G191 惣（ホシイママ）のふるまいをする人には妄執が蔓草（ツルクサ）のようにはびこる。林の中で猿が果実を探し求めるように、輪廻転生し、あちこちさまよう。

G192 人の世において執著のもとであるのうずく愛欲のなすがままである人は、もろもろの憂いが増大する。一雨が降つたあと

G236 仏の教えを喜び、慈しみに住し、怠らずに努め励めば、悪因の形成が止み、涅槃（悟りによる解脱）に到達する。

G237 禅定（止）と智慧を得る」と（観）が完成したならば、その人はよく知る人であるので、その人の束縛はすべて消え失せるであろう。

G238 天上の快樂はめでたいものだが、妄執の消滅はさうにめでたい。

GS 19 節 修行僧

G239 禅定と慎みが完成し、惡を鎮めたので、眞の修行僧と呼ばれ、正しい教えのもとで出家し努め励むので、修行僧と呼ばれる。

G240 この世において明らかな知慧を求める修行僧のはじめのつとめは、怠らず

感官に氣をくばる

分限と足るを知る

慎みを守る

淨らかに生きる善い友と付き合う

ことである。

G241 愛好するものへの執着から意（オモイ）を遠ざけることは、修行僧にとって少なからずすぐれたことである。この執着する意は心を害する妄執となるからである。

この妄執がやむにつれて、苦惱が静まる。

G242 修行僧は、身の装いはどうあるとも、心身を整え慎しみ深い行いを実行し、生きとし生けるものに対して（不当な）暴力を用いず、心が正しくおさまらなくてはならない。

G243 他人に食を乞うからとて、それだけでは托鉢僧なのではない。汚らわしい行ないをしているならば、それは托鉢僧ではない。

G244 この世の福樂も罪惡も見極め、執着を離れ統べ、清らかな行ないを修め、よく思慮して世に処しているならば、その人こそ托鉢僧である。

G245 自分の得たものを軽んじてはならない。他人の得たものを羨むな。他人を羨む修行僧は心の安定を得ることができない。

それは低く垂れ、緩く見えるけれども、脱れ難い。
賢い人々は、これらへの執着を統べなくてはならない。

G204 愛愛欲、愛執になずんでいる人々は、自らの妄執により激流に押し流される。一蜘蛛がみずから作った網にしたがつて行くようなものである。思慮ある人々は、これを断ち切つて顧みることなくすべての執着を離れ制して歩んで行く。

G205 田畠は雑草によつて害（ソコナ）われ、この世の人々は、妄執、怒り、誤った見解（迷妄）、疑惑、慢心によつて、害（ソコナ）われる。
G206 あれこれ考えて心が乱れ、愛欲がはげしくやがくのに、愛欲を淨らかだと見なす人には、愛執がますます増大する。この人は実際に束縛の絆を堅固たらしめる。

G207 あれこれの考えをしづめるのを楽しみ、常に心身の汚れ（不淨）を觀察して心を整える人は、実に悪魔の束縛の絆を取り除き、断ち切るであろう。

G208 激流の中、涅槃（悟りによる解脱）を求める賢い人は享樂に害（ソコナ）われることがない。愚かな人は享樂のために害（ソコナ）われるが、享樂を妄執するがゆえに、愚かな人は他人を害（ソコナ）うように口（おのれ）も害（ソコナ）う。
G209 言葉で説き得ないもの涅槃（悟りによる解脱）に達しようとする志を起し、意（オモイ）は満たされ、欲の激流に心の礙（サマタ）げられるこのない人は、（流れを止める者）と呼ばれる。

G210 教えを説いて与えることはすべての贈与にまさり、教えの妙味はすべての味にまさり、教えを受ける楽しみはすべての楽しみにまさる。妄執を滅ぼすことはすべての苦しみにうち勝つ。

GS 17 節 悪いといふ

G211 偽りを語る人、あるいは自分でしておきながら「私はしませんでした。」と言ふ人、この両者は死後には等しくなる——来世では行ないの下劣な業を持つた人々なのであるから。

G212 放逸で他人の妻になれ近づく者は、四つの事がらに遭遇する。——すなわち、禍をまねき、臥して樂しからず、第三に非難を受け、第四に悪しきところに墜ちる。

G213 惡をあねき、惡しきといひへに墜ち、相ともにおびえた男女の愉楽は少なく、王は重罰を課する。それ故に人は他人の妻になれ近づくな。

G214 その行ないがだらしなく、慎みが乱れ、清らかな行ないなるものもあやしげであるならば、大きな果報はやつて来ない。

G215 惡しきとをするよりは、何もない方が良い。悪いことをすれば、後で悔いる。単に何かの行為をするよりは、善しきとをする方が良い。なし終わつて後で悔いがない。

G216 辺境にある、城壁に囲まれた都市が内も外も守られてゐるよう、そのようすに口を守れ。瞬時も空しく過ぐすな。時を空しく過した人々は悪いところに墜ちて、苦しみ悩む。

G217 恥じなくといひとを恥じ、恥ずべきことを恥じない人々は、邪な見解をいだいて、悪いところにおもむく。

G218 汚れなくてよいことに恐れをいだき、恐れねばならぬことに恐れをいだかない人々は、邪な見解をいだいて、悪しきといひにおもむく。

G219 避けねばならぬことを避けなくてよいと思ふ、避けてはならぬ（=必ず為さねばならぬ）ことを避けてもよしと考える人々は、邪な見解をいだいて、悪いところにおもむく。

G220 遠ざけるべきこと（=罪）を遠ざけるべきであると知り、遠ざけてはならぬ（=必ず為さねばならぬ）ことを遠ざけてはならぬと考える人々は、正しい見解をいだいて、善いところにおもむく。

G221 汚れの無い人々は全き安らぎに入り輪廻を離れ、それ以外の人々は輪廻にとどまり、行いにより死後に赴く所が決まる。

第三節 わせわせな人

GS 18 節 仏弟子

G222 すべて悪しきいふをなさず、善いことを行ない、心を淨めるいふ、——これが諸のみ仏の教えである。

G223 他を罵らず、害わらず、慎んで口を守り、食事に関して（適當な）量を知り、適時 禅定（念定）を行ない、心に関する事に努め励む。——これがもんもんのみ仏の教えである。

G224 田舎へて、耳について、鼻について、舌について、身について、意について、言葉について慎しもう。

G225 あらぬいふについて慎しめば、すべての苦しみを超える。

G226 人々は恐怖にかられて、山々、林、園、樹木、靈樹など多くのものにたよらうとする。

G227 しかし、これは安らかなよりどころではない。それは最上のよりどころではない。それらのよりどころによつてはあらゆる苦悩から免（まのが）れるとはできない。

G228 法（真理）とみ仏と真人（聖者）の集いを愛し敬い、四つの尊い真理を見る事によつて、あらゆる苦悩から免（まのが）れることができる。

G229 いの四つの尊い真理とは、（1）苦しみと（2）苦しみの成り立ちと（3）苦しみの超克（チヨウコク）と（4）苦しみの終滅（オワリ）におもむく八つの尊い道（八聖道）である。

G230 正しく覚つた人（=み仏）の説かれた教えを、はつきりと学び得たなら、教示した人が、いかなる人であろうとも、その人を恭しく敬礼せよ。また、その師に頼ることなく、常に自分で考え方判断する自立した心を養え。

G231 もののものみ仏の現われたまゝのは楽しい。
正しい教えを説くのは楽しい。
つむじが和合しているのは楽しい。
和合している人々がいそしむのは楽しい。

G232 必要に応じ「法（真理）、み仏、心身」について禅定（念定）をすれば空を体現し、常に氣をつけてこれを繰り返せば、覺醒し涅槃（悟りによる解脱）の境地に入る。

G233 みずから恥じて意を制し、良い馬が鞭に邪魔されないように、世の非難に邪魔されない人が、この世に誰か居るだろうか？
鞭をあてられた良い馬のように勢いよく努め励めよ。

G234 我の利得ばかりを求めるは、心が退化する道を進む。この道はあたり一面張り巡らされ選択しやすい。しかし、繁栄と心の成長をもたらす涅槃への道もある。仏弟子はこのわりを知つて、虚榮を求めず、涅槃への道を努め励み進め。

G235 真理を喜び、真理を楽しみ、真理をよく知り分けて、真理にしたがつてゐる者たちは、正しい」とわりから墜落する事がない。

G282 「わたしたちには子がある。わたしには財がある。」と思つて愚かな者は悩む。

しかしごとに己が自分のものではない。
ましてどうして子が自分のものであろうか。どうして財が自分のものであろうか。

G283 ものも愚者がみずから愚であると考えれば、すなわち賢者である。愚者でありながら、しかもみずから賢者だと思つ者こそ、「愚者」だと言われる。

G284 愚かな者は生涯賢者に仕えて、真理を知る事が無い。匙が汁の味を知る事ができないように。

G285 聰明な人は瞬時（またたき）のあいだ賢者に仕えて、ただちに真理を知る。舌が汁の味をただちに知るように。

G286 あさはかな愚人どもは、己（おのれ）に対して仇敵（かたき）に対するようにふるまう。悪い行いをして、苦い果実（ゝ）のみをむすぶ。

G287 もしも或る行為をした後に、それを後悔して、顔に涙を流して泣きながら、その報いを受けるならば、その行為をしたことは善くない。

G288 もしも或る行為をしたのに、それを後悔しないで、嬉しく喜んで、その報いを受けるならば、その行為をしたことは善い。

G289 愚かな者は、悪いことを行つても、その報いの現れないあいだは、それを蜜のように思いなす。しかし、その罪の報いの現れたときには、苦惱を受ける。

G290 愚かな者は、悪い行ないをしておきながら、気がつかない。しかし浅はかな愚者は自分自身のしたことにによって悩まされる。あたかも、火がゝの愚者を焼きゝがすように。

G291 愚かなものは、真理をわきまえた人が得る功德と同じように、断食行により功德が得られると考える。しかし、愚者の行う行為は功德はない。

G292 惡事をしても、その業は、しばり立ての牛乳のように、すぐに固まるのではない。（徐々に固まって熟する）その業は、灰に覆われた火のよう、（徐々に）燃えて悩ましながら、愚者につきあひ。

G293 愚かな者に念慮（オモイ）が生じても、ついにその人には不利なことになつてしまふ。その念慮はその人の好運（シアワセ）を滅ぼし、その人の頭を打ち碎く。

G294 「ゝれは、わたしのしたことである。在家の人々も出家の人々も、ともにゝのことを知れよ。およそなすべき」ととなすべか

G246 修行僧は、怠ることなく清く生き、自分の得たものをが少なくとも、それを軽んじない。

G247 氏姓と生れによつてバラモンとなる。

氏姓と生れによつて修行僧となるのではない。真理と理法とをまもり涅槃（悟りによる解脱）に入りし修行僧が、眞の修行僧であり、バラモンとは言わない。

G248 製縫を頭から纏ついていても、性質（タチ）が悪く、つつしみのないバラモンが多い。かれら悪人は、悪いふるまいによつて、悪いといふに生まれる。

G249 愚かなバラモンよ。身なりだけ整えて、何になるのだ。汝は内に密林（＝汚れ）を藏して、外側だけを飾る。

G250 またバラモンは粗末な身なりで瘦せて血管があらわれていよいよ寂しい場所で一人で瞑想に専念するとも言われている。

G251 しかし、（バラモン女の）胎から生れ（バラモンの）母から生れた人をバラモンと呼ぶのである。ゝの人が「[君よ] といつて呼びかける者」でも、「妾執にとらわれている者」でもバラモンである。

執着を離れ制す修行僧、一その人を吾は眞の修行僧と呼び、バラモノとは呼ばばない。

G252 頭を剃つたからとて、教えをまもらず、偽りを語る人は、出家した修行僧ではない。欲望と貪りにみちている人が、どうして出家者であろうか？

G253 裸の行も、髪に結うのも、身が泥にまみれるのも、断食も、露地に臥すのも、塵や泥を身に塗るのも、蹲つて動かないのも、真理とみ仮への疑いを離れていない人を淨めるとはできない

G254 修行僧が、意が浮わつくとなく、言葉をつつしみ、思慮して語り、事実と真理とを明らかにするならば、その人の説くところはやさしく甘美になる

G255 心を励まし、行いを反省せよ。修行僧よ。心を整え、正しい念いをたもてば、汝は安樂に住するであろう。

G256 修行僧よ。この舟から水を汲み出せ。汝が水を汲み出したならば、舟は軽やかにやすやすと進むであろう。貪りと憎悪を断ち、ジャスマシンの花が花びらを捨て落とすように、貪りと憎悪を捨て去れば、汝は安らぎにおもむくであろう。

G257 五下分結の五上分結の順に理解して、これらの執着を離れ統べよ。

さりに、信、精進、念、定、慧による五つ（のはたらき）を修めよ。

そうすれば、修行僧は、五つの汚れ（貪り、憎悪、迷惑、高慢、疑惑）を超えて、激流を渡つた者とよばれる。

G258 私は、解脱の楽しみを得た。それは凡夫の味わい得ないものである。それは、戒律や誓いだけによつても、また博学によつても、また瞑想を体現しても、またひとり離れて臥すことによつても、得られないものである。修行僧らよ、正しい禪定により法（眞理）を体得し汚れが消え失せない限りは、油断するな。

G259 修行僧よ。禪定せよ。なおざりになるな。汝の心を情欲の対象に向けるな。なおざりのゆえに鉄丸を呑むな。（灼熱した鉄丸で）焼かれるときに、「「」れは苦しい」といつて泣き叫ぶな。

G260 法（眞理）を守らず、自ら慎むことがないのに國の信徒の施しを受けるよりは、火炎のように熱した鉄丸を食らうほうがましだ。G261 茅草でも、ふじえ方を誤ると、手のひらを切るように、修行僧の行も、誤つておこなうと、地獄にひきずりおろす。

G262 もしも為すべきことであるならば、それを為すべきである。それを断乎として実行せよ。行ないの乱れた修行者はいつそ多く塵をまき散らす。

G263 修行僧を打つな。修行僧は打つ人に対して怒りを放つな。修行僧を打つものには禍がある。しかしただ怒るだけの修行僧にはさらに禍がある。

G264 修行僧が念と定の修行のために、人のいない場所で心を静め真理を正しく観ずるならば、人間を超えた楽しみがおこる。この修行により、個人存在を構成している諸要素の生起と消滅とを、徐々に正しく理解する。それにつれ、個人存在の不死のいとわりを知り、それによる喜びを、彼は体得する。

G265 世間から離れた静けさの中で、念いを静め、禪定に専中している修行僧は、正しさとりを開く。神々でさえもその人を羨む。G266 たゞ年の若い修行僧でも、仏の道にいそしむならば、雲を離れた月のように、この世を照らす。

G267 修行僧よ。勇敢であれ。情欲の流れを断ち、諸の妄執を去れ。諸の現象の生成と消滅を知つて、作られざるもの—法（眞理）を知る者であれ。

G268 修行僧が、身も静か、語（ことば）も静か、心も静かで、よく精神統一をなし、世俗の享樂物を吐き捨てたならば、眞の修行僧とも真人とも呼ばれる。

G269 出家して修行し、この世の情欲の激流を超え、妄執の尽きた人、—その人を吾は【眞の修行僧】と呼ぶ。

G270 出家して修行し、愛欲を断ち切り、愛欲の生存の尽きた人、その人を吾は【眞の修行僧】と呼ぶ。

GS 20 節 道を実践する人

G271 あらあらしく軽率な裁断する人は道を実践する人ではない。法（眞理）に照らして誠と誠でないものをはつきりと区別する人が法を守る道を実践する賢い人である。

G272 多く説くからとて、それゆえに賢明なのではない。心穏やかに、怨むことなく、恐れることのない人、その人こそ道を実践する賢い人である。

G273 多く説くからとて、それゆえに道を実践している人なのではない。たとい教えを聞くことが少なくとも、身をもつて真理を見る人、怠つて道からはずれることの無い人—その人こそ道を実践している人である。

G274 頭髪が白くなつたからとて【長老】なのではない。ただ年をとつただけならば【空しく老いぼれた人】と言われる。

G275 誠あり徳あり慈しみがあつて他を害せずつつしみあり心身を整え汚れを除くよう氣をつけている人こそ「長老」と呼ばれる。

G276 嫉み、吝嗇（りんしょく＝ケチ）、偽りを断ち、根絶やしにし、さらに、憎しみをのぞき、聰明である人、かれこそ「端正な人」とよばれる。口先や美しい容貌では、「端正な人」とはならない。

G277 ただ沈黙しているからとて、道を実践する人と思つてはならない。そのような中には、愚かに迷い無智なる人がたくさんいる。

G278 秤を手にもつているように、いみじきものを取り、もろもろの惡を除く賢者こそ道を実践する人なのである。この世にあって善惡の両者を（秤りにかけてはかるように）よく考える人こそ道を実践する人とよばれる。

G279（悪だからといって）他の生きものを害なうのは、聖者の道の実践ではない。生きとし生けるもの全てを害わないのが聖者の道の実践という。

GS 21 節 愚かな人

G280 眠れない人には夜は長く、疲れた人には一里の道は遠い。正しい眞理を知らない愚かな者どもには、生死の道のりは長い。

G281 旅に出て、もしも自分よりもすぐれた者か、または自分にひとしい者に出会わなかつたら、むしろきつぱりと独りで行け。愚かな者を道伴（づ）れにしてはならぬ。

G332 いの世の人々は、憎悪、誤った見解、愛欲・愛執、疑惑、慢心、無明によつて害われる。

憎悪、誤った見解、愛欲・愛執、疑惑、慢心を消滅させ、さらに、無明を滅ぼした真人——その人を吾はブツダと呼ぶ。

G333 慎みと禪定を完成させ、常になすべきことをなし、汚れと汚れによる身体形成の絆を消滅させ、涅槃（悟りによる解脱）に達した真人を最後の身体に達したと言う。その人を吾はブツダと呼ぶ。

G334 彼岸（カナタノキシ）もなく、此岸（コナタノキシ）もなく、恐れもなく、束縛もない真人——その人を吾はブツダと呼ぶ。

G335 作られたもの——既存の信仰や神を軽信する——となく、作られたもの——法を知り、生死の絆が絶たれ、善惡の計らい、もろもろの情欲から離れた真人——その人を吾はブツダと呼ぶ。

G336 現在、過去、未来の全ての汚れを精算せよ。

その様な人を生存の彼岸に達したという。

そして、現在、過去、未来の全てのものを認識するであろう。

——その真人を吾はブツダと呼ぶ。

GS 24 節 “ブツダ”

G337 太陽は昼にかがやき、月は夜に照し、武士は鎧を着てかがやき、真人は禪定に専念してかがやく。しかしブツダはつねに威力もて昼夜に輝く。

G338 明らかな知慧が深くて、聰明で、種々の道に通達し、禪定を完成させ涅槃（悟りによる解脱）に入りし人、——その人を吾はブツダと呼ぶ。

G339 すべての束縛から放たれ、恐れることなく、執着を超越して、とらわれることの無い人、——その人を吾はブツダと呼ぶ。

G340 いの障害・険道・輪廻（サマヨイ）・迷妄を超えて、渡り終わつて彼岸に達し、禪定・熟考し、興奮する——となく、疑惑なく、妄執することなくして、心穏やかな人、——その人を吾はブツダと呼ぶ。

G341 我はすべてに打ち勝ち、すべてを知り、あらゆることがらに関して汚されていない。すべてを捨てて、愛欲は尽きたので、——ころは解脱している。みずからさとつたのであって、誰を（師と）呼ばうか。（「その我とは何ぞや、釈迦よ、答えよ。」）

GS 22 節 賢い人

G296 忍耐・堪忍は最上の苦行である。涅槃（悟りによる解脱）は最高のものであると、もろもろのみ仏は説きたまう。他人を害する人、悩ます人は、賢い人ではない。

G297 実に己（守護神）は心（自分）の主（あるじ）であり、帰趣（よるべ）である。故に心を整えよ。商人が良い馬を調教するように。

G298 水道をつくる人は水をみちびき、矢をつくる人は矢を矯め、大工は木材を矯める様に、賢者は心を整えよ。

G299 賢い人々は努め励みあの執着から離れ統べる。

G300（おのが）罪過（ツミトガ）を指し示し過ちを告げてくれる聰明な人に会つたならば、その賢い人につき従え——隠してある財宝のありかを告げてくれる人につき従うように。そのような人につき従うならば、善い——とがあり、悪い——とは無い。

G301 悪い友と交わるな。卑しい人と交わるな。善い友と交われ。尊い人と交われ。

G302 賢者は、どこにいても、執着を離れ統べるので、楽しみを欲してしゃべる——とは無い。楽しい——とに遭（あ）つても、賢者は心の慎みを忘れず動ずる——とはない。

G303 一つの岩の塊りが風に揺るがないように、賢者は非難と賞賛により心が乱れる——とはない。

G304 その行ないが親切であれ。（何ものでも）わかつ合え。善い——とを実行せよ。そうすれば、喜びにみち、苦惱を減するであろう。

G305 聖者が道を説く時、その聖者を賢い人は愛し、愚かな人は疎む。

G306 自分のためにも、他人のためにも、子を望んではならぬ。財をも國をも望んではならぬ。
(道にかなつた) 行いあり、明かな知慧ある者と真理にしたがつておれ。

G307 たゞや貨幣の雨を降らすとも、愚者の妄執が満足される」とはない。「愚かな楽しみは短くして後は苦となる。」と知るのが賢い人である。

G308 賢者は、悪いことがらを行わず、善いことがらを行え。愚者には楽しみ難い孤独（ひとりい）のうちに、賢者は喜びを見出すであろう。

G309 人は、身体が死んでも魂は存在したままである。

人の身を受けることは、稀で貴重ゆえ、無駄にしてはならない。

もうもろのみ仏の出現したもうことも正しい教えを聞く機会も稀であり、人間の身を受けなくては実現し難い。

G310 尊い人（＝み仏）は得がたい。その人はどゝにでも生れるのではない。思慮深い人（＝み仏）の生れるところは、光り輝くであろう。

G311 真理が正しく説かれたときに、真理にしたがう人々は、渡りがたい輪廻転生を超えて、涅槃（さとりによる解脱）にいたるであろう。

G312 真理を喜ぶ賢い人は、真理を聞き、正しく生活を送り心穏やかに暮らす。その人の心は、深い澄んだ湖のように穏（おだ）やかで清らかになる。

G313 大地のように慎み深く、整った門のように分別を保ち、汚れた泥がない深い湖のように心が清らかな、そのような境地にある人には、もはや生死の世は絶たれている。

G314 人々は多いが、涅槃（さとりによる解脱）に達する人々は少ない。他の（多くの）人々は輪廻転生をさまよつている。

G315 心の汚れが消え失せ解脱するとは、空を体現しての世の実相を認識する」とである。この解脱者たちの行く手は広大で測りがたい。—空飛ぶ鳥の行く手が測り難いように。

G316 空の体現によつて解脱して、やすらかに帰した人—そのような人の心は穏（おだ）やかである。」とばも穏（おだ）やかである。行いも穏（おだ）やかである。

GS 23 節 真人

G317 村にせよ、荒れ地にせよ、低地にせよ、平地にせよ、真人の住む土地は楽しい。

G318 真人は人のいない荒れ地でも楽しい。世人の楽しまないところにおいて、愛執なき真人は楽しむであろう。かれらは快樂を求めるからである。

G319 在家者・出家者のいずれとも束縛の絆を作らず、住居にこだわらずに修行し、愛欲の少ない人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

G320 （い）の世で）正しく生きて 涅槃（悟りによる解脱）に入つた真人は、束縛の絆をのがれ憂いや悩みは存在しない。

G321 精神の安定統一していない人には明らかな知慧が無い。

精神の安定統一と明らかな知慧とがそなわつてゐる人は涅槃（悟りによる解脱）に入る。

G322 身にも、言葉にも、心にも、悪い事を為さず、（い）の三つについて常に慎んでゐる人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

G323 粗野なはず、ことがらをはつきりと伝える真実のことばを発し、ことばによつて何人の心を害する意のない人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

G324 罪がないのに罵られ、なぐられ、拘禁されるのを堪え忍び、忍耐の力あり、心の猛き人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

G325 敵意ある者との間にあつて敵意なく、暴力を用いる者との間にあつて心おだやかに、妄執する者との間にあつて妄執しない人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

G326 強くあるいは弱い生きものに対し暴力を加える」となく、無益な殺生を行う」とも、行わせぬ」ともない人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

G327 この世において、長からうと短からうと、微細であろうとも粗大であろうとも、淨からうとも不淨であろうとも、すべて与えられない物を取らない人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

G328 名称とかたちについて「わがもの」という想いが全く存在しない、何ものも無いからとて憂える」との無い人は、真人とよばれる。

G329 八正道により、心を正しくおさめ、妄執なく貪りを捨てたのを喜び、煩惱を滅ぼし尽くして輝く人は、現世において全く束縛から解きほいされてい。

G330 愛欲を離れ、妄執なく、諸の語義に通じ諸の文章とその脈絡を知るならば、その人は最後の身体をたもつものであり、「大きな知慧ある人」と呼ばれる。

G331 愛欲をなくし、汚れを滅ぼしつくした真人は、さとりの究極に達した人で、生存の矢を断ち切つた人となる。

G002 水の中（霊界）の住処から引き出されて陸「おか」の上（ゝの世）に投げ捨てられた魚のように、ゝの心は、悪魔の支配から逃れようとしてもがきまわる。

元詩 水の中の住処から引き出されて陸「おか」の上に投げ捨てられた魚のように、この心は、悪魔の支配から逃れようとしてもがきまわる。

（口メンソール）

水の中＝霊界です。霊界はゝの世と違ふとても広いので、霊界でいた場所（階層）が重要ですから、それに対応して、住処という言葉をつけて いると考えています。

陸の上＝ゝの世です。

お釈迦様には、私たち人間の心が、「陸「おか」の上に投げ捨てられた魚」のように、お見えになつたのでしよう。悪魔の支配から逃れようともがき回るところに、神様、仏様が人を救済しようと決心なさる理由があるのでしよう。しかし、ゝの守護が弱まれば、悪魔の支配に落ち、深みにハマります。

この世で正しい生活を送るには、霊界や神界からの守護が必要なのですが、心を構成する魂の指針が、この真理のことばに書かれているのです。

しかし、この世で生活を送るには、悪魔の守護もあります。

真理のことばで教えていることを自分で理解し実行に移していくば、顕在意識を直接制御する潜在意識を鍛え正流の情報を顕在意識に送れるようになり、神様、仏様の守護の下に行くことができます。

教えを聞かなくとも正しく生きれている人は、靈や魂に実力のある人です。そういう人は必ずいますが、大半の人には正しい教えが必要ではないかと感じています。

詰番印 G003(F003, C, O035 ,OS3) [[@ GS 1 心々意]]

G003 意は、顕在的で、軽々（かるがる）とぞわぬき、欲するがままにおもむき捉え難い。

心は、ゝの顕在的な意と、極めて見難く微妙な潜在部から成る。

元詩 心は、捉え難く、軽々（かるがる）とぞわぬき、欲するがままにおもむく。その心をおもむるゝは善ゝ」とある。

心をおさめたならば、安樂をもたらす。

（口メンソール）

「捉えがたい」、「軽々とぞわぬき」、「欲するがままにおもむく」というのは顕在意識部分だと考えています。

G342 ブッダの勝利は敗れることがない。この世においては何人も、ブッダの勝利には達しえない。ブッダの境地は、ひろくて涯しがない。足跡をもたないブッダを、いかなる道によつて誘い得るであろうか？

(さあ、答えよ、釈迦よ。)

G343 誘なうために網のようにならみつき執着をなす妄執は、ブッダにはどこにも存在しない。ブッダの境地は、ひろくて涯しがない。足跡をもたないブッダを、いかなる道によつて誘い得るであろうか？

(さあ、答えよ、釈迦よ。)

G344 蓮葉の上の露のように、錐（キリ）の尖（サキ）の芥子のように、緒の情欲に汚されない人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

G345 芥子粒が錐（キリ）の尖端から落ちたように、愛欲と憎惡と高ぶりと隠し立てとが脱落した人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。G346 ゝの世の禍福いづれにも妄執することなく、憂いなく、清らかな人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

G347 ゝだわりあることなく、疑惑なく、不死の底に達した人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

G348 ゝの世でもあの世でも、妄執を抱かず、意を慎み、束縛を持たない人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

G349 すでにゝの世において自分の苦しみの滅びたことを知り、重荷をおろし、とらわれの無い人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

G350 曇りのない月のように、清く、澄み、濁りがなくなつた人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

G351 人間の絆を越え、天界の絆を越え、すべての絆を越えた人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

G352 「快樂」と「不快」にとらわれることなく、清らかに涼しく、苦樂にうち勝つた英雄、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

G353 生きとし生ける者の生死をすべて知り、妄執なく、良く生きし人、覚つた人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

G354 神々も天の伎楽神（ガンダルヴァ）たちも人間もその行方を知り得ない人、煩惱の汚れを滅ぼしつくした人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

G355 牝牛のように雄々しく、気高く、英雄・勝利者・汚れの無い人・解脱者—その人を吾はブッダと呼ぶ。

G356 前世の生涯を知り、また天上と地獄とを見、生存を滅ぼしつくすに至つて、直觀智を完成した聖者、完成すべき」とをすべて完成した人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

第3部 再考「真理のゝじよせ」

記述方法の説明

- 「詩番号」の行では、G 番号 (F 番号)、最終評価、O 番号、オリジナル章番号) を書き記しました。

G 番号：再考「真理のゝじよせ」ver.2 (本書) 中の詩番号

GS 番号：再考「真理のゝじよせ」ver.2 (本書) 中の節番号

F 番号：再考「真理のゝじよせ」ver.1 (前書) 中の詩番号

O 番号：中村元氏著「真理のゝじよせ」中の詩番号

OS 番号：中村元氏著「真理のゝじよせ」中の章番号

- 最終評価は主観的なもので、基準は下記の通りです。

A：全面 もしくは ほぼ 受け入れ

B：部分的書直し

C：大幅書直し

- 「F 番号」、「F 番号」、「元詩」の行には、それぞれの詩を書き記します。

第一章 やわらかな事

「心、口、白口、自分」などが、定義も曖昧に散りばめられていて、全体にはつきりしない詩になつてゐるのが現状です。中村氏の現代語への訳出は古いものに對してかなり忠実になされてゐると思われますので、この辺りの定義があやふやであるのは、残念ながらかなり昔からだと思われます。「付録1 魂と脳と守護霊」と「付録2 「心を整える」と「心が治る」と「心を慎む」についての考察」を参照にしながら、詩文を読んでください。

詩は、全く別なものに書き換えられているのではなく、主に語句の入れ替えによりかなり古い時代から改さんされている可能性があるという印象を受けます。おそらくブッダ「コーサの編纂時には完成していたのではないかと考えています。各詩」といって、付録1、2に基づいて、「(吾の) 心、口、意(頭在意識)」などから最も適している言葉を選び置き換えていきます。「自」という言葉

は、意思が決断する「みずから」と意思とは関係ない「おのず」の意味があり曖昧さが増す字なのでなるべく使用を控えました。また、通常は区別されない「吾」と「我」ですが、本書では区別して使用しています。付録7 (4) に詳細を記述します。

第1章 さまさまな事は、1-2節編成で、各節番節名は、

GS 1 節 心と意、GS 2 節 口(おのれ)、GS 3 節 はげみ、GS 4 節 老じぬいの、GS 5 節 世の中、GS 6 節 道、
GS 7 節 千といふ数にちなんや、GS 8 節 花にちなんで、GS 9 節 楽しみ、GS10 節 やまわがねいの、
GS11 節 象、GS12 節 ひと組ずの
です。

GS 1 節 心と意

心の構造について正しく考察した結果、節名を「心」から「心と意」に変更します。これは、古い文献に戻した形となりました。F004詩は、曖昧なので削除しました。また、詩 F008 ～ F009 は一つの詩 (G007) とした。本節は9詩から成ります。

詩番号 G001(F001, C, O033, OS3) [[@ GS 1 心と意]]

G001 心は動搖し、やわらぎ、護り難く、制し難い。賢い人はこれをして直す — 口師が矢の弦を直すよへど。
元詩 心は動搖し、やわらぎ、護り難く、制し難い。英知ある人はこれを直す — 口師が矢の弦を直すよへど。

(口メソント)

頭在意識が暴走しやすいのは、心の汚れにより作られた潜在意識の思考回路から流される誤まった情報と、外部(靈も含む)からの悪い刺激を受信するからだと考えています。

潜在部分の命令により頭在部分が誤動作する場合、自分では誤動作している自覚がないのです。他方、外部からの反応を頭在意識が感じ取ったり、守護神からのアドバイスを潜在意識が感じたりして、修正されていくのです。しかし、どちらの場合も、心の汚れにより感度が落ちたり、正しくない情報を受け取ると、どんどん正しい道から外れてしまうのです。

頭在意識を直接制御する潜在意識を鍛え正流の情報を頭在意識に送れるようにする」とが、詩中の「(れ(心)を直す)」が、それによつて、暴走しやすい頭在意識を抑えるよう教示されています。

詩番号 G002(F002, A, O034, OS3) [[@ GS 1 心と意]]

G011：賢い人のカテゴリーになると、常に慎んで目覚めているように努力しなくてはなりません。

元詩に出てくる三つの区分とは、第一の時期は少年期、第二の時期は壮年期、第三の時期は老年期だそうです。第一の時期、第二の時期の行いで、第三の時期が決定されるに決まっています。妻子を養うために悪い事とわかつて、それに加担する事は、良くない事で、回避する方法を模索するべきです。いのように三つの区分が独立してあるわけではないので、突然、第三の時期だけめざめようなんて不可能です。この三つの区分については、中村氏の注釈によつて、ブッダゴーサの意思が強く働いている事がわかります。したがつて、後代の付けてし部分なので削除します。

詠番印 G012 (F014, C, O161, OS12) ' G013 (F015, C, O162, OS12) [[@ GS 2 𠂔 (おのれ)]]

G012 心が作り、心から生じ、心から起つた悪が知慧悪しき人を打ちくだく。—金剛石が宝石を打ちくだくよろに。

元詩 自分がつくり、自分から生じ、自分から起つた悪が知慧悪しき人を打ちくだく。—金剛石が宝石を打ちくだくよろに。

G013 愚かな人は、仇敵がかれの不幸を望むとおりのことを、𠂔(靈)に対してなす。—蔓草(ツルクサ)が沙羅の木にまといつくようになすに。

元詩 極めて性の悪い人は、仇敵がかれの不幸を望むとおりのことを、自分に対してなす。—蔓草(ツルクサ)が沙羅の木にまといつくようになすに。

一次 愚かな人は、仇敵がかれの不幸を望むとおりのことを、自己(魂)に対してなす。—蔓草(ツルクサ)が沙羅の木にまといつくようになすに。

(口メノント)
G012: 「自分」を「心」と置き換えます。その人本体、全てが、靈(守護神)と魂(四魂)との体現ですから、「人を打ち碎く」とは、何れも全てを打ち碎くことになります。気をつけましょ。

G013: 「極めて性の悪い人」は「愚かな人」、「自分に対してなす」は「𠂔(靈)」に対してなす」として、文章を整えます。

詠番印 G014 (F016, C, O158, OS12) ' 削除(な), なし, O159, OS12) [[@ GS 2 𠂔 (おのれ)]]

G014 先ず(畠の)心を正しく整え 心が治つてから、次いで他人に教えよ。されば賢明な人は、煩わされて悩むことが無いであらう。

元詩 O158: 先ず自分を正しくととのえ、次いで他人を教えよ。そうすれば賢明な人は、煩わされて悩むことが無いであらう。

O159: 他人に教えるとおりに、自分でも行なえー。自分をよくととのえた人こそ、他人をととのえるであろう。自己は実に制し難い。

詠番印 G004(F005, C, O037, OS3) [[@ GS 1 心々意]]

G004 心は独りで動きまわり、遠くに行つてしまふ顕在部がある。また、形体なく、胸の奥の洞窟(心臓)にひそんでいる潜在部もある。これら心を整える人々は、死の束縛から逃れるであらう。

元詩 心は遠くに行き、独り動き、形体なく、胸の奥の洞窟にひそんでいる。この心を制する人々は、死の束縛から逃れるであらう。

一次 心は独りで動きまわり、遠くに行つてしまふ顕在部がある。また、形体なく、胸の奥の洞窟(心臓)にひそんでいる潜在部もある。これ心を治める人々は、死の束縛から逃れるであらう。

(口メノント)
 整つていぢ治つていぢない心の曖昧さを表現しています。心は独りで動きまわり、遠くに行つてしまふ部分が主に顕在部(意識)、形体な

く、胸の奥の洞窟(心臓)にひそんでいる部分は主に潜在部(意識)と解釈できます。
「制する」は、「整える」とおしゃべ(F004 参照)。

詠番印 G005(F006, C, O038, OS3) [[@ GS 1 心々意]]

G005 信やいのりと念いが汚されているならば、正しい真理が見極められない。よつて心の安樂(安住)は得られず、やどりの智慧は湧いていない。

元詩 心が安住するとなれば、正しい真理を知らず、信念が汚されたならば、さどりの智慧は全つからず。

一次 正しい真理を知らず、信念が汚されたならば、心の安樂(安住)は得られず、やどりの智慧は湧いていない。

(口メノント)
 条件と結果がちぐはぐだ。整理して書か直しました。

詠番印 G006(F007, C, O039, OS3) [[@ GS 1 心々意]]

G006 心が煩惱に汚されねば、念いが乱れねば、善惡のはからいを捨てるに至つた覺醒者は、何も恐れることが無い。

元詩 心が煩惱に汚されねば、おもいが乱れることがなく、善惡のはからいを捨ててゐる覺醒者(田やめている人)には、何も恐れることが無い。

(口メノント)

発達には段階があります。

善惡のはからいを捨てんには、心が煩惱に汚されいでてもダメですし、怠いが乱れていてもダメです。
1→2→3→…の順を追つていくしかないで、その順番を逸脱するは正しい目的地には着けないばかりか、魂の退化に繋がります。

詩神叩 G007(F008+F009, C, O040+O041, OS3) [[@ GS 1 心と意]]

G007 ああ、いの身はあもなく地上によいたねんである。魂は抜け、水瓶の破片のように無用になる。身体は死に対し、いのよつに脆いものだと知れよ。
やし、心を城郭のように（堅固に）安立させ、智慧の武器をもつて悪魔と戦え。勝ち得たものを安樂する」となく守りぬけ。

元詩 O040：いの身体は水瓶のようになつて、いの心を城郭のように（堅固に）安立して、智慧の武器をもつて、悪魔と戦え。勝ち得たものを守れ。—しかもそれに執着することなく。

心をおさめたならば、安樂をもたらす。

O041：ああ、いの身はまもなく地上によいたわるであろう。魂は抜け、水瓶の破片のように無用になる。身体は、いのようになつて、身体への執着を離れよ。

F009：心を正しく治めて、智慧の武器を持ち悪魔と戦え。そして執着することなく、勝ち得たものを守れ。

（口メノム）

妾執と執着の関係は、付録5（2）参照。身体が心や魂を守ります。また、正しい心が身体を守り、邪みな心は身体も心も害します。お糸迦様は、悪魔との戦いにおいて、身体を傷つける武器での戦いではなく、（正しい心から湧き出る）智慧を人間の武器とすべきだと説かれています。以前は、身体への強い執着を諫める部分を残しましたが、今回は死と体の関係を言及するに止めました。また、いの2詩を1詩にしました。

「心を城郭のように（堅固に）安立させ」は「心を整え守る（慎む）」の比喩と考えています。

詩神叩 G008(F010, A, O042, OS3) ' G009(F011, A, O043, OS3) [[@ GS 1 心と意]]

G008 憎む人が憎む人にたいし、怨む人が怨む人にたゞひし、いのものがいのをこぶへんか、邪なうことをぬかしていふ心はそれ

よりもひふこいふをする。

元詩 書換えなし

G009 母も父もその他親族がいのれぬよつわがへに優れたりとを、正しく受けられた心がしててくれる。

元詩 書換えなし

GS 2 節 口（おのれ）

いの節名を、「自口」から「口（おのれ）」に変えました。「GS1 節 心と意」のセットで存在する節と捉えます。

詩の順序は、内容を分類分けし、O160, O157, O161, O162, O158, O164, O163, O165, O166 と並べます。

「付録1 魂と脳と守護靈」を参考にしながら読みやすくだや。本節は詩から成ります。

詩神叩 G010 (F012, C, O160, OS12) ' G011 (F013, C, O157, OS12) [[@ GS 2 口（おのれ）]]

G010 口（靈）いや（吾の）心の主である。他人がいのへし（吾の）心の主であるか？ 心をよく整えたならば、得難き主を得る。やあく口（靈）を得る。

元詩 自口（）そ自分の主である。他人がいのして（自分の）主であるか？ 自口をよくいのえたならば、得難き主を得る。

第一次 魂（自己）いそ心（自分）の主である。他人がいのして心（自分）の主であるか？ 魂（自己）をよく整えたならば、得難き主を得る。

G011 もしも人が口（靈）を愛しいものと知るならば、心（吾）をよく守れ。賢い人は、怠らずに励み、常に心を慎み整え田やめめいじるよつにせよ。

元詩 もしもひとが自口（）を愛しいものと知るならば、自口をよく守れ。賢い人は、夜の三つの区分のうちの一つだけでも、つづ込んで田やめでね。

第一次 もしも人が魂（自口）を愛しいものと知るならば、心（自分）をよく守れ。賢い人は、怠らずに励み、常に心を治め、つづこんで田やめでいざるよつにせよ。

（口メノム）

G010：「田口」を「口（靈）」、「自分」を「（田の）心」と変更しました。「得難き（心の）主=口（靈）」という解釈で、詩文を書直しました。

いれは無上の幸せである。

G022 意(恵^シ) つておこし、行いは清く、氣をつけて行動し、心は奮起し、法(真理)にしたがって生き、努め励む人は、名声が高まる。

元詩 いのちはるぶたち、思いつまし、行いは清く、氣をつけて行動し、みずから制し、法(のり)にしたがって生き、つとめ励む人は、名声が高まる。

一次 心は奮起し、思いつまし、行いは清く、氣をつけて行動し、自ら制し、法(のり)にしたがって生き、努め励む人は、名声が高まる。

(口メノヘ)

詩 G021：「安らぎ」を涅槃(悟りによる解脱)としました。

「安らぎ」は、罪穢れだらけの現在の現世において金錢的に安泰に暮らすところではありません。ところでも、現世での富裕や生活の安定は、罪穢れを溜めることによって得られるような場合も多いからです。ただし、心が整つてくると、生活が整つてくるのも事実ですしおの世で得られる富や財は本人が正しく努めた結果である」とも往々にしてあるのです。「涅槃(悟りによる解脱)」近く近づくにつれ、生活も追隨しバランス良く整つていくようです。

詩 G022：「自ら制し」は、「気をつけて行動し」に含まれると考えられるので削除し、語順を並べ替えます。

詔神印 G023 (F025, C, O025, OS2) [[@ GS 3 はげみ]]

G023 思慮ある人は、怠らず、努め励み、心を整え、妄執と憎悪と迷妄に打ち勝て。それにより、欲望による激流に押し流されない心の拠り所(己)を鎮(じよ)めまつれ。

元詩 思慮ある人は、奮い立ち、つとめ励み、自制・克己によつて、激流も押し流すといふのできない島をつくれ。

一次 思慮ある人は、怠らず、努め励み、心を治め、執着と怒りと迷妄に打ち勝て。それにより、情欲による激流に押し流されない心の拠り所(魂)を作れ。

(口メノヘ)

克己(ハハキ)：自分の欲望や邪念にうちかつい。全体に比喩が多過ぎてわからないので、拠り所=己(守護神様方)を心に鎮座していたただくよう心がける教えの詩としました。妄執と憎悪と情欲は付録5参照。

詔神印 G024 (F026, B, O026, OS2) ‘ **G025** (F027, B, O027, OS2) [[@ GS 3 はげみ]]

詔神印 G015 (F017, B, O164, OS12) [[@ GS 2 己 (おのれ)]]

G015 愚かにも、悪い見解にもひびいて、真理に従つて生きるブッダ・真人たちの教えを罵るならば、その人は悪い報いが熟する。

元詩 善からぬこと、己のためにならぬことは、なし易い。ためにならぬことは、なし易い。ためにならぬことは、善いことは、実に極めてなし難い。

(口メノヘ)

「聖者=真人」と定義しますので、「真人・聖者」ではなく、「ブッダ・真人」としました。

詔神印 G016 (F018, A, O163, OS12) ‘ **G017** (F019, A, O165, OS12) ‘ **G018** (F020, A, O166, OS12) [[@ GS 2 己 (おのれ)]]

G016 善からぬこと、己のためにならぬことは、なし易い。ためにならぬことは、善いことは、実に極めてなし難い。

元詩 善からぬこと、己のためにならぬことは、なし易い。ためにならぬことは、善いことは、実に極めてなし難い。

(口メノヘ)

一次 善からぬこと、己のためにならぬことは、なし易い。ためにならぬことは、善いことは、実に極めてなし難い。

人は他人を淨めることができない。

元詩 みずから悪をなすならば、みずから汚れ、みずから悪をなさないならば、みずから淨まる。淨いのも淨くないのも、各自のことがらである。人は他人を淨めることができない。

一次 曲い悪をなすならば、曲い汚れ、曲い悪をなさないならば、曲い淨まる。淨いのも淨くないのも、各自のことがらである。人は他人を淨めることができない。

ぬぬ」とができない。

G018 たどい他人にとつて、かに大事であらうとむ、他人の目的のために（吾の）心のつとめをして去つてはならぬ。己の目的を熟知して、（吾の）心のつとめに専念せよ。

元詩 たどい他人にとつて、いかに大事であらうとむ、（自分ではない）他人の目的のために自分のつとめをして去つてはならぬ。自分の目的を熟知して、自分のつとめに専念せよ。

一次 たどい他人にとつて、いかに大事であらうとむ、（自分ではない）他人の目的のために自己のつとめをして去つてはならぬ。自己の目的を熟知して、自己のつとめに専念せよ。

（口メメント）

G017：「田^ハ」 = 「心」、「各田の^ハ」 = 「各人の心のありよう」へ変更しました。

G018：「自分の^ハ」 = 「（吾の）心のつとめ」、「自分の目的」 = 「己の目的」と変更しました。

GS 3 節 はげみ

人間が取り組む課題や取り組む姿勢は、各自の発達段階に応じて異ならないといけないと、いう事を痛感しています。その結果、人間が生きる姿勢として推奨されるものが、魂のレベルに合わせて、

「怠らずに励む（不怠惰）」 → 「努め励む」 → 「学び努め^ハ」
に、順次、変化すると、私は考えました。これらの行為を多くの人のために行う（多利）^ハとが、どうやら「徳」という行為のようです。

いきなり「学び努める」から始める^ハと、壁が高すぎて、逆に悪影響です。ようするに、人は、「怠らずに励む」という土台が出来ていて初めて、「学び励む」に移行でき、それができるようになると、学び努めるところ相になると、私は考えて、います。

この結論に至った議論に関しては、GS08 花にちなん^ハ G083, G084 詩の口メメントも参照ください。

実際には、人間が怠ってはいけないものとは、

- ・日頃の生活で優先順位が高く、回避すると生活が立ち行かない仕事
- ・生まれながらに持つ自分の勤めや課題

です。後者は自覚するまでが大変ですが、前者を不怠惰で正しくなせば、後者はおのずと思い出されてしまう。そして、後者に

着手するあたりから、不怠惰だけではなく、努め励み、さらには学び努めるという姿勢も必要になつてきます。これは、きつくなつるよう、悪魔が計ります（必要悪の部分も多いです）。ので、ついつい人間は脇道にそれてしまふのです。そんな人間を諫めていながら、「はげみ」の章です。そして、この章では、主に不怠惰から努め励みまでの教えが書かれています。

修行者に語った形態の詩もありますが、在家者と出家者の広い領域の人々に対して、有益な教えだと思いますので、そのように捉えてください。本節は12詩から成ります。

詩番印 **G019** (F021, A, O021, OS2) 、**G020**(F022, A, O022, OS2) [[@ GS 3 はげみ]]

G019 努め励むのは不死の境地である。怠りなまけるのは死の境地である。

元詩 つとめ励む人々は死ぬことがない。怠りなまける人々は、死者の^ハとくである。

元詩 つとめ励むのは不死の境地である。怠りなまけるのは死の境涯である。つとめ励む人々は死ぬ^ハとがない。怠りなまける人々は、死者の^ハとくである。

G020 ^ハのようにはつとめと知つて、努め励む^ハことをよく知る人々は、努め励む^ハことを喜び、覚醒者たちの境地を楽しむ。

元詩 ^ハのいじをはつきりと知つて、つとめはげみを能（よ）く知る人々は、つとめはげみを喜び、聖者たちの境地を楽しむ。

一次 ^ハのようにはつとめと知つて、努め励む^ハことをよく知る人々は、努め励む^ハことを喜び、真人（覚醒者）たちの明るく生き生きした生活を楽しむ。

（口メメント）

覚醒者=真人のみ仏=聖者と考えます。

詩番印 **G021** (F023, B, O023, OS2) 、**G022**(F024, B, O024, OS2) [[@ GS 3 せがみ]]

G021 真理に従う道を進むより努め励み、堪え忍ぶ^ハと強く、思慮ある人々は、涅槃（悟りによる解脱）に達する。

元詩 ^ハは無上の幸せである。

元詩 （道に）思いをいへし、堪え忍ぶ^ハと強く、つねに健（たけ）く奮励する、思慮ある人々は、安らぎに達する。^ハは無上の幸せである。

一次 真理に従う道を進むより努め励み、堪え忍ぶ^ハと強く、思慮ある人々は、安らぎに達する。

元詰 書換えなし

(口メヘル)

OS10 章 暴力 から移動しました。

詰袖叩 G035 (F037, A, O149, OS11) ' G036 (F038, A, O150, OS11) [[@ GS 4 老じぬい人]]

G035 秋に投げすてられた瓢箪(わらべたん) のよくな 鳩の色のよへないの匂(にお)い骨を見れば、なんの快さがあらうか?

元詰 書換えなし

G036 骨で城がつくられ、それに肉と血とが塗つてあり、老いと死と高(たか)くおかしこがおやぬいれじふ。

元詰 書換えなし

詰袖叩 G037 (F039, A, O151, OS11) ' G038 (F040, A, O152, OS11) [[@ GS 4 老じぬい人]]

G037 こども麗(うつく)しい国王の車も朽ちてしまつ。身体もまた老(し)じ近づく。しかし善い立派な人々の徳は老じぬい人がない。善い立派な人々は互

元詰 こども麗(うつく)しい国王の車も朽ちてしまつ。身体もまた老(し)じ近づく。しかし善い立派な人々の徳は老(し)じない人がない。善い立派な人々は互

元詰 こども麗(うつく)しい国王の車も朽ちてしまつ。身体もまた老(し)じ近づく。しかし善い立派な人々の徳は老(し)じない人がない。善い立派な人々は互

G038 学ぶ(うぶ)い人の少ない人は、豚(ぶた)のように老(し)る。その人の肉は増えるが、その人の知(ち)慧(ゑ)は増えない。

元詰 学ぶ(うぶ)い人の少ない人は、牛(うし)のように老(し)る。かれの肉は増えぬが、かれの知(ち)慧(ゑ)は増えない。

(口メヘル)

いふわり→道理、彼→その人と置き換へおむ。 G138： 1次変更詩から、G123詩を参考にして「牛」→「豚」に置き換えました。

詰袖叩 G039 (F041, A, O153, OS11) ' G040 (F042, C, O154, OS11) [[@ GS 4 老じぬい人]]

G039 わたくしは幾多の生涯にわたつて生死の流れを無益に経めぐつて來た、一家屋の作者(ツクリテ) おやがこむるにて。— あの生涯、いの生涯とくりかえすのは苦しいい人である。

G024 智慧(ちゑ)としき愚(ぐ)かな人々は怠惰(だまつ)になつむ。

しかし賢い人は、最上の財宝(たから)を守るよう、努め励むのを守る。

元詰 智慧(ちゑ)としき愚(ぐ)かな人々は放逸(ほういつ)にふける。しかし心ある人は、最上の財宝(たから)をもゆねよへど、ひとめ励むのをあもひ。

G025 怠(だら)ず、執着(しちやく)と歡樂(からく)に親(ちか)まことに、思念(しんねん)をいらす者は、大いなる樂(うき)しみを得ぬ。

元詰 放逸(ほういつ)にふけるな。愛欲(あいよく)と歡樂(からく)に親(ちか)むな。おいたるいとなく思念(しんねん)をいらす者は、大いなる樂(うき)しみを得る。

(口メヘル)

「心ある人」は、今後、「賢い人」に変換します。

欲(のぞみ)に関しては人間の一存(いっそん)ではなくい人ができなくなふ、「付錄(つけりゆく) 心の汚れ」で考察を行ないました。これに伴(とも)う詩 G025 では、愛欲(あいよく)を執着(しちやく)に置換します。

詰袖叩 G026 (F028, B, O028, OS2) ' G027 (F029, B, O029, OS2) ' G028 (F030, B, O030, OS2) [[@ GS 3 はげみ]]

G026 人は怠惰(だまつ)を退け、努め励むいひどみり、智慧(ちゑ)を得て、憂(うき)いをなへや。

山上にいる人が地上の人々を見下(みくだ)すように、その人は憂(うき)いを持つ他の多くの人々を、自分とは異(ことな)り、はつきりと見極(みきり)める。

元詰 豊者が精勵修行(せうりゅうせいぎょう)によつて怠惰(だまつ)を退けるときには、智慧(ちゑ)の高閣(たかどの)に登り、自らは憂(うき)い無くして(他の)憂(うき)いある愚(ぐ)んども見下(みくだ)す。— 山上にいる人が地上の人々を見下(みくだ)すように。

G027 怠(だら)なまでいる人々の中で、努め励み、そして、眠(ねむ)つてゐる人々の中で、目覚め(まづまづ)てゐる賢い人は、疾(めまい)く走(はし)る馬(うま)のようならぬ。

元詰 怠りなまけている人々の中で、ひそか(ひそか)ておはげみ、眠(ねむ)つてゐる人々の中で、ひそか(ひそか)て目覚め(まづまづ)てゐる思慮(しりゆ)ある人は、疾(めまい)く走(はし)る馬(うま)が、足(あし)の馬(うま)を抜いて駆(く)けるよへなものである。

一次 怠りなまけている人々の中で、一人でも努め励み、そして、眠(ねむ)つてゐる人々の中で、ひそか(ひそか)て目覚め(まづまづ)てゐる思慮(しりゆ)ある人は、足(あし)の馬(うま)を抜いて疾(めまい)く走(はし)る馬(うま)のようならぬものである。

G028 努め励む事が生(いき)の旗印(きいん)で、放逸(ほういつ)なことは死(死)の旗印(きいん)である。

元詰 マガヴァー(インドラ神)は、つとめ励んだので、神々の中での最高の者となつた。

「とめはげむ」とを人々はほめたたえる。放逸なることは常に非難される。

一次 爪め励む事は常に褒め称えられる。放逸なることは常に非難される。
マガヴァー（インドラ神）は、努め励んだので、神々の中での最高の者となつた。

（口メンヘ）

詩 G026 の「山上にいる人が地上の人々を見下すように」や詩 G027 の「疾くはしる馬が、足のろの馬を抜いて駆けるようなものである」のような比喩は、実際にお釈迦様が仰つたのか、後代の付け足しか惜ましいのですが、この手の比喩には、表現に光るポジティブな部分だけ今は残しました。

詩 G027 : G019 と G020 を参考に書き換えました。

詩 G028 : 具体的な神様のお名前については、誰でも仏道の修行半ばの人は認識できないようです。神様の名前は後から付いてくるという意見がありますが、私も賛成です。前の当方は、「マガヴァー（インドラ神）」を捉えられませんでしたが、今はあまり良い印象があります。この部分がなくとも教えが成立するところから削除します。

詩番印 G029 (F031, B, O031, OS2) ' G030 (F032, B, O032, OS2) [[@ GS 3 せげみ]]

G029 努め励む事を楽しみ、怠惰に恐れを抱く人は、微細なものでも粗大なものでも心のわざわざを、焼きつくしながら生活する。

元詩 いそしむことを楽しみ放逸に恐れをいだく修行僧は、微細なものでも粗大なものでも全て心のわざわざを焼きつくしながら歩む—燃え

る火のように。

G030 努め励む事を楽しみ、怠惰に恐れを抱く人は、堕落するはずではなく、すでに涅槃（悟りによる解脱）の近くにいる。

元詩 いそしむことを楽しみ、放逸に恐れをいだく修行僧は、堕落するはずではなく、すでにニルヴァーナの近くにいる。

一次 努め励む事を楽しみ、怠惰に恐れを抱く人は、堕落するはずではなく、すでに安らぎ（ニルヴァーナ）の近くにいる。

（口メンヘ）

「放逸」は「怠惰」と書き換えます。

怠らない修行の奨励の一歩先にある努め励みを楽しむ境地を教えてらっしゃいます。同じ仕事でも、嫌々やると、自分に与えられた仕事を嬉しい気持ちで努め励むのでは、周囲に与える影響が違うものです。周囲に与える影響まで責任を持つには、怠惰に恐れをいだき、努め励むのを楽しむくらいにならないといけないと教えてくださっています。この境地まで行くにはかなりの靈格の高さが必要ですので、無理な場合はコツコツと怠らずに目の前のことをこなすよう努力するのがベストです。

「安らぎ（ニルヴァーナ）」→「涅槃（悟りによる解脱）」に書き換えます。

GS 4 節 老ふるいと

この章、全体は、新約聖書に通じる文章仕立てだと感じています。全般的に、とても恐ろしい雰囲気を醸し出していますが、非常に正確に人間の体の特徴を説明しています。これらは、お釈迦様がより高次の存在から教授されて私たちに語ってらっしゃる教えだと思います。多少、筆を入れましたが、極めて改ざんが少ないと感じています。

「汝」という字は、目上のものが目下のものに使用する二人称です。当方としては、汝が使われた場合、本守護神様くらいの靈格の存在が四魂くらいの存在へむけて説かれているなど、上下の識別があると考えています。つまり、汝が使われた場合は私たち人間に上位の存在からの厳しみの「忠告だと考えて良いと思います。

本節は12詩から成ります。

詩番印 G031 (F033, A, O146, OS11) ' G032 (F034, A, O147, OS11) ' G033 (F035, A, O148, OS11) [[@ GS 4 老ふるいと]]

G031 何の笑いがあらうか。何の歎びがあらうか。—世間は常に燃え立つてゐるに—。汝らは暗黒に覆われてゐる。もう

じて燈明を求めるのか？

G032 見よ、粉飾された形体を！（それは）傷だらけの身体であつて、いろいろのものが集まつただけである。病いに悩み、意

欲ばかり多くて、堅固でなく、安住していない。

元詩 書換えなし

G033 ）の容色は衰えはてた。病いの巣であり、脆くも滅びる。腐敗のかたまりで、やぶれてしまった。生命は死に帰着する。

元詩 書換えなし

詩番印 G034 (F036, A, O135, OS10) [[@ GS 4 老ふるいと]]

G034 牛飼いが棒をもつて牛どもを牧場に駆り立てるより、老いと死とは生きとし生けるもののもの寿命を駆り立てる。

元詩 以前には悪い行ないをした人でも、のちに善によつてつぐなうならば、その人はいの世の中を照らす。—雲を離れた月のように。

(口メノム)

G048：怠りなまけた人の償いは、怠りなまけない」とじ、悪い行いをした人の償いは、善を行いうことなのでしょう。G215詩で記述されむ、悪いことをすくらんなら、何もしないほうが良いという内容と一致します。

両詩に統一感を出すために、G048から「また」を消し、G049に「あたかも」を足します。

詠浦叩 G050 (F052, C, O174, OS13) , G051 (F053, C, O175, OS13) [[@ GS 5世の中]]

G050 いの世の中は暗黒である。いのではつきらん (いのわりを) の実相を見分ける人は少ない。—網から脱れた鳥が少ないよ

へじ。

元詩 いの世の中は暗黒である。いのではつきらん (いのわりを) と実相を見分ける人は少ない。しかし、これらを見分けたならば、悪魔との軍勢にうち勝つ。あたかも、網から脱れた鳥のようだ。

G051 渡鳥は日中に往来を繰り返し、通力によつて動く者は虚空の道を回り、正しい心を持つ真人は悪魔とその軍勢にうち勝つて因縁からむこの世から放（はな）れブッダとなる。

元詩 白鳥は太陽の道を行き、神通力による者は虚空（そら）を行き、心ある人々は、悪魔とその軍勢にうち勝つて世界から連れ去られる。

一次 網から脱れた鳥のような真人は、あるものは白鳥のように太陽の道を行き、あるものは神通により虚空を行き、あるものはブッダとなる。

(口メノム)

・いの詩の ver. 1 のコメントは頓珍漢でした。あらためて訂正してお詫びします。前回は一一三神示を引用しましたが、今回は取り戻

ます。

・いの2詩の難解な部分が、鳥の部分と神通を使う者でした。

・「鳥」はそのまま「普通の人や大衆」として比喩されていると思われます。

・荻原雲来氏訳の「法句經」では G051 詩の「白鳥」は「鵝鳥」と書かれています。これはガチョウではなく渡鳥の類とのことです。比喩としては、善惡が完全に正しく判断できない多くの普通の人間で、いつも同じ失敗を繰り返して、この世の中を彷徨つているという感じです。

元詩 書換えなし

G040 家屋の作者よ！ 汝の正体は見られてしまつた。心は、妄執を滅ぼし尽くし（身体の）形成作用を離れたので、汝（心）

はもはや家屋を作ることはないであろう。汝の梁はすべて折れ、家の屋根は壊れてしまつた。

元詩 家屋の作者よ！ 汝の正体は見られてしまつた。汝はもはや家屋を作ることはないであろう。汝の梁はすべて折れ、家の屋根は壊れてしまつた。心は形成作用を離れて、妄執を滅ぼし尽くした。

(口メノム)

詩 G040 では、家屋（人間の体）の作者は誰か？ これが大切です。実は、これが煩惱や妄執に染まつた心だと、この詩は私たちに語りかけます。つまり、悪魔の副守護神様の言いなりになつてゐる四魂と副守護神様の意いが人間の体を作るのでしょうか。したがつて、心が煩惱や妄執を滅ぼせば、実は四魂は体の形成作用を離れるようです。ここまで来ると、涅槃（悟りによる解脱）に入る状況でしよう。

G0401 (F043, A, O155, OS11) , G042 (F044, A, O156, OS11) [[@ GS 4老いるいの]]

G041 若い時に、財を獲るゝなく、清らかな行なふをあわらんならば、魚のゝなくなつた池にいる白鷺のよゝに、瘦せて滅びてしまお。

元詩 書かえ不要

G042 若い時に、財を獲ることなく、清らかな行ないをまもらんならば、昔のいとばかり思い出して、かたくなな心となつて、壊れた弓のように横たわる。

元詩 若い時に、財を獲るゝなく、清らかな行なふをあわらんならば、壊れた弓によつたわる。—昔のいとばかり思い出してかくちながら。

(口メノム)

いの2詩は、在家者への教えです。正当な手段によつて財を獲ることは、清らかな行いを保つことと、同等に大切なことであることを、教えています。いとこいの世の中でたくさんの経験が必要な若い時の出家修行の励行にブレーキをかけていて、若い時の在家の生活の過いし方が大切であると注意を呼びかけています。

私なりに、若い時のパターンをこの詩に沿つて下記のように洗い出し、考察を行いました。

財を蓄えた+清らかな行いを保つ→真人へとステップアップする中年、老後
財を蓄えない+清らかな行いを保つ→仕事の従事

財を蓄えた十清らかな行いを保たない → 悪魔との契約か人生やり直し
財を蓄えない十清らかな行いを保たない → 人生やり直しか悪魔との契約

GS 5 節 卍のヰ

本節は1-2詩から成ります。

詰浦卯 G043 (F045, A, O167, OS13) , G044 (F046, A, O168, OS13) , G045 (F047, B, O169, OS13) [[@ GS 5 卍のヰ]]

G043 「劣なしかたになつむな。急けてるわらね暮らすな。邪な見解をこだくな。世俗のわやうをふややな。」

咒語 書換えなし

G044 奮起 (フルイタ) てよ。急けてはならぬ。道理に従つた善い行ないを実行せよ。道理に従つて行なう人は、この世でも、あの世でも、穏やかに過(ゆ)ぎす。

元詩 奮起 (フルイタ) てよ。急けてはならぬ。善い行いのことわりを実行せよ。ことわりに従つて行なう人は、この世でも、あの世でも、安樂に臥す。

一次 奮起 (フルイタ) てよ。急けてはならぬ。道理に従つた善い行ないを実行せよ。道理に従つて行なう人は、この世でも、安樂に臥す。

G045 道理に従つた善い行ないを実行せよ。道理に従わない悪い行ないを実行するな。道理に従つて行なう人は、この世でも、あの世でも、穏やかに過(ゆ)ぎす。

元詩 善い行ないことわりを実行せよ。悪い行ないことわりを実行するな。ことわりに従つて行なう人は、この世でも、あの世でも、安樂に臥す。

一次 道理に従つた善い行ないを実行せよ。道理に従わない悪い行ないを実行するな。道理に従つて行なう人は、この世でも、あの世でも、安樂に臥す。

(口メンソール)

「いふわり (理)」を「道理」と置き換えます。当方は「道理=理=眞理 (法)」は同義だと考えて います。

「安樂に臥す」を「穏やかに過(ゆ)ぎす」へ置き換えます。
日本語を整えます。

詰浦卯 G046 (F048, C, O170, OS13) , G047 (F049, B, O171, OS13) [[@ GS 5 卍のヰ]]

G046 世の中の実相と泡沫 (わったがた) を見よ。泡沫はかげらうのゝゝゝ見よ。世の中をいのようく観ずる人は、死王もかれを見ぬいじがな。

咒語 世の中は泡沫のゝゝゝゝ見よ。世の中はかげらうのゝゝゝゝ見よ。世の中をいのようく観ずる人は、死王もかれを見ることがない。

一次 世の中の実相と泡沫を見よ。泡沫はかげらうのゝゝゝゝ見よ。世の中をいのようく観ずる人は、死王もかれを見ることがない。

G047 ゃあ、この世の中を見よ。王者の車のように美麗である。愚者はそゝに耽溺 (たんでき) するが、賢い人はそれを妄執しない。

元詩 やあ、この世の中を見よ。王者の車のように美麗である。愚者はそゝに耽溺 (たんでき) するが、心ある人はそれを執着しない。

一次 さあ、この世の中を見よ。王者の車のように美麗な部分が目立つ。愚かな人はそゝに耽溺 (たんでき) するが、賢い人はそれに執着しない。
(口メンソール)

詩 G046 : 泡沫=色です。「付録7 空と色 (2) 空相色」を参照してください。

詩 G047 : 「愚者」は「愚かな人」と書き直しあつよう。愚かな人との対応ですから、「心ある人」=「賢い人」となります。「執着しな」→「妄執しな」へします。妄執は付録5 (2) 参照。

詰浦卯 G048 (F050, A, O172, OS13) , G049 (F051, A, O173, OS13) [[@ GS 5 世の中]]

G048 以前は怠りなまけていた人でも、のちに怠りなまけることが無いなら、その人はこの世の中を照らす。— あたかも、雲を離れた月のようだ。

咒語 また以前は怠りなまけていた人でも、のちに怠りなまけることが無いなら、その人はこの世の中を照らす。— あたかも、雲を離れた月のようだ。

G049 以前には悪い行ないをした人でも、のちに善によつてぐなうならば、その人はこの世の中を照らす。— あたかも、雲を離れた月のようだ。

かっていて、それを否定する根拠は、当方にはありません。やがて、サーリピッタ尊者の存在が捉えられないができた今となつては、とてもではありませんが、この詩を書き換えることはできません。

従つて、ブログとは意見を変えて、詩も書き換えました。人類にとって仏道が一番有益だという事実を反映したいと思いましたので、詩中には仏道という言葉を付け足しました。

「もろもろの真理のうちでは、[四つの句]（＝四諦）がもつともすぐれている」では、四諦という概念が、あまたある仏道の真理の頂點にあるということを宣言するための詩です。その他の真理は、「真理のことば」内でたくさん語られますが、それら全ては、この四諦という真理の枝葉だと捉えたいのです。

「もろもろの徳のうちでは、[情欲を離れること]が最もすぐれている」ですが、一次詩では「情欲」→「執着」としましたが、付録5の考察を進めた結果「情欲」に戻しました。

徳とは、神（十）様の目と心を持って行くべきなのです。何か見返りを期待するための善行とかでは、一応、徳を積んだと言われても、大した徳にはならないんじゃないのです。

詩 G058：如来という言葉を修行完 成者としています。如来を使うと、宗教的になつてしまふので、修行完 成者とは、ブッダ・真人だと考えて います。

詰番印 G059 (F061, C, O277～O279, OS20) [[@ GS 6 世]]

G059

「いの世のほとんどが色（我）により形成されて いる。

いれらは 全て 無常で（諸行無常）、苦しみの素（もと）へと変化する（一切皆苦）。

しかし、法（真理）は、決して 色や我を含む」とは ない（諸法非我）。

べ明らかな知慧をもつてこの世を観るときには、人は苦しみから遠ざかり放（はな）れる。

元詩 O277：「一切の形成されたものは無常である。」（諸行無常）と明らかな知慧をもつて観るときに、人は苦しみから遠ざかり離れる。

O278：「一切の形成されたものは苦しみである。」（一切皆苦）と明らかな知慧をもつて観るときに、人は苦しみから遠ざかり離れる。

いれこそ人が清らかになる道である。

O279：「一切の事物は我ならぬものである。」（諸法非我）と明らかな知慧をもつて観るときに、人は苦しみから遠ざかり離れる。

いれこそ人が清らかになる道である。

一次 「一切の形成されたものは無常である」（諸行無常）

詩番印

G052 (F054, B, O176, OS13) ～ G053 (F055, B, O177, OS13) [[@ GS 5 世]]

G052

「唯一無二」の真理を逸脱し、偽りを語り、涅槃（悟りによる解脱）の世界を無視している人は、どんな悪でもなす。

元詩 唯一なることわりを逸脱し、偽りを語り、彼岸の世界を無視している人は、どんな悪でもなきものは無い。

一次 唯一無二の真理を逸脱し、偽りを語り、安らぎの世界を無視している人は、どんな悪でもなす。

G053 愚かな人々は分かちあうことをたたえない。しかし賢い人々は分かちあうことを喜ぶ。

元詩 物惜しみする人々は天の神々の世界におもむかない。愚かな人々は分かちあうことをたたえない。しかし心ある人は分かちあうことを喜んで、そのゆえに来世には幸せとなる。

（口メノト）
G052：彼岸の世界＝涅槃（悟りによる解脱）とします。二重否定を普通の文章にします。

G053：「心ある人」は「賢い人」と書き直します。仏道は、天の神々の世界に赴くための教えではなく、ブッダ・真人になるための教えなので、このくだりは、削除します。同様に、仏教のいう来世とは、死後の世界のことですが、個人の死後の世界を良くするための教えは仏道ではありません。その時その時で、必要な行動を取り、喜びの中で生きる」とが、わたしたち人間にとつて大切なのです。

詰番印 G054 (F056, C, O178, OS13) [[@ GS 5 世]]

G054

大地の唯一の支配者となるよつむ、全世界の主権者となるよつむ、真人となるほうがすぐれて いる。

元詩 大地の唯一の支配者となるよりも、天に至るよりも、全世界の主権者となるよりも、聖者の第一階梯（かいてい）（預流果）のほうがすぐれている。

（コメント）

聖者の第一階梯に関しては、本質を突くような解説がありませんでした。仏道は普通の人間がブツダ・真人になることを奨励しているま

すが、み仏（ブツダ）のほうが真人より靈格が高いので、まずは真人になることが、私たち普通の人間の目標です。従つて、「真人となるほうが」と書き換えます。

「天に至る」とは G050' 051 詩で述べましたが、あくまでも暗喩なのでケースバイケースです。あまり必要なさそうなので、詩から削除します。

GS 6 節 道

本節は15詩から成ります。

詩番号 G055 (F057, A, O273, OS20)' G056 (F058, A, O274, OS20)' G057 (F059, B, O275, OS20)' G058 (F060, A, O276, OS20) [[@ GS 6 道]]

G055

人の道のうちでは、仏道の八正道が最もすぐれている。

もろもろの真理のうちでは、四諦（苦・集・滅・道）が最上である。

もろもろの徳の中では、情欲から離れることが最もすぐれている。

人々のうちでは、ブツダ（＝眼ある人）が最もすぐれている。

もろもろの道のうちでは、【八つの部分よりなる正しい道】が最もすぐれている。

もろもろの真理のうちでは、【四つの句】（＝四諦）が最もすぐれている。

もろもろの徳のうちでは、【情欲を離れること】が最もすぐれている。

人々のうちで【眼ある人】（＝ブツダ）が最もすぐれている。

人の道のうちでは、仏道の八正道が最もすぐれている。

もろもろの真理のうちでは、四諦（苦・集・滅・道）が最上である。

一次

もろもろの徳の中では、執着から離れることが最もすぐれている。
人々のうちでは、ブツダ（＝眼ある人）が最もすぐれている。
G056 これこそ道である。（真理を）見るはたらきを清めるためには、この他に道は無い。汝らはこの道を実践せよ。これこそ悪魔を迷わして（打ちひしぐ）ものである。

元詩 書換えなし

G057 汝らがこの道を行くなれば、苦しみをなくすことができるであろう。（棘が肉に刺さったので）矢を抜いて癒す方法を知つて、わたくしは汝らにこの道を説いたのだ。

元詩 書換えなし

G058 もろもろの修行完成者は（ただ）教え（この道）を説くだけである。汝らはこの道をひたすら努めよ。心を整えこの道を歩む者は、心治まり悪魔の束縛から脱れるであろう。

元詩 汝らは（みずから）つとめよ。もろもろの如来（＝修行を完成した人）は（ただ）教えを説くだけである。心をおさめて、この道を歩む者どもは、悪魔の束縛から脱れるであろう。 [[@ GS 6 道]]

一次 汝らは自ら努めよ。もろもろの修行完成者は（ただ）教えを説くだけである。心をおさめて、この道を歩む者は、悪魔の束縛から脱れるであろう。

（コメント）

いの4つの詩で一つのパッケージだと考えています。

GS 4 章 老いることの導入で記したのと同様に、お釈迦様のお口から出たお言葉でしょうが、別の高次の存在からのメッセージでしょう。どうしてそう考えるかというと、これらの詩で、使われる二人称が「汝」だからです。お釈迦様の教えでは、この二人称はあまり使われません。「汝」とは同等ではない下の人たちに使う二人称だそうです。ここで、メッセージの送り主は、人間たちが、ご自分より下であることをはっきりと宣言なさっているわけです。

高次元からのメッセージは改ざんが難しいのか、あまり悪魔の手が入っていないことが多いのです。

詩 G055：人類にとって仏道が一番有益だという事実を受け入れた上で、仏道＝「八正道」or「悟りのよすが」or「五根」か？といふ問い合わせが「八正道」であるというのがこの詩句の内容です。

八正道は、サーリップツタ尊者が語った教えだという認識があります（違っていたらすみません）。」」で、「付録3 仏道」を参考にしてください。

当方がブログを記した当時は、悟りのよすがの教えが良いと思っていました。しかし、この詩では、八正道が最も優れていると宣言な

GS 7 節 千と二つ数にちなん

「己」は正守護神様、副守護神様が主で、本守護神様は少し別格だと考えています。霊界物語では「正守護神様を直日（なおり）」、「本守護神様を大直日」と表現していると考えています。また、自己主張が強い性質を有するのは副守護神様ですから、聖典では「自己」というのは副守護神様を、「己」は正守護神様を指していることが多いと思われます。ただし、度重なる訳出で、己の辺りがあいまいになっているので、各詩の内容から、適切なものを見抜きました。

「自己の修養」とは「愚かな自己を修め養う」ということなので、良い方へ導くという意味が含まれています。己のように、正しい聖典は、相手をやつづけるのではなく、正しい方向へ導くことがモットーのようです。

全般にひらがな表記が多いのですが、漢字に変えて読みやすくしました。本節は13詩から成ります。

諸番印 G070 (F072, A, O100, OS8) ′ **G071** (F073, A, O101, OS8) ′ **G072** (F074, A, O102, OS8) [@ GS 7 千といふ二つ数にちなん]

G070 無益な語句を千たび語るよりむ、聞いて心の静まる有益な語句を一つ聞く方が優れている。

元詩 書換えなし

己語 書換えなし

元詩 書換えなし

己語 書換えなし

詩番印 G073 (F075, C, O103～O105, OS8) [@ GS 7 千といふ二つ数にちなん]

G073 常につつしみ、心を整え、心が治ることは、愚かな自己にうち克つ事である。

愚かな自己に克つた者の勝利を敗北に転ずる事は、神も、ガンドルヴァ(天の伎楽神)も、悪魔も、梵天もなす事ができない。唯一愚かな自己に克つ者は最上の勝利者となる。

「一切の形成されたものは苦しみである」(一切皆苦)
 「一切の事物は我ならざるものである」(諸法非我)
 と明らかな智慧をもつての世の全てを観るときに、人は苦しみから遠れたり離れる。己の人が清らかになる道である。

(口メンヘン)
 付録7 (4) 参照

詰袖印 G060 (F062, A, O280, OS20) ′ **G061** (F063, A, O281, OS20) ′ **G062** (F064, A, O282, OS20) [@ GS 6 道]

G060 起きるべき時に起きないで、若くて力があるのに怠りなまけてして、意志も思考も薄弱で、怠惰で物憂い人は、明らかに智慧によつて道を見出すことがない。

元詩 書換えなし

己語 書換えなし

元詩 書換えなし

己語 書換えなし

元詩 書換えなし

G061 言葉を慎しみ、意を落ち着けて慎しみ、身に惡を為してはならない。己の三つの行ないの路を淨くたもつならば、みづの説きたもうた道を克ち得るであろう。

一次 言葉を慎しみ、心を落ち着けて慎しみ、身に惡を為してはならない。己の三つの行ないの路を淨くたもつならば、己の三つの行ないの路を淨くたもつならば、仙人(=仏)の説きたもうた道を克ち得るであろう。

G062 実に心が統一されたならば、豊かな知慧が生じる。心が統一されないならば、豊かな知慧が生じるよう心を整えよ。己の二つの道を知つて、豊かな知慧が生じるよう心を整えよ。

元詩 書換えなし

一次 実に心が統一されたならば、豊かな知慧が生じる。心が統一されないならば、豊かな知慧がほろびる。生じる己の二つの道を知つて、豊かな知慧が生じるよう心を整えよ。

(口メンヘン)

G060 : 賢い人に對しての教え

G061 : 賢い人に對しての教え。仙人をブッダと書き換えたよ。己の二つの道を知つて、豊かな知慧が生じるよう心を整えよ。

G062：賢い人でも眞人に近い人より靈格が上の人に対しての教え。

詩番叩 **G063** (F065, A, O283, OS20) ‘ **G064** (F066, C, O284, OS20)’ **G065** (F067, B, O285, OS20) [[@ GS 6 道]]

G063 一つの樹を伐るのではなくて、(煩惱の)林を伐れ。危険は林から生じる。(煩惱の)林とその下生えとを切つて、林から脱れた者となれ。修行僧らよ。

元詩 一つの樹を伐るのではなくて、(煩惱の)林を伐れ。危険は林から生じる。(煩惱の)林とその下生えとを切つて、林から脱れた者となれ。修行僧らよ。

G064 たとい僅かであろうとも、男女の淫らな欲望が断たれないあいだは、その人の心は束縛されている。——乳を吸う子牛が母牛を恋い慕ったといふ。たゞ、男の女に対する欲望が断たれないあいだは、その男の心は束縛されている。

元詩 たとい僅かであろうとも、男の女に対する欲望が断たれないあいだは、その男の心は束縛されている。——乳を吸う子牛が母牛を恋い慕ったといふ。

G065 心と意の妄執を断ち切れ、一池の水の上に出て来た秋の蓮を手で断ち切るように。静かなやすらぎに至る道を選び進め。めでたく行きし人であるブッダは安らぎへの道を説きたもつた。

元詩 自己の愛執を断ち切れ、一池の水の上に出て来た秋の蓮を手で断ち切るように。静かなやすらぎに至る道を養え。めでたく行きし人(=仏)は安らぎを説きたもつた。

一次 自己の執着を断ち切れ、一池の水の上に出て来た秋の蓮を手で断ち切るように。静かなやすらぎに至る道を選び進め。めでたく行きし人であるブッダは安らぎへの道を説きたもつた。

(口メンヘン)

G064：欲望 자체は、不足を感じて欲しがるゝいう意味ですから、良くも悪くもないヨーメラルな意味合いで捉えます。しかし、異性間の淫らな欲望は禁じられるべきです。この詩は男性の女性に対する性的な欲求を書いていますが、男女両方に注意を喚起すべきだと思ひますので、詩を書き換えました。

「乳を吸う子牛が母牛を恋い慕うように」という文は、子どもが母親を慕う当然の事をあらわしていますが、それを男女間の想いと重ねています。これが妥当だとは考えにくいので、削除します。

G065：ハスが生い茂るのは、夏です。秋は、すでにハスはなくなつて寂しくなつてゐるのですが、そこに、突如として、むくむくと生えてくる時期外れのハスのことを言つています。これはなくなつたと思つて安心していると、出てくる煩惱のことです。「愛執」という言葉を、「執着」と書き直しましたが、「執着」の中でも性質の悪い妄執（道理を踏み外した執着）を最終的に使用しました。

み仏は教えを説くだけであらう」とは、涅槃（悟りによる解脱）へ至る道（方法）を説いたのでそれに従つて書き換えます。

詩番叩 **G066** (F068, A, O286, OS20) ‘ **G067** (F069, A, O287, OS20)’ **G068** (F070, A, O288, OS20)’ **G069** (F071, A, O289, OS20) [[@ GS 6 道]]

G066 「わたしは雨期にはいに住もう。冬と夏にはいに住もう」と愚者はいのようじくよん慮つて、死が迫つて来るのに気がつかない。

元詩 書換えなし

G067 子どもや家畜のことに気を奪われて心がそれに執著している人を、死はさらつて行く。——眠つてゐる村を大洪水が押し流すように。

元詩 書換えなし

G068 子も救う」とができない。父も親戚もまた救う」とができない。死に捉えられた者を、親族も救い得る能力がない。

元詩 書換えなし

G069 賢い人はこの道理を知つて、教えをまもり心を清め、涅槃（悟りによる解脱）に至る仏道をすみやかに進め。

元詩 心ある人はこの道理を知つて、戒律をまもり、すみやかにニルヴァーナに至る道を清くせよ。

一次 賢い人はこの道理を知つて、教えをまもり自らを清め、涅槃（悟りによる解脱）に至る仏道をすみやかに進め。

(口メンヘン)

G066～G068 な

G069：「戒律」を「教え」に書き換えます。

「ニルヴァーナ」は「涅槃（悟りによる解脱）」と表記しましよう。

「心ある人」は、「賢い人」とします。

道を清めるのではなく、もともと清い道（仏道）を、吾心を清めて歩みなよ」ということです。

元詩 最上の真理を見ないで百年生きるよりも、最上の真理を見て一日生きる方が優れている。

(コメンント)

「見る」を「見極める」とします。

G080.. 「物事が興りまた消え失せることわり」とは「物事が興り消え失せる因果」とします。

G081.. 不死については、中村氏は注釈で非常に困惑しています。中村氏は、学者などで伝統を重んじて眞面目に訳出でらしやいます。が、宗教的に魂の不死が言えても、学問的に簡単に書けないのでしょう。しかし、お釈迦様は、靈と魂は死がないという、断固とした原理原則（不死）にお立ちですから、どの靈も魂もよほどのことがない限り、不死なのです。

今生限りの命では、悪いことした者勝ちという理屈に流されやすいのが人間だと、常日頃から感じています。私は靈と魂の不死が宗教的であるとしても、これを前提にした行動規範によって、悪魔の甘言から人間が自衛できる力が育まれると思っています。本詩では「不死の境地」の主語を「心」と記述しました。

G082.. 仏道の中で最も優れている真理とは、四諦であると、GS 6 道 G055 詩で述べられているので、「最上の真理」を「四諦の真理」と置き換えます。

GS 8 節 花にちなんんで

覚醒者と修行者については、世間一般では、ほぼ同等な扱いがなされています。しかし、覚醒者になるために修行している人が修行者と考える方が自然なので、この考え方で、本書は進めます。

覚醒者とは、お釈迦様のおっしゃる「目覚めた人」、「真人」、「ブツダ」という言葉で表されていると思いますので、本書ではそのように使います。

正しい真理を知つて、四魂が心を整えて、守護神様の力を借りて正しく心を鎮め、護り、制す（治め）れば、心が浄まります（GS 1 心詩 G003、004 で記述）。それと同時に、努力して、行いを心に伴わせます。このステップを繰り返す（これが修行）ことにより、その人の行動規範が、「怠らずに励む」→「努め励む」→「学び努める」へとステップアップしていきます（詩 G083、084 のコメント参照）。これにより、自然と善惡の計らいがなくなり始め、何も恐れることができます。この境地の究極にたどり着いた人が、ブツダ・真人なのだと考えています。

この章の「花」は、真理（真利、善的）のこともあるし、六欲の対象の場合（悪的）もあります（付録 5 心の汚れ(2) 参照）。「美」を1つ取つても、光からのものか、または、闇からのものか、なかなか見分けがつかない時もあります。この節では、この対象的なものを花と喻えています。本節は14詩から成ります。

元詩 O103.. 戰場において百万人に勝つよりも、唯だ一つの自己に克つ者こそ、じつに最上の勝利者である。

O104+O105.. 自己にうち克つ事は、他の人々に勝つ事よりも優れている。つねに行ないをつしみ、自己をととのえている人、――の

ような人の克ち得た勝利を敗北に転ずる事は、神も、ガンダルヴァ（天の伎楽神）も、悪魔も、梵天もなす事ができない。

一次 常に行ないをつしみ、自己を整え、心を治める事は、自己にうち克つ事である。

自己に克つた者の勝利を敗北に転ずる事は、神も、ガンダルヴァ（天の伎楽神）も、悪魔も、梵天もなす事ができない。唯だ一つの自己に

克つ者は勝利者となる。

この勝利者が、あまたの賤（いや）しい愚かな人々に打ち勝てば、その人は最上の勝利者となる。

(コメンント)

自己は副守護神様であるので、「愚かな自己」と書き換えました。

慎みは、身、口、意が対象ですから、その全てについて常に気をつけて慎みましょうという意味にしました。

自己にうち克つ事は、他の人々に武力で勝つ事とは別の事象です。しかし、元詩にはこの点について書いてないので、一次変更でいたずらに書き足した部分は削除します。

ちなみに、他の人々に勝つ戦いの場合を考えましょう。正しい教えでは、武力ではなく相手に間違った思考回路を改めさせることが戦いだと位置付けています。武力で戦うのは、悪い旗印の戦い方法であって、正しい旗印のもとの戦いとは異なるようです。

この3個の詩は一つの詩に書き換えます。

詩番号 GS074 (F076, C, O106+O107, OS8) , GS075 (F077, B, O108, OS8) || @ GS 7 千という数にちなんんで】

G074 百年の間、月々千回ずつ祭祀（まつり）を営む人や、林の中で祭祀（まつり）の火につかえる人々がいる。もし、それらの人々

たゞ、百年祭祀を営むだけよりも優れている。心が治まり愚かな自己を修養した人（ブツダや真人）を尊び供養するなら、たとえその供養がつかの間であっても、ただ、百年祭祀を営むだけよりも優れている。

元詩 O106.. 百年のあいだ、月々千回ずつ祭祀（まつり）を営む人がいて、またその人が自己を修養した人を一瞬間でも供養するならば、その供養する事の方が、百年祭祀を営むよりも優れている。

元詩 O107.. 百年のあいだ、林の中で祭祀（まつり）の火につかえる人がいて、またその人が自己を修養した人を一瞬間でも供養するならば、その供養する事の方が、百年祭祀を営むよりも優れている。

一次 百年の間、月々千回ずつ祭祀（まつり）を営む人や、林の中で祭祀（まつり）の火につかえる人々がいる。もし、それらの人々が自己を修養した人（ブツダや真人）を尊び供養するなら、たとえその供養がつかの間であっても、ただ、百年祭祀を営むだけよりも優れている。

自己を修養した人を尊び供養するいとは優れている。

G075 功徳を得るために、人がこの世で、一年間、神をまつり、犠牲（いけにえ）をささげ、あるいは火にささげ物をする。しかし、その全てをあわせて、ただ、行ないの正しい人々を尊ぶ真正なる祭りの方が、はるかに優れている。

元詩 功徳を得ようとして、ひとがいの世で一年間神をまつり犠牲（いけにえ）をささげ、あるいは火にささげ物をしても、その全部をあわせても、（真正なる祭りの功徳の）四分の一にも及ばない。行ないの正しい人々を尊ぶ事の方が優れている。

（口メンヘラ）

G074：「尊ぶ」より「供養する、お布施をする。」のほうが下位であるという構造を明確に表現出来る詩に書き換えます。【白】を修養した人」は愚かな部分の自分ですから、「心が治まり愚かな自己を修養した人（ブッダや真人）」と置換えます。

二つを一つの詩に合体します。

G075：中村氏の注釈によれば、「真正なる祭り」とは、行ないの正しい人々を尊ぶ事だそうです。仏道では、功徳を得るためのお祭りを良しとせず、この真正な祭りを行うよう人間に教えています。日本のお祭りの対象は神様なので、仏道とは若干異なります。両方に共通して言えることは、お祭りとは、尊ぶべき存在（神様、仏様、お釈迦様、キリスト様、その他人間）に対して、感謝だけではなく、敬愛の意を表す儀式だったんですね。

詠番町 G076 (F078, C, O109, OS8) [[@ GS 7 千という数にちなんべんで]]

G076 人が、心が治まり愚かな自己を修養した人（ブッダや真人）に常に敬礼を守れば、魂の寿命と美しさと楽しみと力が増大する。

元詩 つねに敬礼を守り、年長者を敬う人には、四種の事がらが増大する。—すなわち、寿命と美しさと楽しみと力とである。

一次 人が、常に、自己を修養した人（ブッダや真人）に敬礼を守れば、魂の寿命と美しさと楽しみと力が増大する。

（口メンヘラ）

龜の甲より年の功というところもありますが、年齢が行けば悪知恵も付きます。ただ、日本では、年長者は伝統的に敬われていたと思いますし、昔は、年齢と人徳のあつさにもそれなりに相関があったと思います。しかし、お釈迦様は、年長者かどうかは、人の判断の材料にはなきつていません。人の分類とその判断基準等は、「第3節 さまでまな人」に示されます。

お釈迦様は、心が治まり愚かな自己を修養した人（ブッダや真人）を常に敬うことと共に、いつも、相手が心が治まり愚かな自己を修養した人かどうかを判断する方法を示されています。寿命と美しさと楽しみと力の4種ですが、光と闇が拮抗するこの世では、神様から与えられたものかもしれないですし、悪魔からのもの

のかもしれません。この4種は、この世の私たちが得るものと云ふより、私たちの靈と魂が得る事ができるものでしょ。

詩番町 G077 (F079, A, O110, OS8) ‘ **G078** (F080, A, O111, OS8)’ **G079** (F081, A, O112, OS8) [[@ GS 7 千という数にちなんべんで]]

G077 素行が悪く、心が乱れていて百年生きるよりは、徳行あり思い静かな人が一日生きる方が優れている。

元詩 書換えなし

G078 愚かに迷い、心の乱れている人が百年生きるよりは、知慧あり思い静かな人が一日生きる方が優れている。

元詩 書換えなし

G079 怨りなまけて、気力もなく百年生きるよりは、堅固につとめ励んで一日生まる方が優れている。

元詩 書換えなし

（口メンヘラ）

なし

詠番町 G080 (F082, B, O113, OS8)’ **G081** (F083, C, O114, OS8)’ **G082** (F084, C, O115, OS8) [[@ GS 7 千という数にちなんべんで]]

G080 物事が興り消え失せる因果を見極めずに百年生きるよりも、因果を見極めて一日生きる方が優れている。

元詩 物事が興りまた消え失せることわりを見ないで百年生きるよりも、物事が興りまた消え失せることわりを見て一日生きる事が優れてくる。

G081 心が不死であるのを見極めずに百年生きるよりも、これを見極めて一日生きる方が優れている。

元詩 不死の境地を見ないで百年生きるよりも、不死の境地を見て一日生きる事が優れている。

一次 魂の不死を見極めずに百年生きるよりも、これを見極めて一日生きる方が優れている。

G082 四諦の真理を見極めずに百年生きるよりも、これを見極めて一日生きる方が優れている。

詩番号 G088 (F0900, C, O050, OS4) [[@ GS 8 花にちなんで]]

G088 他人のした事としなかった事を見極めて、他人の過ちから学び、良い行ないを実行せよ。
自分のした事としなかった事を省み、愚かな自己の過失はすみやかに改めよ。

元詩 他人の過失を見るなれ。他人のしたいとしなかったことを見るな。

ただ自分のしたいとしなかったことだけを見よ。

一次 他人のした事としなかった事を鑑みて、他人の過失から学び、良い行ないを実行せよ。

自分のした事としなかった事を省み、自己の過失はすみやかに改めよ。

(コメント)

他人は、先生ですから、良く觀察し学ぶべきです。ですから、根本的に、真逆の教えで、悪魔の教えと判断しました。そこで、常識的に書き換えました。

詩番号 G089 (F091, A, O051, OS4) 、 G090 (F092, A, O052, OS4) [[@ GS 8 花にちなんで]]

G089 「へぬわこく」、あややかに咲く花でも、香りの無いものがあるようじ、善く説かれたことばでも、それを実行しない人には、実りがない。

元詩 書換えなし

(コメント)
真理のことばを生かすも殺すも、個々の人間の実行次第といふことです。

詩番号 G091 (F093, A, O053, OS4) [[@ GS 8 花にちなんで]]

G091 「へず高い花を集めて多くの華鬘（はなかせり）をつくるように、人として生まれまた死ぬべきであるならば、多くの善い
ゝゝゝ」をなせ。

元詩 うるわしく、あややかに咲く花で、しかも香りのあるものがあるように、善く説かれたことばも、それを実行する人には、実りがある。

元詩 書換えなし

(コメント)
真理のことばを摘み集めるのはだれであろうか?

詩番号 G083 (F085, B, O044, OS4) 、 G084 (F086, B, O045, OS4) [[@ GS 8 花にちなんで]]

G083 だれ（どの魂）がこの大地（心）を正しく治めるであろうか?
だれが閻魔の世界と神々とともになるの世界とを正しく治めるであろうか?
わざに巧みな人が花を摘むように、善く説かれた真理のことばを摘み集めるのはだれであろうか?

元詩 だれがこの大地を征服するであろうか?
だれが閻魔の世界と神々とともになるの世界とを征服するであろうか?
わざに巧みな人が花を摘むように、善く説かれた真理のことばを摘み集めるのはだれであろうか?

詩番号 G084 (F085, B, O044, OS4) 、 G085 (F086, B, O045, OS4) [[@ GS 8 花にちなんで]]

G084 学び努力の人こそ、この大地（心）を正しく整え、閻魔の世界と神々とともになるこの世界とを正しく治めるであろう。
わざに巧みな人が花を摘むように、学びつとめる人々こそ善く説かれた真理のことばを摘み集めるであろう。

元詩 学びにつとめる人々、この大地を征服し、閻魔の世界と神々とともになるこの世界とを征服するであろう。

一次 学び努力の人こそ、この大地（心）を正しく治め、閻魔の世界と神々とともになるこの世界とを正しく治めるであろう。
わざに巧みな人が花を摘むように、学びつとめる人々こそ善く説かれた真理のことばを摘み集めるであろう。

(コメント)
詩 G083 での問い合わせに対する答えが詩 G084 です。

「学びにつとめる」は「学び努力する」と表記します。
中村氏の注釈では、「大地」とは「自己」という見解もあると紹介されています。しかし、私は自己は愚かな部分で副守護神様を指すと考えていますので、「治められる」（征服される）のは心、そしてその統治者は正守護神様と本守護神様であるべきという考えに立っています。よって「大地」とは「心」であるとしました。「征服する」というのは、「治める」よりは、だいぶ強い表現で、私は征服という強い語気は好みませんので、「征服する」を「正しく治める」と書き換えます。

「閻魔の世界と神々とともになるこの世界」は、三千世界（あの世もこの世も全てミックス）の事だと思います。
三次元のこの世界は時間は超えられませんが、色々な靈格の存在が行き交う擬似の三千世界だと私は捉えています。

また、この詩は、カッコを抜いても成立しますし、カッコだけを残しても成立します。つまり、2通りの読み方ができるわけですが、カッコを抜いた場合の詩は、世界のリーダーへの教えとなります。
(番外編一) ちなみに、初めから高い目標を掲げさせて、人を壊すというのは、悪魔の常套手段です。自分の置かれた場所、やらなければならぬ事とやりたい事を区別し、冷静に見分けて分相応に対応しないと、悪魔の思う壺です。でも、これは結構難しいので、最初は、過

小評価から始めて、徐々に上げて行き、自分の位置を見つけることによって、自分の立ち位置を自分で判断するのです。ですから、時間が必要で、焦りは禁物です。対象が大人であれば、自分でやつて周囲の人たちに意見をもらったりしながら自分で考えて見極めなくてはなりませんが、対象が子供であれば、親が見極めて本人に納得させる必要があります。掲げる目標に対するこのチェックポイントは意外に重要なことです。「ここで、間違えさせられて、悪魔にやられてしまう人が多いのです。しかし、私は状況も悪いので仕方もないと思っています。最後に、今の目標が習得できてきたなら、次の目標を掲げることができます。普通に生きて生活する中で得られる経験により得られる知識や体験、技術（番外編2）学ぶという言葉は、なかなか広い意味があります。普通に生きて生活する中で得られる経験により得られる知識や体験、技術なども「学ぶ」に入れるのが主流ですが、これは、実は「習う」です。これらを習得した上で、さらに自分の意思と思考でプラスαする部分が、実は「学ぶ」と言われています。後者が学問でしょう。

普通に生きていく中で、人として正しく生きることができることは、技術の習得よりは大切で、その土台がしっかりとした人が習得したものは世の中にとって価値のあるものです。その上で「学問的学ぶ」を、この詩では求めているのだと思います。この土台がない人が、「技術の習得」や「学問的学ぶ」を行つても、闇魔の世界の住人に、てい良く使われて、悪いカルマを背負わされてしまうだけです。（番外編3）世の中のスピ系や仏教系では、「正しい」を固定的な概念で、他を排除する思想につながる言葉として忌み嫌う傾向があると思います。間違った正義が横行するので無理はありませんが、しかし「正しい」という言葉 자체を否定するのはやりすぎだと思います。真理とは唯一無二であり、一（点）に止まるという漢字の正の成り立ちを考えると、「正」の字は、真理の重要な側面を表したものではないかと思うのです。諸行無常の世の中で、揺るがない真理を探し、それに従うのが、私たち人間の務めで、その根本の「正」を否定することとは、仮魔の言いなりになりやすくなると言う危険があることを認識した方が良いと考えています。

詩番号 G085 (F087, C, O046, OS4) [[@ GS 8 花にちなんで]]

G085 死に際しこの身は泡沫（うたがた）のようだと思うであろう。だが、死ぬよりも前に実にかけろうのよくなはないものと実はそうでないものをさとれ。かけろうのよくなはないものは悪魔の花の矢と知り、これを断ち切り 悪魔に魅入られないと生きよ。

元詩 この身は泡沫のじとくであると知り、かけろうのよくなはない本性のものであると、さとったならば、悪魔の花の矢を断ち切つて、死王に見られないところへ行くであろう。

一次 この身は泡沫（うたがた）のじとくであると知り、かけろうのよくなはない本性のものであるとさとり、そして悪魔に魅入られないと、悪魔の花の矢を断ち切れ。

（コメント）

死王＝悪魔とします。

詩番号 G086 (F088, B, O047+O048, OS4) [[@ GS 8 花にちなんで]]

G086 花を摘むのに夢中になっている人を死がさらって行き、眠っている村を洪水が押し流す。

花を摘むのに夢中になっている人が、未だ望みを果たさないうちに、死神（悪魔）が彼を征服する。

元詩 O047.. 花を摘むのに夢中になっている人を、死がさらって行くように、眠っている村を、洪水が押し流して行くように。

O048.. 花を摘むのに夢中になっている人が、未だ望みを果たさないうちに、死に神が彼を征服する。

（コメント）

仏弟子への教えです。

この2つの詩の「花」は、五欲（本書では六欲）であり、「悪魔の花の矢」であり、色によりできたはかないかけろうのよくなこの世の虚像です。

詩番号 G087 (F089, A, O049, OS4) [[@ GS 8 花にちなんで]]

G087 蜜蜂は（花の）色香を害（そこなわづ）に、汁をとつて、花から飛び去る。

修行僧が村に行くときは、そのようにせよ。

元詩 蜜蜂は（花の）色香を害（そこなわづ）に、汁をとつて、花から飛び去る。

聖者が村に行くときは、そのようにせよ。

（コメント）

聖者は、ブツダ・真人（覚醒者）に当たると解釈しています。もはや覚醒者はこの教えを必要としないでしょう。ですから、聖者ではなく修行者へと記述を変更しました。この過ちは、実際に犯しやすいです。

G103 安らぎに帰した真人は、勝敗と怨みから放（はな）たれる。

元詩 勝利からは怨みが起る。敗れた人は苦しんでふす。安らぎに帰した人は安らかにふす。

(口メンソール)

削除しましたが、復活させました。「放たれる」は自発的にではなく、自然と離れていく意味に重きを置いています。

詩番印 G104 (F104, B, O202, OS15) , G105 (F106, B, O204, OS15) [[@ GS 9 楽しみ]]

G104 妾執に等しい火は存在しない。ばくちに負けんこつても、増悪に等しい不運は存在しない。

色によるかりそめの事象に等しい苦しみは存在しない。涅槃（悟りによる解脱）にまさる楽しみは存在しない。

元詩 愛欲に等しい火は存在しない。ばくちに負けるとしても、増悪に等しい不運は存在しない。

元詩 カリそめの身に等しい苦しみは存在しない。安らぎにまわる楽しみは存在しない。

一次 欲望に等しい火は存在しない。ばくちに負けるとしても、増悪に等しい不運は存在しない。

いのかりそめの身に等しい苦しみは存在しない。安らぎにまさる楽しみは存在しない。

G105 健康は最高の利得であり、満足は最上の宝であり、信頼は最高の知己であり、ニルヴァーナは最上の楽しみである。

元詩 健康は最高の利得であり、満足は最上の宝であり、信頼は最高の親族であり、ニルヴァーナは最上の楽しみである。

元詩 健康は最高の利得であり、満足は最上の宝であり、信頼は最高の知己であり、ニルヴァーナは最上の楽しみである。

元詩 健康は最高の利得であり、満足は最上の宝であり、信頼は最高の親族であり、ニルヴァーナは最上の楽しみである。

(口メンソール)

G104 : 愛欲→欲望→妾執と置き換えました（付録5（2）参照）。「かりそめの身」は、荻原雲来氏訳出の法句經では「蘿（うぶ）」となっています。「色」によりできる事物とそれに反応する自分と捉え「色によるかりそめの事象」と書き直しました。付録7（3）般若心經 10行目の注釈参照。

G106 : 「知己」を、片山一良氏の訳「親族」としました (https://76263383.at.webry.info/201004/article_6.html もん参照)。

詩番印 G106 (F107, C, O205, OS15) [[@ GS 9 楽しみ]]

元詩 書換えなし

(口メンソール)

その通りです。ちなみに、人として生まれてまた死ぬべきであるならば、最低条件は悪いことをしなさいとです。

詩番印 G092(F094, A, O054, OS4) , G093 (F095, A, O055, OS4) , G094(F096, A, O056, OS4) [[@ GS 8 花にちなんで]]

G092 花の香りは風に逆らっては進んで行かない。梅檀（せんだん）もタガラの花もジャスマインもみなやうだあ。

しかし徳のある人の香りは、風に逆らっても進んで行く。徳のある人はすべての方向に薫る。

元詩 書換えなし

G093 梅檀（センダン）、タガラ、青蓮華、ヴァンシキ——これら香りのあるものの中のうちでも、徳行の香りこそ最上である。元詩 書換えなし

G094 タガラ、梅檀（センダン）の香りは微かであって、大したことはない。しかし徳行のある人々の香りは最上であって、天の神々にもむといふ。

元詩 書換えなし

(口メンソール)
香りで嗅ぎ分けるのが大切なんですね。日月神示には、鼻と額での判断が正しこと書いてありました。私はその2つに気をつけています。

詩番印 G095 (F097, A, O057, OS4) [[@ GS 8 花にちなんで]]

G095 学び努めて、徳行を完成し、正しい智慧によつて解脱した人々には、悪魔も近づくによし無し。

元詩 德行を完成し、つとめはげんで生活し、正しい智慧によつて解脱した人々には、悪魔も近づくによし無し。

一次 慎みを完成し、学び努めて生活し、正しい智慧によつて解脱した人々には、悪魔も近づくによし無し。

(口メンソール)

「つとめはげんで」を「学び努めて」と書き換えます。

「徳行を完成」→「慎みの完成」→「徳行を完成」と書き換えを行いました。学び努めるが完成したら徳行が完成するのでしょうかから、詩

文の並び替えをしました。

詩番印 G096 (F098, B, O058+O059, OS4) [[@ GS 8 花にわなんぢ]]

G096 塵芥にも似た首（めしい）た凡夫のあいだにあって、正しくめざめた真人は智慧により輝く。

あたかも、大道に捨てられた塵芥（ちりあくた）の山堆（やまづみ）の中から香しく麗しい蓮華が生じ輝くように。

片語 O058：大道に捨てられた塵芥（ちりあくた）の山堆（やまづみ）の中から香しく麗しい蓮華が生ずるよう。

O059：塵芥にも似た首（めしい）た凡夫のあいだにあって、正しくめざめた人（ブツダ）の弟子は智慧をもつて輝く。

(口メンソール)

「正しくめざめた人（ブツダ）の弟子」は、当方の定義ですとなり領域が広いので、「正しくめざめた真人」置き換えました。

2つの対詩の関係を、構築し直し合体します。

GS 9 節 楽しみ

本節に多く出る「安らぎに帰した真人」は「涅槃（悟りによる解脱）に入った真人」でありつまりは「み仏（ブツダ）」を意味すると考えられます。「み仏」の感じる楽しみを謳つてゐる詩ではないかと思います。本節は1-3詩から成ります。

詩番印 G097 (F099, C, O197, OS15) ' G098 (F100, A, O198, OS15) ' G099 (F101, A, O199, OS15) [[@ GS 9 楽しみ]]

G097 安らぎに帰した真人は、怨みをいだいてゐる人々の間にあって怨むこと無く、我らは大いに樂しく生きよう。怨みをもつてゐる人々の間にあっても怨むこと無く暮らす。

元詩 怨みをいだいてゐる人々の間にあって怨むこと無く、我らは大いに樂しく生きよう。怨みをもつてゐる人々の間にあって怨むこと無く、我らは暮らしていゝ。

一次 怨みをいだいてゐる人々の間にあって、怨むこと無く、我らは暮らしていゝ。

G098 安らぎに帰した真人は、悩める人々のあいだにあって、悩み無く、大いに樂しく暮らす。

元詩 憎める人々のあいだにあって、悩み無く、大いに樂しく生きよう。憎める人々のあいだにあって、悩み無く暮らそう。

一次 貪つてゐる人々の間にあって、患ひ無く、貪らないで暮らそう。

（口メンソール）
第一次 憎める人々のあいだにあって、悩み無く暮らそう。
G099 安らぎに帰した真人は、貪つてゐる人々の間にあって患ひ無く貪らないで、大いに樂しく暮らす。
元詩 貪つてゐる人々の間にあって、患ひ無く、大いに樂しく生きよう。貪つてゐる人々の間にあって、貪らないで暮らそう。

一次 貪つてゐる人々の間にあって、患ひ無く、貪らないで暮らそう。

（口メンソール）
「恨み」、「悩み」、「貪り」は、すべて煩惱で、人を堕落させる種ですので、これらに囚われることを否定します。しかし、「恨み」、「悩み」、「貪り」がきっかけで、どうやってこれらからの囚われから離れ得るのか思考・実践し人間の魂が成長するのです。ですから、「これらを生む元は必ず存在するのが、この世なのです」（付録5 心の汚れ 参照）。
真人ともなれば、このように暮らしが多面的に樂になるのではないかと思われます。一連の詩は、一般人には適応できませんので、真人クラスに対応することを明示しました。

G325 詩の形式は」の3詩に似ています。

詩番印 G100 (F102, A, O219, OS16) ' G101 (F103, A, O220, OS16) [[@ GS 9 楽しみ]]

G100 久しく旅に出ていた人が遠方から無事に帰つて来たならば、親戚・友人・親友たちは彼が帰つて来たのを祝う。

元詩 書換えなし

G101 やのように善い」とをしていの世からあの世に行つた人を善業が迎え受ける。— 親族が愛する人が帰つて来たのを迎える
けぬよに。

元詩 書換えなし

(口メンソール)

OS 16 愛するものから移動。

詩番印 G102 (削除より, C, O200, OS15) ' G103 (削除より, C, O201, OS15) [[@ GS 9 楽しみ]]

G102 安らぎに帰した真人は、所有にいらわれず 喜びひとむし こひよ楽しく生きぬであらう。

元詩 われわれは一物も所有していない。楽しく生きていゝ。光り輝く神々のように、喜びを食むものとなろう。

元詩

ひとり坐し、ひとり臥し、ひとり歩み、なおぞりになることなく、わが身をとのえて、林のなかでひとり楽しめ。

一次 出家者は、林の中で、ひとり坐し、ひとり臥し、ひとり歩もうとも、なおぞりになることなく、自己を整えることを楽しめ。

(口メンソール)

G114：出家と在家で、詩が「ちや」に編成されているので並べ直します。

出家者や修行僧はこの世の利益を求めて策を弄することは一切禁止されていますが、これが正しく伝わるようになります。

また、お釈迦様は自身が旅で自分の教えを広められたのですから、決して「旅に出るな」とおっしゃるはずがないので、旅に関する記述は削除します。

G115：この文章の主語が、前の詩文（O304）との関連を見てもはつきりしません。ですが、意味合いで出家者への助言であろうと考えられますので、主語は「出家者」にします。

出家者に奨励されている修行書き出していますが、お釈迦様はこれらは意味がないと、うお立場でしたから、書き出されている修行は軽く否定して、重要な「常になおぞりになることなく、心を整える」とを楽しめ」を強調しました。

「自己」を「心」に置き換えました。「林の中で一人楽しめ」は「林の中で一人であっても楽しめ」に書き換えます。

「わが身をとのえて」→「自己を整えて」→「わが身をとのえて」と書き直しました。

修行僧、出家者は、外に出て行って、真理を在家に説くのが仕事ですから、辛いことが多い多くて、外に出なくてはならない時もあります。

詔番印 G116 (F117, A, O217, OS16)’ G117 (F118, A, O303, OS21)’ G118 (F119s, A, O304, OS21) [[@ GS 10 やまやまな いじ]]

G116 德行と見識とをそなえ、法にしたがつて生き、真実を語り、自分のなすべか」とを行なう人は、人々から愛され。

G117 信仰あり、徳行そなわり、名声と繁栄を受けている人は、いかなる地方におもむりへいわ、やいじで尊ばれる。

元詩 書換えなし

元詩 書換えなし

G118 善き人々は遠くにいても輝く、一雪を頂く高山のように。

善からぬ人々は近くにいても見えない、一夜陰に放たれた矢のように。

元詩 書換えなし

元詩 書換えなし

G106 一人になり心を落ち着けて、禅定により真理と知慧の味を知れば、恐れがなくなつていく。

元詩 孤独（ひとりじ）の味、心の安らぎの味をあじわったならば、恐れも無く、罪過も無くなる、— 真理の味をあじわいながら。

一次 心を落ち着けて孤独の味を味わい、重ねて、禅定により真理と知慧の味を味わうならば、恐れがなくなつていく。

(口メンソール)

詩の構成順番が狂わされているのでしよう。「アッダのことは」の詩182)で、「この世では正しい教え（信仰）が人間の最上の富である。徳行に篤いことは安樂をもたらす。實に真美が味の中で美味である。知慧によつて生きるのが最高の生活である」と謳われています。

禅定は、真理を理解し知慧を得るためにあります。そして、禅定を行う条件として、一人になって心を落ち着かせるという環境が必要だと私は考えます。

罪過（悪いカルマ）は、自得により清算が原則と言われていますので、禅定により罪過がなくなる部分の記述は削除します。また、真理を理解し知慧を得れば恐れがなくなるだろうというは容易に予測できますので、「恐れがなくなる」は残します。

注ですが、仏教において眞実は真理と同じことを表します。

詩番印 G107 (F108, C, O206, OS15)’ G108 (F109, A, O207, OS15) [[@ GS 9 楽しみ]]

G107 ものものアッダ・真人に会うのは善い」とある。愚かなる者どもに会わないならば、心はつねに楽しいであろう。

元詩 もろもろの聖者に会うのは善いことである。かれらと共に住むのはつねに楽しい。愚かなる者どもに会わないならば、心はつねに楽しいである。

心ある人と共に住むのは楽しい。— 親族に出会うように。

G108 愚人とともに歩む人は長い道のりにわたつて楽しいがある。愚人と共に住むのは、常に辛い」とある。— 仇敵とともに住むように。

住むように。賢い人と共に住むのは楽しい。— 親族に出会うように。

元詩 愚人とともに歩む人は長い道のりにわたつて楽しいがある。愚人と共に住むのは、つねにつらじりである。— 仇敵とともに住むように。心ある人と共に住むのは楽しい。— 親族に出会うように。

(口メンソール)

G106：聖者をアッダ・真人と書き換えます。中間部の「かれらと共に住むのはつねに楽しい。」は、この詩 자체が「会うことと会わなすこと」の対比で完結するべきだと感じましたので削除します。アッダ・真人ともなれば、普通の人々が、彼らの一存で一緒に住むことはなかなか叶わないでしょう。

G107：心ある人は賢い人と置き換えます。この詩が「賢い人と愚かな人」、「歩む（住む）と住まない」で対比が取れます。

詠诵印 G109 (F110, B, O208, OS15) [[@ GS 9 楽しみ]]

G109 ゆく氣をつけていて、明らかな知慧あり、学ぶといふ多く、忍耐ぐよく、真理を護る、そのような立派なブッダ・真人に親しむよ。

元詩 ゆく氣をつけていて、明らかに知慧あり、学ぶといふ多く、忍耐ぐよく、戒めをまもる、そのような立派な聖者・善き人、英知ある人に親しむよ。一月がもろもろの星の進む道にしたがうよへばに。

(口メンヘラ)

聖者・善き人、英知ある人を、ブッダ・真人と置き換えましょへ。

守るべき戒めは、真理を体得するために、人間のためにあるものと、私は捉えますので、真人やブッダには必要ないです。真人やブッダは真理（正しい道）を護つてくださっていると考えているので、「戒め」を「真理」、「まもる」を「護る」と書き換えます。

「月がもろもろの星の進む道にしたがうよへばに」ですが、月を観察すると、地球から一番近く、28日周期で地球を一周するだけの月はあつて、遙か彼方の星たちと運行が違うのです。もちろん、惑星の火星や金星も同じように、他の多くの遠い星たちとは運行が異なります。科学的に根拠がわからないので、この部分は削除します。

GS 10 節 やめやめやめんじ

本節は9詩かい成りがた。

詠诵印 G110 (F111, B, O290, OS21) ' G111 (F112, A, O291, OS21)' G112 (F113, A, O292, OS21)' G113 (F114, A, O293, OS21) [[@ GS 10 やめやめやめんじ]]

G110 つまらぬ快樂を捨てぬといふたゞひへ、広大なる樂しみを待ぬといふがじやねのなへ、賢い人は広大な樂しみをのぞんで、つまらぬ快樂を捨てよ。

元詩 つまらぬ快樂を捨てぬといふとよひて、広大なる樂しみを見ぬといふことができぬのなら、心ある人は広大な樂しみをのぞんで、つまらぬ快樂を捨てよ。

G111 他人を苦しめぬといふとよひて自分の快樂を求める人は、愚かな人であつて、怨みの糾にまつわれて、怨みから免れるいふがやあない。

元詩 他人を苦しめるいふによつて自分の快樂を求める人は、怨みの糾にまつわれて、怨みから免れるいふができるない。

G112 なすべくわいといふをなおやりにし、なすべからやむいとをなす、遊びたわむれ放逸なる愚かな者どもには、汚れが増す。

元詩 なすべくわいといふを、なおやりにし、なすべからやむいとをなす、遊びたわむれ放逸なる者どもには、汚れが増す。

G113 人が正しく努め、身体を慎み、為すべからやむいとを為わず、為すべくわいとを常に為して、心がんばる心の汚れがなくなる。

元詩 常に身体(の本性)を思い続けて、為すべからやむいとを為わず、為すべくわいとを常に為して、心がけて、みずから氣をつけている人々には、もろもろの汚れがなくなる。

一次 常に身体(の本性)を思い続けて、為すべからやむいとを為わず、為すべくわいとを常に為して、心がけて、自ら氣をつけている人々には、もろもろの汚れがなくなる。

(口メンヘラ)

これら一連の詩は、汚れをなくす具体的な実践方法を示す貴重な詩です。

G110 「心ある人」は「賢い人」、「見る」は「得る」に置き換えましょう。

G111 「快樂を求める人は」は「快樂を求める人は愚かな人であつて」と書き換えます。

G112 「放逸なる者ども」は「放逸なる愚かな者ども」と書き換えます。

G113 「身体(の本性)」は意味が分かりませんので、G168詩の「身体を慎む」に変更しました。当方は、身と意と口を慎むことが心を整えるいふと同義だと考えてます。

詠诵印 G114 (F115, C, O302, OS21) ' G115 (F116, B, O305, OS21) [[@ GS 10 やめやめやめんじ]]

G114 在家の生活は困難であり、家に住むのも難しい。なぜならば、心を同じくしない人々と共に住むのは難しいからである。

出家の生活も困難であり、それを楽しむことは難しい。出家者が策を弄して利益を求めるとき、苦しみに遭う。だから、出家者は、策を弄して利益を求めてはならない。

元詩 出家の生活は困難であり、それを楽しむことは難しい。在家の生活も困難であり、家に住むのも難しい。心を同じくしない人々と共に住むのも難しい。(修行僧が何かを求めて)旅に出で行くと、苦しみに遭う。だから旅に出るな。また苦しみに遭うな。

G115 修行僧は、林の中でひとり坐し臥し歩むだけの行に意味がないことを知り、常になおやりになぬいとなく心を整えるいふを楽しめ。

G126 もしも思慮深く聰明でまじめな生活をしている人を伴侶として共に歩むことができないならば、あらゆる危険困難に打ち克つて、いろいろ喜び、念いをおちつけて、ともに歩め。

元詠 書換えなし

G127 しかし、もしも思慮深く聰明でまじめな生活をしている人を伴侶として共に歩むことができないならば、國を捨てた国王のように、また林の中の象のように、ひとり歩め。

元詠 書換えなし

G128 愚かな者を道連れとするな。それなら独りで行くほうがよい。
悪いことをするな。

求めるところは少なくあれ。

—林の中にいる象のよう。

元詠 愚かな者を道連れとするな。独りで行くほうがよい。孤独（ひとり）で歩め。悪いことをするな。求めたいとは少なくあれ。—林の中にある象のよう。

詠翻訳 G129 (F130, C, O331, OS23) , G130 (F131, C, O332, OS23) [[@ GS 11 象]]

G129 (大きかべうとも、小やかべうとも)、どんな果報にも満足するのは樂しい。

善いことをしておけば、命の終るときに樂しい。(悪いことをしなかったので)、あらゆる苦しみ(の報い)を除くことは樂しい。

元詠 事がおいたときに、友だちのあるのは樂しい。(大きかべうとも、小さかべうとも)、どんなにでも満足するのは樂しい。善いことをしておけば、命の終るときに樂しい。(悪いことをしなかったので)、あらゆる苦しみ(の報い)を除くことは樂しい。

G130 世に父を敬うことは樂しい。また母を敬うことは樂しい。世に修行者を敬うことは樂しい。世にバラモンを敬うことは樂しい。世に母を敬うことは樂しい。また父を敬うことは樂しい。世に修行者を敬うことは樂しい。世にバラモンを敬うことは樂しい。

(口メハーム)

G129 : ブッダコーラによる改ざんがなされています。中村氏の注釈によると、「事がおいたときに、友だちのあるのは樂しい」がブッ

GS 11 節 象

仏教では、象は、立派な人（真人、覺醒者）、そして王様や王家などを比喩して使われることが多いですが、明確な定義はありません。しかし、力強いものの例えとして用いられており、例えられているものは主に人ですが、心の場合 (G125, G126) もあります。それらが善の場合もあり惡の場合もあるようです。

ただし、象で表現されてくるものに関しては、必ず力強さが前提にあり、それがない場合でかつ良いとは言い難いものは、豚と表現しているようです。(G123)。

また、時を経るに従って、口伝による劣化で、文章がぼやけてきているとは考えられます。極めて暗示的な詩が多く、全体としては魔の手の改ざんの少ない章だと思います。それゆえに意味が分からず、地味な印象がありますが、お釈迦様やその守護神様の説法を何となく肌で感じる章です。本節は1-3詩から成ります。

詠翻訳 G119 (F120, A, O320, OS23) , G120 (F121, B, O321, OS23) [[@ GS 11 象]]

G119 戦場の象が、射られた矢にあたっても堪え忍ぶよひ、われらは人のそしりを忍ぼう。多くの人は實に性質(たち)が悪いからである。

元詠 書換えなし

G120 心がおさまり、世のそしりを忍ぶ人は、人々の中にあっても最上の人となる。馴らされた象が、戦場にも連れて行かれ、王の乗りものとなり、最上の象となるように。

元詠 馴らされた象は、戦場にも連れて行かれ、王の乗りものとなる。世のそしりを忍び、自らをおさめた者は、人々の中にあっても最上の者となる。

一次 世のそしりを忍び、心をおさめた者は、人々の中にあっても最上の者となる。馴らされた象が、戦場にも連れて行かれ、王の乗りものとなり、最上の象となるように。

(口メハーム)

G119: な

G120 : 象と人間の対応がよくわからないので、「最上の象となる」という文章を挿入します。

「血をおさめた者」は「心がおさまった」と書き換え語句を整えます。

つかし、(いの) 覚悟をした人には、(いの世に常住する) 爭いがしづまる。

(口メメント)

塵穢れの多いいの三次元社会では、正しく覚醒した人は死がいつもとなり合わせだと感じるいとでしよう。この感覚を死の覚悟と表現しました。この世での利益を求めるないという精神を助け、余計な悪いカルマを生産するのを防ぎます。常に死を覚悟して、この世のことを対処すれば、つまらない争いに巻き込まれないか、もしくは被害最小限という教えです。カルマの精算時や試練中は争いに巻き込まれるのは仕方ないですが、主張すべき事ややるべき事は正しい手続きや言葉で行い、その結果には執着しないとなれば、無益な闘争が静まるのです。

詩韻叩 G138 (F139, A, O007, OS1) ' G139 (F140, A, O008, OS1) [[@ GS 12 るん組ゅう]]

G138 いの世のものを淨らかだと思いなつて暮らひ、「五感の」感官を抑制せず、食事の節度を知らず、怠けて勤めない者は、悪魔じゅわしがれる。

一 弱い樹木が風に倒されるように。

元詩、一次 いの世のものを淨らかだと思いなして暮らし、「五感の」感官をよく抑制せず、食事の節度を知らず、怠けて勤めない者は、悪魔にうちひしがれる。

一 弱い樹木が風に倒されるよう。

G139 いの世のものを不淨であると思ひなして暮らし、「五感の」感官をよく抑制し、食事の節度を知り、信念あり、努め励む者は、悪魔には、悪魔にうちひしがれない。

一 岩山が風にゆるがないよつこ。

元詩 (眼などの) を (五感の) と置き換えました。「五感」は、視覚聴覚触覚臭覚味覚です。付録7 (3) 三行目の注を参考にしてください。

(口メメント)

(眼などの) を (五感の) と置き換えました。「五感」は、視覚聴覚触覚臭覚味覚です。付録7 (3) 三行目の注を参考にしてください。

詩韻叩 G140 (F141, A, O011, OS1) ' G141 (F142, A, O012, OS1) [[@ GS 12 らん組ゅう]]

ダゴーサによる注釈に従つてゐるらしいのですが、詩G128 や、「愚かなものが一緒にくらいなら一人でいなさい。」という教えと反するのです。ですから、この部分は消去します。
「ふんないとやむ」 ふんう表現はあまりに乱暴なので、「ふんな果報にでも」と改めます。

G130 : ブッダゴーサによる改さんがなされて います。中村氏の注釈によると、「世にバラモンを敬うことは樂しい」の部分がブッダゴーサによる注です。しかし、中村氏は漢訳法句經で、「天下に道あるは樂し。」を紹介しています。

バラモンは、現在の仏魔支配の仏教では、その頂点に位置するとともに思えるべきです。お釈迦様は、バラモンについて「ブッダのいとば第二 小なる章7バラモンにふさわしい」とで、昔のまつどうだったバラモンについて言及なさっています。このくだりは、削除されたOS22 やおやおなん」と詩O294 ～295 の口メメントに載せてありますので参考にしてください。

詩韻叩 G131 (F132, A, O333, OS23) [[@ GS 11 象]]

G131 老いた日に至るまで慎みをたもつことは樂しい。信仰が確立していよいよは樂しい。明らかな知慧を体得することは樂しい。もちろんの悪事をなさないことは樂しい。

元詩 老いた日に至るまで戒しめをたもつことは樂しい。信仰が確立していよいよは樂しい。明らかな知慧を体得することは樂しい。もちろんの悪事をなさないことは樂しい。

(口メメント)

「戒め」ではなく、「慎み」を使います。

老いた日に至るまで慎みを保つためには、幼少期(全て親の責任)や青年、中年時代(幼少期の影響を受けつつも自分の責任が生じる)を、如何に道を大きく誤らずに進んだか? が問題です。人生の総決算が老齢期です。

若い時に変な宗教や歪んだイデオロギーを頭に叩き込まれると、老齢期にはその思考回路から離れられずに気付かないうちに周りに対して不快かつ迷惑な行動を取つてゐるのです。こんな状態で老いた時に慎みなんか守れるはずはないのです。

幼少期の親の影響は絶大ですから、ある人の人生が、周りへの毒の散乱で終わつた場合、その人の親には絶大な責任があるのは確かです。しかし、親から離れた20代で、自分から良くていいこうと決心したら救われる道もあります。これは、とても大変なことなのはわかります。今、こんなに世の中が乱れてしまつてゐるのや、このような状況でアップアップしてらっしゃる方もいると思います。でも、何かが歯を食いしばつて、正当な方法で三年頑張つてみてください。何かが必ず変わります。40歳以降、あまりに修正不可能であると、病魔に捕まつてしまふのですが、30代までは、本当に十分に大きな軌道修正ができます。

40代以降でも、年々、修正できる範囲が狭まつてはきますが、大幅な踏み外しでなければ、軌道修正はできます。とりあえず、長いけれど三年、歯を食いしばつて頑張つた後に自分の中に映る世の中を楽しみにしてみてください。きっと、最高の幸せ感はないでしょうが、

物事の見え方の変化に驚くことによれば。

GS 12 らむ縛り

本節は1-4詩から成ります。

詩題印 G132 (F133, A, O001, OS1) ' G133 (F134, A, O002, OS1) [[@ GS 12 らむ縛り]]

G132 ものの心にもとづき、心を主とし、心によつて作り出され。やしも清らかな心で話したり行なつたりするなれば、苦しみはその人に付き従へ。

— 車をひく（牛）の足跡に車輪がついていくよへに

元詩 書換えなし

G133 ものの心にもとづき、心を主とし、心によつて作り出され。やしも清らかな心で話したり行なつたりするなれば、福樂はその人に付き従う。

— 影がそのからだかの離れないよへに。

元詩 書換えなし

（口ヌハム）

いねやむ組、対。

詩題印 G134 (F135, A, O003, OS1) ' G135 (F136, A, O004, OS1) [[@ GS 12 らむ縛り]]

G134 「彼はわれを罵った。彼はわれを害した。彼はわれにうち勝つた。彼はわれから強奪した。」 ふじへ思ひを抱く人には、怨みはついに息（や）む」とがない。

元詩 書換えなし

G135 「彼はわれを罵つた。彼はわれを害した。彼はわれにうち勝つた。彼はわれから強奪した。」 ふじへ思ひを抱かない人にほ、ついに怨みが息（や）む。

元詩 書換えなし

（口ヌハム）

いねやむ組、対。

詩題印 G136 (F137, A, O005, OS1) [[@ GS 12 らむ縛り]]

G136 いの世におこつてば、怨みにみつて怨みに報つても、怨みが息（や）む」とがない。怨みを離れ愛をもつていて、怨みが息（や）む。いれは永遠の真理である。

元詩 実にいの世においては、怨みに報つて怨みを以てしたならば、ついに怨みの息（や）む」とがない。

怨みを捨てて、怨みを離れて、ついに怨みの息（や）む」とがない。

— 次 実にいの世においては、怨みに報つて怨みを以てしたならば、ついに怨みの息（や）む」とがない。

（口ヌハム）

「捨てて」ではなく、「離れて」にしました。立花俊道氏訳の法句經（ダンマパダ）より「此の世に於て怨は怨を以てしては終に解くべからず、愛を以てぞ解くべし、いれ永劫不易の法なり。」

荻原雲来氏訳の法句經（ダンマパダ）「世の中に怨は怨にて息むぐまやう無し。無怨にて息む、此の法易はぬ」となす。」「恨みがないいふ」を転じて「愛により」と訳した立花氏の大胆さと的確さに息を呑みました。

詩題印 G137 (F138, B, O006, OS1) [[@ GS 12 らむ縛り]]

G137 私は常に死を覚悟して、いふ。

この覚悟を普通の人々は知らない。

しかし、（いの）覚悟をした人は、（いの世に常住する）争いから放たれる。

元詩 「われらは、（いの）にあつて死ぬはずのものである」と覚悟をしよう。——のいのわきを他の人々は知つてはいない。しかし、（いの）

一次 私は常に死を覚悟している。

（いの）覚悟を普通の人々は知らない。

G148 人がもしも悪いことをしたならば、それを繰り返すな。悪事を心がけるな。悪が積み重なるのは苦しみである。

元詩 書換えなし

G149 人がもし善いことをしたならば、それを繰り返せ。善いことを心がけよ。善いことが積み重なるのは楽しみである。

元詩 書換えなし

G150 まだ悪い報いが熟さない間は、悪人でも幸運に遭うことがある。しかし悪の報いが熟したときは、悪人は災いに遭う。

元詩 書換えなし

G151 まだ善い報いが熟さない間は、善人でも災いに遭うことがある。しかし善の果報が熟したときは、善人は幸福（サイワイ）に遭う。

元詩 書換えなし

G152 「その報いは私には来ないであろう」と思つて、悪を軽んずるな。水が一滴ずつ滴り落ちるならば、水瓶でも満たされるのである。愚かな者は、水を少しづつでも集めるように悪を積むならば、やがて災いに満たされる。

元詩 書換えなし

G153 「その報いはわたしには来ないであろう」と思つて、善を軽んずるな。水が一滴ずつ滴り落ちるならば、水瓶でも満たされる。気をつけている人は、水を少しづつでも集めるように善を積むならば、やがて福德に満たされる。

元詩 書換えなし

G154 回行する仲間が少ないのに多くの財を運ばねばならぬ商人が、危険な道を避けようにも、また生きたいと願う人が毒を避けようにも、人はもうもうの悪を避けよ。

元詩 書換えなし

G155 わしも手に傷が無いならば、その人は手で毒をとり去るゝかも知るであろう。傷の無い人に、毒は及ばない。悪をなやない人には、惡の及ぶことがない。

元詩 書換えなし

G156 汚れの無い人、清くて咎のない人をそなう者がいるならば、その災いは、かえつてその浅はかな人に至る。風にさからひじぶらわれて、ついに眞実に達しない。

元詩 書換えなし

G141 もいとではないものを、もいひあると見なし、もいひであるものを、もいとではないと見なす人は、正しい思いにしたがつて、ついに眞実に達する。

元詩 書換えなし

(口メノヘ) その通りです。敬礼。
法句經（玄奘三藏さんの訳）では、「もいひ」は「眞利」になりてゐるそうです。漢訳の字は、なかなかイキで、実感しやすいです。ただ、中村氏は「もいひ」を選んだので、それに沿わせていただきおや。

元詩 書換えなし

元詩 書換えなし

元詩 書換えなし

元詩 書換えなし

詠番町 G142 (F143, C, O013, OS1) ‘**G143** (F144, C, O014, OS1) [[@ GS 12 らむ組やつ]]

G142 屋根を粗雑に葺いてある家には雨が漏れ入るように、心を修養していいならないならば、煩惱が心に侵入する。

元詩 屋根を粗雑に葺いてある家には雨が漏れ入るように、心を修養していいならないならば、煩惱が心に侵入する。

G143 屋根をよく葺いてある家には雨の漏れ入ることがないよう心をよく修養してあるならば、煩惱が侵入するといはない。

元詩 屋根をよく葺いてある家には雨の漏れ入ることがないよう心をよく修養してあるならば、煩惱の侵入する事がない。

(口メノヘ) 情欲を煩惱と書き換えます。詳しつば、「付録5 心の汚れ」を参照ついてください。

詠番町 G144 (F145, A, O019, OS1) ‘**G145** (F146, A, O020, OS1) [[@ GS 12 らむ組やつ]]

G144 たとえためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠つてゐるのである。

元詩 かれは道を実践する人にはならない。

元詩 たとえためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠つてゐるのである。

元詩 かれは修行者の部類には入らない。

G145 たとえためになふ」とを少ししか語らないにしても、

法にしたがつて正しく実践するように、
妄執と憎悪と迷妄と疑惑と慢心を離れるように、

常に気をつけている人は、心を整える人であり、道を実践する人であり、心がしゃまりおわまぬ。

元詩 たとえためになることを少ししか語らないにしても、理法にしたがつて実践し、情欲と怒りと迷妄を捨てて、正しく気をつけていて、心が解脱して、執着するとの無い人は、修行者である。

一次 たとえためになふ」とを少しあか語らないにしても、心を治めるようだ、

法にしたがつて正しく実践するように、
執着と怒りと迷妄と疑惑と慢心を離れるように、

常に気をつけている人は、道を実践する人である。

(口メハル)

G144：「修行者」を「道を実践する人」に変えました。

G145：「の2詩やひと組になるように、「道を実践する人」を軸に、詩を書き換えました。「道を実践する」の中核は「心を整える」と」だとこういとを前面に押し出しました。

第2章 やあわあな題

「OS10 節暴力」は、解散させねりんじしました。武力と暴力についての議論を付録6で行います。参考になさってください。
いれら各詩の割り振りは下記の通りです。

- O129 → 削除(B289)’ • O130 → 削除(B290)’ • O131 → 削除(B291)’ • O132 → 削除(B292)’
- O133 → GS15 節 G160 詩’ • O134 → GS15 節 G161 詩’ • O135 → GS 4 節 G034 詩’ • O136 → GS21 節 G290 詩’
- O137 → 削除’ • O140 → 削除’ • O141 → GS19 節 G252 詩’ • O142 → GS19 節 G242 詩’
- O143+O144 → GS18 節 G233 詩’
- O145 → 削除

なお、残存した詩は、編入された章で考察を行い、削除した詩は、第5部削除した詩で考察を行います。

「OS16 節 愛するもの」はもともと詩の数が12本と少なく、内容に統一感が無いので、章を解散し、の章の構成各詩は内容

によつて、他の章に振り分けします。いれら各詩の割り振りは下記の通りです。

- O209 → GS13 節 G146 詩’ • O210 → 削除’ • O211 → 削除’ • O212 ~ 216 → GS16 節 G194 詩’
 - O217 → GS10 節 G116 詩’ • O218 → GS16 節 G209 詩’ • O219 → GS 9 節 G100 詩’ • O220 → GS 9 節 G101 詩’
- なお、残存した詩は、編入された章で考察を行い、削除した詩は、第5部削除した詩で考察を行います。
- 第2章やあわあな題は、5節編成で、各節番と節名は、
- GS13 節 愛’ • GS14 節 怒り’ • GS15 節 汗れ’ • GS16 節 執着と欲望’ • GS17 節 慢心といふ

やつ。

GS13 愛 愛

書や直しが少ない章です。O16 節 愛するもの（解散章）から詩 G146 を編入しました。本節は13詩から成ります。

詔神叩 G146 (F147, A, O209, OS16) [[@ GS 13 観]]

G146 道に違(タガ)つたりになじみ、道に順(シタガ)つたりになじみやしまず、目的を捨てて快いとだけを取る人は、み
ずから道に沿つて進む者を羨むに至るであらう。

仄詩 書換えなし

(口メハル)

O 16 節 愛するもの かく移動

詔神叩 G147~G156 (F148~F157, A, O116~O125, OS 9) [[@ GS 13 観]]

G147 愛をなすのを急げ。悪から心を退けよ。善をなすのにこのやのやつたら、心は悪事をたのしむ。

仄詩 書換えなし

ならば、

G167 その人を誰が非難するのか？ かれはジャンブーナダ河から得られる黄金でつくった金貨のようなものである。神々もかれを称讃する。梵天でさえもかれを称讃する。非難するものは愚かな人ばかりである。

元詩、一次 その人を誰が非難し得るだろうか？ かれはジャンブーナダ河から得られる黄金でつくった金貨のようなものである。神々もかれを称讃する。梵天でさえもかれを称讃する。

(口メンント)

アトウラとはお釈迦様の在俗信者（仏弟子：FS22、付録4参照）です。しかし彼には500人も信者がいました。

全員揃って、レーヴィタ長老のところに行つて教えを聞こうとしましたが、この長老は一人静かに瞑想を行つていたために、何も説いてくれません。

次に彼らは、サーリップッタ長老のところに行きますが、難解なアビダルマに関する議論をやたらに聞かされただけで、彼は憤ります。

そして次に、アーナンダ長老のところに行きますが、ここではほんのちょっととの教えを説かれるだけでした。ついに祇園精舎にいらしゃるお釈迦様のところに行き着いた時の、アトウラの怒りは頂点だと想像してみることは簡単です。そして、アトウラが、怒りに任せて、3名の長老のことをお釈迦様に申し立てたのでしょう。その時に、お釈迦様がアトウラ達に説いた教えがこの4つの詩です（中村氏の注釈より）。

G164, G165：ついに上げる怒りなどの一時的な感情で、いろいろな評価・避難（・礼賛）が起るのが、この世の中だから、ただ説かれるだけの人、また、ただ褒められるだけの人なんていらないのだと教えてくださいます。だから、世の中の評価・避難・礼賛を安易に信じたり、その流れに乗つて「自らが無責任な批評を繰り返すことはおやめなさい。」とアトウラに教えています。

G166：世の中で信じて良い評価もあることを説いてらっしゃいます。それは、賢い人々や真人が時間をかけて熟考した評価だとおっしゃっています。

「誰が非難し得るであろうか？」は、G164で全ての人が非難されると宣言している以上、矛盾する文章になるので、「誰が非難するであろうか？」という意味で書き直し、文末にその答えとして「非難するものは愚かな人ばかりである。」という答えを書き足しました。お釈迦様自身は、先の3長老に対して、賞賛の気持ちがおありだという旨も、ここで暗に宣言なさつていて、アトウラ達を諫めてらっしゃいます。

以上から、この詩が、怒りの章にあるのは、怒りを抱えた人に説いた詩だからだと、私は考えています。

中村氏の注釈の内容をト書きとして、詩G163を新設し追加しました。

て細かい塵を投げると、（その人にもどつて来る）よべに。

元詩 書換えなし

(口メンント)

漢字への書換えと、言葉を現代語風に変えましたが、ほぼ、原文通りです。

詩番号 G157 (F158, A, O127, OS 9) , G158 (F159, A, O128, OS 9) [[@ GS 13 悪]]

G157 大空の中にいても、大海の中にいても、山の中の奥深いところに入つても、およそ世界のどいにしても、悪業から脱れるところのできる場所は無い。

元詩 書換えなし

G158 大空の中にいても、大海の中にいても、山の中の洞窟に入つても、およそ世界のどいにしても、死の脅威のない場所は無い。

元詩 書換えなし

GS 14 節 怒り

本節は14詩から成ります。

詩番号 G159 (F160, A, O222+O094, OS17+OS7) [[@ GS14 怒り]]

G159 御者が馬をよく馴らすように、おのが感官の高ぶりを静め、怒りの汚れをなくせ。

走る車をおさえるようにむらむらと起る怒りをおさえる人——その人をわれは【御者】とよぶ。多くの人はただ手綱を手にしているだけである。

O222：走る車をおさえるようにむらむらと起る怒りをおさえる人——かれをわれは【御者】とよぶ。他の人はただ手綱をしているだけである。（【御者】とよぶにはふさわしくない。）

O094：御者が馬をよく馴らしたように、おのが感官を静め、高ぶりをすて、汚れのなくなった——のような境地にある人を神々でさえも羨む。

一次 御者が馬をよく馴らすように、おのが感官の高ぶりを静め、汚れをなくせ。

走る車をおさえるようにむらむらと起る怒りをおさえる人——その人をわれは【御者】とよぶ。他の人はただ手綱を手にしているだけである。

(口メンソール)

間違いなく、お釈迦様のお口から出たお言葉でしょう。離れた章においてありましたが、当初はこの二詩は対で配列されていたと考えられます。

怒りは心の大汚れの憎悪を含みます。怒りを制御する」とは、人間が心を整えるための一つの重要な課題です。個々の怒りの元を、考察し、正しく認識する」とは、その人にとって大切な課題です。決して、全ての怒りを無条件で捨てる」ことが大切なではなく、それを離れて全体像を掴み制御する」とが大切だという教えです。

詠诵印 **G160** (F161, A, O133, OS10) , **G161** (F162, A, O134, OS10) [[@ GS14 怒り]]

G160 荒々しく言葉を叫うな。言われた人々は汝に言い返すであろう。怒りを含んだ言葉は苦痛である。報復が汝の身に至るであらう。

元詩 荒々しくいとばを叫うな。言われた人々は汝に言い返すであろう。怒りを含んだいとばは苦痛である。報復が汝の身に至るであらう。

G161 壊れた鐘のように、声を荒げないならば、汝は安らぎに達している。汝はもはや怒り罵ることがないからである。

元詩 壊れた鐘のように、声をあらげないならば、汝は安らぎに達している。汝はもはや怒り罵ることがないからである。

(口メンソール)

OS 10 暴力から移動。

言葉の暴力について教えている詩です。

特徴は、二人称に汝が使われています。

ひらがなを漢字に直します。

詠诵印 **G162** (F163, C, O223, OS17) [[@ GS14 怒り]]

G162 怒りを制すことによって怒りに、
善いことによって悪いことに、
わかち合うことによって物惜しみに、

真実によつて虚言の人たちに向かわなくてはならない。

元詩 怒る」とは必要ですから、その部分が整合が取れるように書き換えます。
打ち勝てるかどうかは、その時の天の運みたいなところがあり、たかが人間が勝ちにいだわると、痛い目にあうので、「打ち勝つ」を「立ち向かう」と表現を変えます。

(口メンソール)

怒る」とは必要ですから、その部分が整合が取れるように書き換えます。
打ち勝てるかどうかは、その時の天の運みたいなところがあり、たかが人間が勝ちにいだわると、痛い目にあうので、「打ち勝つ」を「立ち向かう」と表現を変えます。

詠诵印 **G163** (F164, -, 新説,-) , **G164** (F165, B, O227, OS17) , **G165** (F166, A, O228, OS17) , **F166** (F167, A, O229, OS17) , **G167** (F168, A, O230, OS17) [[@ GS14 怒り]]

G163 アトウラたちは、お釈迦様に帰依した三人の長老に教えを請い求めましたが、十分に納得出来る教えを示されませんでした。彼らは不満を抱いて、ついに、お釈迦様の元を訪ね、今までの経緯を述べて、教えを請いました。そのアトウラたちはお釈迦様は、次のように語られました。

元詩 新設ですので、対応詩はありません。

G164 アトウラよ。これは昔にも言う」とであり、しまに始まる「い」でもない。沈黙している者も非難され、多く語る者も非難され、すこしだけ語る者も非難される。世に非難されない者はいない。

元詩 書換えなし

G165 ただ誹られるだけの人、またただ褒められるだけの人は、過去にもいなかつたし、未来にもいないであろう、現在にもいない。

元詩 書換えなし

G166 もしも賢い人が口に口に考察して、「トの人は賢明であり、行いに欠点がなく、知慧と徳行とを身にそなえている。」といつて称讃するならば、

元詩 書換えなし

一次 もしも心ある人が日に日に考察して、「トの人は賢明であり、行いに欠点がなく、知慧と徳行とを身にそなえている。」といつて称讃する

生活を正しく送るよう心がければ順次なくなつていき、自分の努力が物を語ります。」それが「二二三神示の「洗濯」だと思います。

G178：「自己を覆う」から「己を覆う」としました。自己は副守護神様（魔魔的自分）、己は正守護神様（正しい自分）としました。「ぶつぶつ」については、階層的なイメージで一義的には決められないと思います。身体の拠り所は心、心の拠り所は己（正守護神様）、己の拠り所は本守護神様（神界的自分）という感じです。

詩神叩 G179 (F180, A, O244, OS18)’ **G180** (F181, A, O245, OS18)’ **G181** (F182, A, O246+O247, OS18)’ **G182** (F183, A, O248, OS18) [[@ GS 15 汚れ]]

G179 恥をこぶす、鳥のよぶに厚がおしへ、図々しへ、人を責め、大胆で、心のよぶれた者は、生活し易い。

冗詰 書換えなし

G180 恥を知り、常に清きをもとめ、執着を離れ、慎み深く、真理を見て清く暮す者は、生活し難い。

冗詰 書換えなし

G181 不当に生きものを殺し、虚言（イツワリ）を語り、世間において与えられないものを取り、他人の妻を犯す人は、この世において心（自分）の根本（口）を掘りくずす人である。

冗詰 生きものを殺し、虚言（イツワリ）を語り、世間において与えられないものを取り、他人の妻を犯し、穀酒・果実酒に耽溺する人は、この世において自分の世において自分の根本を掘りくずす人である。

一次 不当に生きものを殺し、虚言（イツワリ）を語り、世間において与えられないものを取り、他人の妻を犯す人は、この世において自分の根本を掘りくずす人である。

G182 人よ。」のように知れ、一慎みがないのは悪いことである。一貪り（妄執）と不正とのゆえに汝が永く苦しみを受けぬことのないようだ。

冗詰 人よ。」のように知れ、一慎みがないのは悪いことである。一貪りと不正とのゆえに汝が永く苦しみを受けぬことのないようだ。

一次 人よ。」のように知れ、一慎みがないのは悪いことである。一貪り（執着）と不正とのゆえに汝が永く苦しみを受けぬことのないようだ。

(口メノム)

G181：全くの不殺生は、人が生きていく上では、あり得ませんので、「生き物を殺し」という部分を「不当に生きものを殺し」と書き換へました。

詠神叩 G168 (F169, B, O231, OS17)’ **G169** (F170, B, O232, OS17)’ **G170** (F171, B, O233, OS17)’ **G171** (F172, B, O234, OS17) [[@ GS14 懈]]

G168 身体がむらむらするのを、あわて落ち着けよ。身体について慎んでおれ。身体によく悪い行いをやめよ。

冗詰 身体がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。身体について慎んでおれ。身体による悪い行いを捨てて、身体によつて善行を行なえ。

G169 両葉がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。言葉について慎んでおれ。言葉による悪い行いをやめよ。

冗詰 いとばがむらむらするのを、まもり落ち着けよ。いとばについて慎んでおれ。語（コトバ）による悪い行いを捨てて、語によつて善行を行なえ。

G170 意がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。意について慎んでおれ。意による悪い行いをやめよ。

冗詰 心がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。心について慎んでおれ。心による悪い行いを捨てて、心によつて善行を行なえ。

一次 心がむらむらするのを、まもり落ち着けよ。心について慎んでおれ。心による悪い行いをやめよ。

G171 落ち着いて思慮ある人は、いかなる時でも、身を慎み、いとばを慎み、意を慎む。」のように彼らは実によく口れをまつてゐる。

冗詰 落ち着いて思慮ある人は身をつつしみ、いとばをつつしみ、心をつつしむ。」のようにかれらは実によく口れをまつてゐる。

一次 落ち着いて思慮ある人は、いかなる時でも、身を慎み、いとばを慎み、心を慎む。」のように彼らは実によく口れをまつてゐる。

(口メノム)

「護身惡行」、「護口惡行」、「護意惡行」の三つのことを表した詩だそうですが、残念ながら漢文だと、私には細かい部分がわかりません。詩中の「むらむら」という表現は制御の難しさを表しているのでしょうか。

原始仏教では怒りは不運だと捉えているようです（詩G185）。怒り自体は、付録5 心の汚れ（一）汚れと煩惱で考察したように、心の汚れによって下地が作られますから、本人の責任です。ただ、何か起爆剤があつて怒りが噴出するというプロセスなので、大きな起爆剤が来たりしたら、やはり不運とも言えます。この不運に襲われた時には、より一層、「護身惡行」、「護口惡行」、「護意惡行」に注意を払わなければならぬといふことを教えてらつしやると思われます。あつと、いれら一つが修行なのです。

「捨てよ」は「やめよ」に書き換えます。
「善行を行え」という部分は不要ですので、削除します。

あた、「へへしお」という訳は、「惡の汚れに侵されないよ」と自分を守る」という原義の意訳として中村氏は使つたそうです。しかし、

本書を読み進めた結果、「慎む」という行為は、心が自己（副守護神様）の言うことに対応せず、己（正守護神様）を守る行為であると考えることができると思します。

GS 15 節 汚れ

本節は19詩から成ります。

詩番号 G172 (F173, A, O235, OS18) ' G173 (F174, A, O238, OS18) ' G174 (F175, A, O239, OS18) ' G175 (F176, A, O240, OS18) [[@ GS 15 汚れ]]

G172 汝はいまや枯葉のようなものである。閻魔王の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立つてゐる。しかし汝には資糧（カテ）

は資糧（カテ）も存在しない。

元詩 汝はいまや枯葉のようなものである。閻魔王の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立つてゐる。しかし汝には資糧（カテ）も存在しない。

G173 だから、心のよりどいのをつくれ。すみやかに努めよ。賢明であれ。汚れをはらい、罪過がなければ、汝はもはや生と老いとに近づかじこに近づかないとあらう。

元詩 だから、自己のよりどいのをつくれ。すみやかに努めよ。賢明であれ。汚れをはらい、罪過がなければ、汝はもはや生と老いとに近づかないであらう。

G174 聰明な人は順次に少しづつ、一刹那^ノとに、心の汚れを除くべし、—鍛冶工が銀の汚れを除くように。

元詩 聰明な人は順次に少しづつ、一刹那^ノとに、おのが汚れを除くべし、—鍛冶工が銀の汚れを除くように。

一次 聰明な人は順次に少しづつ、一刹那^ノとに、おのが汚れを除くべし、—鍛冶工が銀の汚れを除くように。

G175 鉄から起つた錆が、それから起つたのに、鉄自身を損なうように、悪をなしたならば、自分の業が罪を犯した人を悪いところ（地獄）にじこにみちびく。

元詩 鉄から起つた錆が、それから起つたのに、鉄自身を損なうように、悪をなしたならば、自分の業が罪を犯した人を悪いところ（地獄）にみちびく。

(口メヘンノ)

いわゆる、O235(G172), O236, O237, O238(G173), O239(G174), O240(G175) 詩の連続する6詩で1セットの教えですが、中村氏は、O236, O237の二つの詩は、漢訳には見当たらぬとのことから、後代に付け加えられた詩ではないかと注釈なさっています。

いの2つの詩を削除するといつて、教えが分かりやすくてスムーズに頭に流れてくるようになります。あたかも、教えが動き出す感じだよ。削除理由は、第5章削除詩の詩 O236, O237 を記すまか。

G175 : 地獄を削除します。

詩番号 G176 (F177, A, O241, OS18) ' G177 (F178, A, O242, OS18) ' G178 (F179, C, O243, OS18) [[@ GS 15 汚れ]]

G176 讀誦しなければ聖典が汚れ、修理しなければ家屋が汚れ、身なりを怠るならば容色が汚れ、なおぞりになるならば、努め励む人が汚れる。

元詩 讀誦しなければ聖典が汚れ、修理しなければ家屋が汚れ、身なりを怠るならば容色が汚れ、なおぞりになるならば、つとめ慎しむ人が汚れる。

G177 不品行は婦女の汚れである。もの惜しみは、恵みを与える人の汚れである。惡事は、じの世においてもかの世においても（つねに）汚れである。

元詩 書換えなし

G178 いのれらの汚れより、わらに根元的な汚れが、己を覆う無明である。修行僧らよ、努め励み、慎むことにより、もろもろの汚れを順次捨て、ついには無明が消滅するのを見とどけよ。

元詩 いの汚れよりもさらに甚だしい汚れがある。無明こそ最大の汚れである。修行僧らよ。この汚れを捨てて、汚れ無き者となれ。

一次 これらの汚れより、わらに根元的な汚れが、自己を覆う無明である。修行僧らよ、努め励み、慎むことにより、もろもろの汚れを順次捨て、ついには無明が消滅するのを見とどけよ。

(口メヘンノ)

G176 : 「へゝめ慎む」を「努め励む」と書き換えました。

無明 (avija) は付録5—(一)—⑥ 参照。G176, G177 詩のような汚れは、表に現れている汚れですが、これらを取り払うのは、普段の

ゆる「奇跡」と「魔法」のいふです。

「戯論」は「論と虚榮」と訳しました。

中村氏は、だいぶ冒險して詩を書き直して、うつしやるようです。

GS 16 節 欲と執着

愛執（アイシユウ）や愛欲や執著（シユウチャク）といふのは、仏教用語です。しかし、中村氏の真理の「」とばやは、「」れらを含めた語句が多用されますが、使い方に一貫性がなく、全体としてぼやけた感じが残ります。そこで、本書の再考作業のために付録5（2）執着と欲望で、「欲」「情欲」「愛欲」「執着」「妄執」「愛執」の言葉の定義を行いました。これらの定義と各詩の内容を照らし合わせて詩の再考を行います。

付録5は、この章の導入のために書いた内容が中心ですので、そちらに目を通してから、以下の再考をお読み下さい。

節題は、愛執というという曖昧な言葉ではなく、はつきりと定義できた言葉を使いたいので「欲と執着」に変更しました。本節は20詩から成ります。

詩番号 G191 (F192, B, O334, OS24) [[@ GS 16 执着と欲望]]

G191 惣（ホシイママ）のふるまいをする人には妄執が蔓草（ツルクサ）のようにはびいぬ。林の中で猿が果実を探し求めるよううに、輪廻転生し、あちこちさまよう。

元詩 惣（ホシイママ）のふるまいをする人には愛執が蔓草（ツルクサ）のよつにはびいぬ。林の中で猿が果実を探し求めるように、（い）の世からかの世へと）あちこちにさまよう。

一次 惣（ホシイママ）のふるまいをする人には執着が蔓草（ツルクサ）のようにはびいぬ。林の中で猿が果実を探し求めるように、輪廻転生し、あちこちさまよう。

（コメント）

恣（ホシイママ）のふるまいをする人とは、口、意、身体を慎まない（＝自制しない）、急けていて努めない励まない学ばない人のことです。

愛欲→執着→妄執と置き換えが変遷しました。蔓草の例えとして、愛欲よりは妄執か執着が適当だと思います。愛執や愛欲は、執着を

酒・薬物乱用については、他虐であるか自虐であるかの二元論で分類すると、自虐に入ります。一方、生きものを不当に殺す事、虚言を語る事、与えられていない物を取る（すなわち盗みと同じ）事、他人の妻を犯す事は他虐に入ります。

自虐も良くないですが、他虐に比べたらずつとましいです。お釈迦様は他虐に対しては、非常に厳しく禁じましたので、この詩は他虐行動のみで揃えます。

「自分の根本を」ですが、「自分」は「心」で、その根本は「己（正守護神様）」となります。世の中で悪い事とやれているには、その本質に他虐性と自虐性がありますから、それをよく見極めて、善惡の判断をすべきです。

G182.. 「貪り」を「貪り（妄執）」としました。

詩番号 G183 (F184, C, O249, OS18) , G184 (F185, C, O250, OS18) [[@ GS 15 汚れ]]

G183 人は、信ずるといふにしたがつて、あよお喜びにしたがつて、他の人へ施しをなすべきである。」のような施しに満足しない人は、心の安定は得られない。

元詩 人は、信ずるといふにしたがつて、きよき喜びにしたがつて、ほどいしをなす。だから、他人のくれた食物や飲料に満足しない人は、昼も夜も心の安らぎを得ない。

一次 人は、信ずるといふにしたがつて、清き喜びにしたがつて、正しく施し（布施）をなさなくてはならない。
施し（布施）に見返りを求めると汚れが増す。だから、人は施し（布施）に見返りを求めてはならない。

G184 「」の（不満の思ひ）を絶ち、根だらしにしたならば、昼も夜も心の安定を得る。

元詩 もし人が「」の（不満の思ひ）を絶ち、根だらしにしたならば、かれは昼も夜も心のやすらぎを得る。

一次 正しくほどいされた食物や飲料に満足しない出家者は、昼も夜も心の安らぎを得ず、汚れが増す。

（コメント）

前回は、お布施と解釈し、出家者へのいさめの詩として書きました。今回は、もう少し広く捉えて、お給料からお呼ばれされた時など、他人からしてもらつたことについての心得として書き直しました。もともと詩が曖昧なので、残っている本文を極力利用しました。

詩番号 G185 (F186, A, O251, OS18) , G186 (F187, A, O252, OS18) , G187 (F188, A, O253, OS18) [[@ GS 15 汚れ]]

G185 不利な骰（サイ）の田を投げたとしても、怒りに等しい不運は存在しない。迷いに等しい網は存在しない。情欲に等しい河は存在しない。妄執に等しい火は存在しない。

元詩 情欲にひとしい火は存在しない。不利な骰（サイ）の目を投げたとしても、怒りにひとしい不運は存在しない。迷妄にひとしい網は存在しない。妄執にひとしい河は存在しない。

一次 愛欲に等しい火は存在しない。不利な骰（サイ）の目を投げたとしても、怒りに等しい不運は存在しない。迷いに等しい網は存在しない。欲望に等しい河は存在しない。

G186 他人の過失は認識しやすく、自己の過失は認め難い。心の汚れた人は他人の過失を粗穀のように吹き散らすが、自分の過失は、隠してしまう。一狡猾な賭博師が不利な骰（サイ）の目をかくしてしまったように。

元詩 他人の過失は見やすいけれど、自己の過失は見がたい。ひとは他人の過失を粗穀のように吹き散らす。しかし自分の過失は、隠してしまう。一狡猾な賭博師が不利な骰（サイ）の目をかくしてしまったように。

一次 他人の過失は認識しやすく、自己の過失は認識し難い。心の汚れた人は他人の過失を粗穀のように吹き散らすが、自分の過失は、隠してしまう。一狡猾な賭博師が不利な骰（サイ）の目をかくしてしまったように。

G187 「元詩」 他人の過失を探し求め、つねに怒りたける人は、煩惱の汚れが増大する。かれは煩惱の汚れの消滅から遠く隔つている。

一次 他人の過失を探し求め、つねに怒りたける人は、心の汚れが増大する。その人は心の汚れの消滅から遠く隔つている。

(コメント)

G185 : G104 と同型の詩です。「情欲」と「妄執」を入れ替え、これらが並ぶように文を入れ替えます。本書におけるこの2語の定義は「付録5 心の汚れ（2）欲と執着」を参照。

G186 : 全ての人が、詩に書かれたようであるとは限りませんので、主語を、「人」から「心の汚れた人」と書き換えます。

「見る」という言葉だと曖昧なので、「認識」（ある物事を知り、その本質・意義などを理解する）と。また、そういう心の働き。goo 辞書より) とします。

G187 : 煩惱とは「煩つている脳」つまり「心の汚れにより誤動作している脳」のことです。このため、「煩惱の汚れ」→「心の汚れ」→

「煩惱の汚れ」という置き換えた変遷をしました。詳細は、「付録5 心の汚れ（1）汚れと煩惱」を参照。

G188 「元詩」 G188(F189, C, O226, OS17) , G189(F190, C, O254, OS18) , G190(F191, C, O255, OS18) [[@ GS 15 汚れ]]

G188 人が、涅槃（悟りによる解脱）を得ようとめざし、常に田やめているように昼も夜も学び努めるならば、もうもろの汚れは消え失せる。

元詩 ひとがつねに目ざめていて、昼も夜もつとめ学び、ニルヴァーナを得ようとめざしているならば、もうもろの汚れは消え失せる。

一次 人が、ニルヴァーナを得ようとめざし、常に目ざめているように昼も夜も学び努めるならば、もうもろの汚れは消え失せる。

G189 「魔の通力による」虚空には正しい道がなく、（仏道から外れた）外道には道はない。愚者は論と虚栄を楽しむが、修行完

成者はこれら汚れの現れを楽しまない。

元詩 虚空には足跡が無く、外面的なことを気にかけるならば、【道の人】ではない。ひとびとは汚れのあらわれをたのしむが、修行完

成者はこれら汚れの現れを楽しまない。

一次 心の汚れた人たちは汚れのあらわれを楽しむが、学び努める人たちは汚れのあらわれを楽しまない。

G190 「魔の通力による」虚空には正しい道がなく、外道には道を実践する人はいない。因縁（いんねん）によつて生じた現実

の事象は無常だが、み仏（ブッダ）には動搖はない。

元詩 虚空には足跡が無く、外面的なことを気にかけるならば、【道の人】ではない。造り出された現象が常住であることは有り得ない。真理をさとつた人々（ブッダ）は、動搖することがない。

一次 造り出された現象が常住であることは有り得ない。真理をさとつた人々（ブッダ・真人）は、汚れがなくなつたので、動搖することがない。

(コメント)

G188 努め励むこと（学び努めると書き換えますが）は人が目覚める（覚醒する）ための修行です（付録3参照）。ですから、この教えは展開が逆です。

ひらがなを漢字へ書き換えます。

「OSI4 節 怒り」から移動しました。

この詩の教えと類似の教えが、GS9 節 楽しみ G106 詩 です。

G189, G190 萩原雲来氏の法句經では、

O254 : 虚空に（鳥の）跡なく、外道にサモンなく、愚夫は戯論を樂ふ、如來に戯論なし。

O255 : 虚空に（鳥の）跡なく、外道にサモンなく、有為に在常なく、ブッダに動乱なし。

萩原氏の法句經を元に現代語に訳しました。「虚空」は G051 詩参照。

「虚空に（鳥の）跡なく」は、虚空自体が「真理がない」と「偉大な法」の対極的な意味を含むのですが、

今回は「虚空を外道のもの」として対応を取りましたので、前者の意味で詩を訳しました。「魔の通力による」虚空」とは、いわ

「いの苦しみ」とは、執着しても得られないという苦しみでしょう。

詰浦叩 G198 (F199, C, O339, OS24) [[@ GS 16 執着と欲望]]

G198 いの世の中には、快いものに向って流れの激流があり、その流れは、妄執をいだく人を漂わし去る。—その流れとは、ましゃく在する様々な欲である。

元詰 快いものに向って流れの三十六の激流があれば、その波浪は、悪しき見解をいだく人を漂わし去る。—その波浪とは貪欲にねらした想いである。

一次 いの世の中には、快いものに向って流れの激流があり、その流れは、執着をいだく人を漂わし去る。—その流れとは、ましゃく在する様々な欲である。

(口メヘル)

三十六の激流は、諸説あり、これと云つて決め手となる説がないので、記述から外します。

いの詩の波浪とは、この激流によつてできる流れです。また、これを私たち人間が止める事はできないとするのが、本書の立場でした。したがつて、「波浪が想」ではなく、「その流れは、あわしく様々な欲である」という内容に書き換えます。

詰浦叩 G199 (F200, C, O341, OS24) ' G200 (F201, C, O340, OS24) [[@ GS 16 執着と欲望]]

G199' |R詰 人の快樂を求める執着は、はざいぬもので、おた愛欲と愛執で潤われる。実に人々は歡樂にふけり、楽しみをもとめじ、生れと老衰を受ける。

元詰 人の快乐ははびいるもので、また愛執で潤される。実に人々は歡樂にふけり、楽しみをもとめて、生れと老衰を受ける。

一次 人の快樂を求める執着は、はざいぬもので、また心の汚れで潤される。実に人々は歡樂にふけり、楽しみをもとめて、生れと老衰を受ける。

G200 (情欲の) 流れは至るといふに流れる。(妄執の) 蔓草は芽を生じつゝある。その蔓草が生じたのを見たならば、知慧によつてその根を断ち切れ。

元詰 流れ(欲望)は至るといふに流れる。蔓草(執着)は芽を生じつゝある。その蔓草が生じたのを見たならば、知慧によつてその根を断ち切れ。

一次 (愛欲の) 流れは至るといふに流れる。(欲情の) 蔓草は芽を生じつゝある。その蔓草が生じたのを見たならば、知慧によつてその根を断ち切れ。

妄執と変化させる脛杖のやうなものでしょべ。つまり、執着・愛執は心の汚れですが、その上流に心の汚れの愛欲と愛執が存在していると考へます。G192, 193 詩参照

詰浦叩 G192 (F193, B, O335, OS24) ' G193 (F194, B, O336, OS24) [[@ GS 16 執着と欲望]]

G192' |R詰 いの世におひて執著のやうじぬいのやうく愛欲のなすがおおむね人は、もろもろの憂いが増大する。—雨が降つたあいの世から落ちるよい。

一次 いの世におひて執着のものであるうずく汚れのなすがままである人は、もろもろの憂いが増大する。—雨が降つたあとにはビーラナ草がはぢりぬむべし。

G193' |R詰 いの世におひて如何ともし難いのやうく心の汚れを断つたならば、憂いはその人から消え失せる。—水の滴が蓮華から落ちるよいに。から落ちるよい。

一次 いの世において如何ともし難いのやうく愛欲を断つたならば、憂いはその人から消え失せる。—水の滴が蓮華から落ちるよいに。

(口メヘル)

G191 詩の口メヘル参照

G192 : 「執著(悪的執着)」=「妄執(票的執着)」≠「執着(執着全般)」。付録5 (2) 参照。

詰浦叩 G194 (F195, C, O212～O216, OS16) ' G195 (F196, C, O212～O216, OS16) [[@ GS 16 執着と欲望]]

G194 快楽への情欲から愛欲と妄執が生つる。快楽への情欲を離れたならば、愛欲と妄執が減る。

G195 情欲と妄執から憂いが生じ、情欲と妄執から恐れが生じる。情欲と妄執を離れたならば、憂いは存しない。どうして恐れがある」とがあるうか。

元詰 212: 愛するものから憂いが生じ、愛するものから恐れが生ずる、愛するものを離れたならば、憂いは存しない。どうして恐れるといふあつつか?

213: 愛情から憂いが生じ、愛情から恐れが生ずる。愛情を離れたならば憂いが存在しない。どうして恐れるといふあるうか?

214: 快楽から憂いが生じ、快楽から恐れが生じる。快楽を離れたならば憂いが存在しない。どうして恐れるといふあるうか?

215: 欲情から憂いが生じ、欲情から恐れが生じる。欲情を離れたならば、憂いは存しない。どうして恐れるといふあるうか?

216：妄執から憂いが生じ、妄執から恐れが生じる。妄執を離れたならば、憂いは存しない。どうして恐れる」とがあるうか。

一 次 G194：欲の快樂から多くの執着が生じる。欲の快樂を離れたならば、執着が減る。

一 次 G195：心の汚れから憂いと恐れが生じる。心の汚れを離れたならば憂いと恐れは存在しない。

(口メヘント)

OS16 節 愛するもの から移動。

第一に、「これららの5詩は、「○から憂いが生じ、○から恐れが生じる。○を離れたならば憂いが存在しない。どうして恐れる」とがあるうか？」という詩形が共通です。

○の部分は、愛するもの、愛情、快樂、情欲、妄執です。「愛するもの、愛情、快樂、情欲」は執着する対象です。「妄執」は、執着です。しかし、生活する上で絶対に否定してはならない「愛するもの」と「愛情」については、削除とします。

第二に、「快樂」「情欲」「妄執」の関係は、「快樂への情欲に妄執する。」となります。→ G194 詩にします。

第三に、「憂いが存在しない。どうして恐れることがあろうか？」は、この関係が不明瞭なので、「どうして恐れることがあろうか？」ではなく、「○を離れたならば憂いと恐れは存在しない。」としましよう。よって、基本詩文形「○から憂いが生じ、○から恐れが生じる。○を離れたならば憂いと恐れは存在しない。」を使用し、○の部分に「情欲と妄執」を入れ G195 詩とします。

「欲と執着（＝情欲と妄執）」で憂いと恐れを生む根源的な原因として「快樂を知り、快樂を求める欲に執着し、それを失う」とや手に入らないことなどに「喜一憂する」が考えられます。ちなみに、憂いと恐れは根本煩惱（六汚れ）ではなく、随煩惱になります。これらが、私たち人間の心に大きな負荷となるのはお分かりいただけるでしょう。

これらの詩は、大変、強い思考ループがかかった詩だったと思います。解散した章「愛するもの」にあつたのも、後からの改ざんで編入されたとも考えられるのですが、詩形がしつかりしている部分もあつたので、残しました。

お釈迦様が、定義のはつきりしない曖昧な言葉を並べて教えをお説きになることはありえないです。

これら5詩に関して、中村氏の注釈は、唯一、執着に関する詩 O216 で、音韻についてのみ言及しています。

詠诵印 G196 (F197, C, O337, OS24) || @ GS 16 執着と欲望]]

G196 ゃあ、皆さんに告げます。——に集まつた皆さんに幸あれ。妄執の根（愛欲と愛執）を掘れ。

G196 ゃあ、皆さんに告げます。——に集まつた皆さんに幸あれ。妄執の根（愛欲と愛執）を掘れ。

(香しい) ウシーラ根（正しい教え）を求める人が（雑草の）ビーラナ草（悪魔の教え）を掘るように、また、葦が激流に碎かれるように、魔にしばしも碎かれてはならない。

元詩
元詩
元詩
元詩
元詩

さあ、みなさんに告げます。——に集まつたみなさんに幸あれ。欲望の根を掘れ。——（香しい）ウシーラ根を求める人がビーラナ草を掘るよう

さあ、皆さんに告げます。——に集まつた皆さんに幸あれ。執着の根（心の汚れ）を掘れ。

(香しい) ウシーラ根（正しい教え）を求める人が（雑草の）ビーラナ草（悪魔の教え）を掘るように、また、葦が激流に碎かれるように、魔にしばしも碎かれてはならない。

(口メヘント)

欲望は、人間にはどうにもできない」という立場なので、「欲望の根を掘れ」ではなく、「妄執の根を掘れ」と書き換えます。妄執の根は愛欲と愛執です。

「ウシーラ根」は、薬草や香油の原料で、古くからインドで栽培されている植物の根つ」()から香油を絞るらしいです。」なので、正しい教えのことを指しているようです。ビーラナ草は、どうやら、ウシーラによく似ているようですが、掘り出して絞つてみても香油は出ないもののようにです。つまり、ビーラナ草は、正しい教えに偽せた悪魔の教えのようです（なるほどです…）。大概の良い人がハマつてしまふパターンです。）。

したがつて、正しい教えを探求しようとしても、常に執着の根を掘る努力をしないと、ウシーラ根（正しい仏法）ではなく、ビーラナ草の根つ」（悪魔の教え）を掘つてしまふ」とを教えています。

詠诵印 G197 (F198, B, O338, OS24) || @ GS 16 執着と欲望]]

G197 たとえ樹を切つても、もしも頑強な根を断たなければ、樹が再び成長するように、妄執の根源となる潜勢力（愛欲と愛執）を滅ぼさなければ、妄執による苦しみはくりかえし現われ出る。

元詩
元詩
元詩
元詩
元詩

たとえ樹を切つても、もしも頑強な根を断たなければ、樹が再び成長するように、妄執（渴愛）の根源となる潜勢力をほろぼさないならば、この苦しみはくりかえし現われ出る。

たとえ樹を切つても、もしも頑強な根を断たなければ、樹が再び成長するように、執着の根源となる潜勢力（心の汚れ）を滅ぼさなければ、執着による苦しみはくりかえし現われ出る。

(口メヘント)

潜勢力は、心の汚れではありますが、この場合は「愛欲、愛執」でしょう。